提督秋山眞之

秋山眞之會編

Self floor #C11

岩波書店

秋山武秀文精選

東郷元帥題字

てしにのもしれらせ滝澤に爲の書本に特が帥元
るあでのもたし顧を人のそ督提山秋は文精武秀

priority ③

（影攝年四正大）之眞山秋督提

第三図　ビルの谷間に残る木造二階建の家

[illegible]

巻頭に寄す

日露戰爭は皇國の興廢を決する分岐點であつた。此の戰爭に際し帝國聯合艦隊司令長官東郷海軍大將の帷幄に參じて作戰參謀の重任に膺り、善謀善斷遂に克く我に二倍する露國の艦隊を旅順口に擊ち、日本海に敗つて完全に之れを擊滅し、以て日露戰爭の勝利を決定せしめたるものは、時に海軍少、中佐であつた提督秋山眞之其の人である。彼は實に東郷長官の懷刀であり、聯合艦隊の智惠袋であつた。

秋山提督は通稱を淳さんと呼び、僕と同郷の先輩であつた。令兄は騎兵の秋山として我が陸軍部内に鬼將軍の名を馳せたる故好古大將である。父母の顏さへ知らぬ孤兒であつた僕は幼少の頃伯父の家に厄介となつて居た。その家の伯母さんといふのが秋山家と親戚で、たしか淳さん等とは從姉弟の關係であつた。そんな譯で毎年正月頃になると、僕の從兄等が淳さんに牛若天狗や加藤清正などの紙鳶繪を畫いて貰つて來るので、僕も秋山淳さんといふ繪の上手な人のあることを知つて居た。その頃淳さんは十四五歳で、僕は七八歳であつたと思ふ。

其の後淳さんは東京へ學問に行つたといふことを聞いたが、それから何年の後であつたか、或る年の正月に淳さんは僕のかゝつて居る家へ年賀に來たことがある。家の人の談では淳さんは海軍さんになつたのだと云ふことであつた。その時代の少年であつた僕等には海軍が何の事か判らなかつたが、唯玄關に脱いであつた淳さんの金ボタン付の軟かで暖かさうで艶のある美しい外套を、從弟と二人でそつと觸つて見ては其の立派なのに驚きながら、こんな服を著る人は餘程偉い人に違ひないと思つた。金釦の外套などは十五萬石の城下では其の頃まだ見たことが無かつたのである。當時、眞之氏は後年大空に雄飛する鴻鵠の卵として江田島海軍兵學校の生徒であつたのである。

その年の夏であつたと思ふ、江田島から夏期休暇で歸鄉して居た淳さんは「御園ひ」池と呼ぶ青少年の集合所ともいふべき水練場へ毎日通つて居た。或る日聯隊の兵士が水練場へ來て、場員の制止を肯かず無斷で、反則で水泳を始めたので、それを見て居た淳さんは、他の者が逡巡して居る間に斷然起つて、水練場の慣例たる或る種の制裁を兵士達に加へたことがある。之れが爲め秋山淳さんの勇名は鄉黨青少年の間に鳴り響き、僕等も淳さんを英雄の如く尊敬したものである。

僕が海軍出身を志すに至つたのも、一は淳さんの美しい外套の魅惑と、一は淳さんに對する英

雄崇拜とが大なる因を爲して居ることを疑はない。

群秀を抜いて兵學校を首席で卒業した秋山眞之氏は最早や牛若天狗の紙鳶繪畫きではなく、帝國海軍の立派な將校である。少尉の時には英國で建造の軍艦『吉野』の回航員に選ばれたり、大尉になつては米國へ留學を命ぜられたり、海軍の寧馨兒として其の名聲鄉黨に嘖々たるものがあつた。併し僕は之れまで水練場の遠見以外に眞之氏と會つたことはなかつた。

僕が海軍中尉で軍艦『初瀬』に乘組中、同艦が常備艦隊の旗艦となつたことがある。當時海軍少佐であつた秋山眞之氏は艦隊參謀として司令部と共に『初瀬』に乘艦して來た。此の時僕は初めて親しく同氏に會つたのである。

脊はあまり高くはないが體はガッチリと締つて、顏は文字通りの炯眼隆鼻で、眉が濃く、口が締り、見るからに俊敏精悍の相貌を現はして居た。邊幅を飾らず、細行を顧みず、擧措極めて無頓著で寧ろグラシが無いと言ふ方に近く、氣取らざる自然のまゝの東洋豪傑風の趣があつた。

その後間もなく彼は海軍大學校教官に轉任して『初瀬』を去ることとなつた。退艦する時僕は私室に呼ばれて、「何でも好いから一つの科目を專心研究して其の途のオーソリチーにならなくちやいかん、お前等のやうにブラ〳〵と其の日暮しぢや駄目だぜ」といふ訓戒を受けた。だが僕

はその訓戒を守ることの出來なかつたことを今尚ほ深く先輩に對して慚づる。

別後二年ならずして日露戰爭が開始され、眞之氏は聯合艦隊參謀として大學に於ける講義を海上に實演することとなつた。蛟龍正に雲雨を得たるものである。此の戰爭に於ける彼の活動は本書に詳述されてある通り誠に目覺ましき至りで、頭腦の明敏、信念の强固、精力の絶倫、實に人間業を超絶して居るものがあつた。

彼は人間の經驗と識見とが共に豐熟して大事を爲すは將に之れからといふ五十一歳で、病の爲めに逝いた。官は海軍中將であつた。大將すら大量生產の今の時に於て中將の官は彼の爲めに決して高しとは言へない。海軍々人として彼が國家に盡したる偉勳大功は官位を以て量るには餘りにも大きく、大將元帥を以てするも尚ほ足れりとしないであらう。

彼は名參謀として優れたる才能を發揮した。併しそれは彼の全幅を現はすものでなく、彼は寧ろ三軍を統帥する大將軍の器であつた。否な彼は決して一介武弁の人でなく、右に三軍叱咤の劍を揮ひ、左に天下經綸の略を有せる文武兼備の大才であつた。

歳寒うして姿を懷ふと言ふが、今日の非常時に臨んで此の人を思ふこと誠に切なるものがある。一九三六年が日本海軍の危機線だと言はれて居る。此の國難を乘り切つて國家を泰山の安きに置く第二の秋山の出現を望んで止まない。

此の時に當り「提督秋山眞之」の發刊せられることは誠に意義深しと言ふべく、亡き先輩を想ふて不才を顧みず卷頭に一言する所以である。

因に言ふ。此の書は曩に秋山眞之會に於て編述し「秋山眞之」として限定出版されたものを普く世に識らしむべく、解り易く又系統立てゝ書き改められたものである。現代日本海軍に於ける兵學の鼻祖にして日露戰爭に於ては東郷司令長官と併せ稱せらるべき故名將の遺業と爲人とを偲ぶには、誠に好適の書であると信ずる。

昭和九年一月

水野廣徳

目次

天氣晴朗なれども浪高し……一
提督の兩親と兄弟……四
泣き蟲と餓鬼大將……八
親思ひ……一〇
少年戰術家……一四
凧繪と歌……一七
嚴しかつた好古將軍……二〇
正岡子規と提督……二五
兵學校時代……三〇

提督の勉强……三二
用兵作戰の天禀……三五
野球と禪論……三六
機敏豪膽……四〇
同郷會の蠻風……四三
決死隊に加はる……四五
威海衛の戰況……四七
既に立派な參謀……五一
廣瀨中佐と提督……五五
提督の結婚……五七
米西戰爭と圖上演習……五八
星亨に一矢……六〇

天劍漫錄……六一
大學校教官時代……六五
秋山提督の大決心……六八
宣戰布告さる……六九
母堂の激勵……七一
さながら手足の如くに……七三
三笠艦上の名參謀……七五
先づ旅順口の水雷攻擊……七九
無造作な命令……八六
黄海の戰……八九
神靈の祈願空しからず……九八
旅順の開城……一〇一

曠古の日本海々戰……一〇三
練りに練つた七段構……一〇五
有名な丁字戰法……一〇七
盡戰＝一舉擊滅……一一
追擊また追擊……一一八
夜戰＝驅逐隊、水雷艇隊の夜襲……一二一
古今未曾有の大勝利……一二五
敵屍に祈る……一二八
天佑と神助……一三二
海軍兵學上の功績……一三四
兵理の會得……一三八
秋山軍學の基調……一三九

海賊戰法と甲越軍學……一四二
戰爭不滅論……一四六
秋山文學……一五三
議會で代表報告……一五六
再び大學教官に……一五七
大演習の明斷……一五九
立派な副長……一六三
部下を勞はる……一六五
艦內の諸改革……一六七
修養の人……一六九
青年指導……一七一
小村侯と提督……一七九

目次

シーメンス事件と軍務局長……一八〇
支那の革命と提督……一八二
世界大戰と提督……一八六
パリの密電……一九〇
ギャングを挫く……一九三
閑日月の一年……一九五
嚴父且つ慈父……一九七
提督の婦德觀……一九九
提督の大往生……二〇三
葬儀、追悼會……二〇九
熱火の愛國心……二一〇
銅像……二一三

天氣晴朗なれども浪高し

「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動之れを撃滅せんとす。本日天氣晴朗なれども浪高し」

日本の國運を賭けた日本海々戰の當日、我が聯合艦隊が之れから根據地を出發しようとする時に、東鄕司令長官から、我が大本營に發せられた第一報は之れだつた。

ロシアのバルチック艦隊來るといふ報道は、幾月かの間絶えず日本全國民の熱血を沸騰させた。對馬海峽か、津輕海峽か、敵艦隊は果してどの航路を執り、どこに現はれるか、之れを判定するに艦隊の主腦部は相當頭を惱ました。國民も不安の胸をわく〳〵させてゐた。其のバルチック艦隊が、いよ〳〵日本海に現はれたのだ。

「決戰だ」

聯合艦隊の將士は勇躍した。此の緊張裡に「敵艦見ゆ」の報告文は發せられたのである。「本日天氣晴朗なれども浪高し」。さながら其の日の日本海を目のあたり見るやうである。心憎いほ

と簡潔で詩味を帶びた名文ではないか。

日本海々戰の前には黃海の戰があつた。此の海戰は、旅順口に居た敵艦隊との戰爭で日本海の時よりも、もつとむつかしい戰であつた。此の外にも旅順方面では幾多の海戰があつた。其の中には「舷々相摩す」といつたやうな驅逐艦同志の勇ましい戰爭もあつた。而かも我が軍連戰連勝で、「東洋艦隊の擊滅」「バルチック艦隊の全滅」と引續く勝報に國民は躍り上つて喜んだ。それと同時に、國民は、詩のやうな短かい文章ではあるが、非常な力强さで、其の戰況を眼前に見せてくれるやうな名報告文に唸らされた。

其の報告文の筆者が、聯合艦隊の名參謀秋山眞之提督であることは餘りにも有名である。誰いふとなく、

「秋山の戰爭文學」

といふ名が出來てしまつた程で、國民は、此の戰報を見るたびに醉はされたやうな氣持になつてしまふ。

だが其の秋山眞之提督を、全體から眺めたならば、さうした報告文の如きは、提督のほんの餘技に過ぎない。

旅順方面の海戰にしろ、日本海の海戰にしろ、其の作戰計畫は、殆んど全部秋山提督一人の頭から搾り出されたものである。

日本が興るか、滅びるかといふ大事な戰爭を前にして、秋山提督は、其の謀略や作戰やについて、どんなに苦心したかわからない。夜も唯うと〳〵とまどろむくらゐで、ほんたうに枕を高くして安眠したといふことはないほどであつた。それでも頭はいつも氷の如くつめたく澄んでゐた。そして旅順に立て籠つてゐた東洋艦隊をやツつけるには——それを援けにやつて來ようとするバルチック艦隊を擊滅するには——と其の事ばかりで常に頭は一杯だつた。

海を壓する砲聲、稻妻のやうな砲火、逆卷く海浪、飛び散る血潮、さうした凄じい戰鬪の眞つ最中に在つても秋山參謀の頭は、秋の水のやうに澄み切り、冬の月のやうに冴えきつて、神策鬼謀といつたやうな名作戰が滾々として泉のやうに湧いて出た。が其の一方では、先にいつたやうな名報告文が、次から次へと流れ出たのである。どうしたつて人間業ではない、神技である。

「秋山の頭には抽斗がいくつもあつて、其の折に觸れ、時に應じて幾らでも必要なものが引出されるのだ」

と云つた人がある。全くうまい批評である。

提督の兩親と兄弟

秋山眞之提督の令兄は騎兵の秋山で有名な好古大將である。好古將軍は現職を退いてから鄕里松山（愛媛縣）の北豫中學校といふ一私立中學校の校長となつたが、誰いふとなく「日本のヒンデンブルグ」と呼ばれてゐた。典型的な古武士型の人だつた。其の好古將軍が松山の中學校長時代に住んでゐた中歩行町の家が、昔からの秋山家の邸であつた。好古將軍も眞之提督も其の家で呱々の聲をあげた。

嚴父は平五郎久敬といつて舊藩時代は徒行目付であつた。體もがつしり大きかつたし、人物も體のやうに大きかつた。寛容で衆望の厚かつた人だつた。初めは普通の徒行であつたが、智者であり儒者でもあつたので、遂に徒行目付にまでなつた。親族中で何か紛擾が起つて、どうにも解決が出來ないやうな時にはきつと久敬翁の所へ持ち込まれた。翁はそれを何時も手際よく捌いた。

久敬翁は、晩年には室内でも頭巾を冠つてゐた。冬になるといつも火燵にもぐり込んでゐた。さうして、

「親があまり偉くなると子供が偉くならないからなあ」

と自分を卑下して暮らして居た。

邸には土藏も一棟あつた。現在でも其のまゝ殘つてゐる。本宅は屋根の低い平屋で、門から飛石傳ひに玄關、玄關の庭は暗くはあるがかなり廣く、板戸を開けて取次の人が出て來るやうになつてゐる。昔の武家屋敷の面影が今日でも殘つてゐる。

好古將軍は其の邸が懷かしかつたのであらう。松山に歸ると其の家に住んだ。唯表通りの垣が、其の地方の、殊に武家屋敷の町では、寒竹垣といふ竹垣で、之れが一つの地方色だし特色ではあつたが、季節に依つて笹が落ちて、まばらに家の中が透いて見えるやうになるので、寒竹垣をコンクリートの塀に模樣替した。それで幾分殺風景にはなつたが、それ以外は昔のまゝの家であつて、好古將軍が住むには質素で適はしい家だつた。

久敬翁は文政五年生れ、明治二十三年、六十九歳で逝つた。好古將軍は七十になつた時「俺はおやぢより長く生きたんぢやから――」といつて、自分はもう何時死んでも心殘りはないやうなことを云つてゐた。眞之提督よりは好古將軍の方が、體付から性格まですつかり俗にいふ親譲りでよく翁に似てゐた。

世帯は貧しいので雑穀問屋を出て正貞氏の二女、文政十年生れだから久敬翁とは五つ違ひ、明治三十八年六月九日老衰病死、野乗院慈恵貞孝大姉の戒名で逝去した。此の時堂が賢夫人であつた。禮は久敬翁と同じく浄土宗に帰依し、小柄な方であつたが健やかだつた。聰明でもあつたし柔順でもあつた。

八歳くらゐの時に家父郎といふ幼い弟と背負つて附近の福正寺川といふ川邊へ行つた。松山の川には「まい〳〵、つむり出せ、まい〳〵、つむり出せ」と唄つてゐる可愛い黒い小さい蟲が澤山ゐた。貞子さんはそれをながめるばかりでは物足りなくなつて水面に手を伸ばしてまひ〳〵を取らうとした。その時はまだ背負つてゐる手がスッポリ背から抜け出て川中に落ち込んだ。貞子さんはまひ〳〵ところではなかつた。生命と無闇のことで、水底は暗くてゐたし、どうにも手の下しやうがなかつた。それでも『どうかして弟を救はねばならない』、さうした一心から夢中になつて水中へ手を伸ばして引き揚げようとした。折よく其處へ農夫が來かゝつて、難なく弟は救ひあげられた。貞子さんはうれし泣きに泣いた。

もう結婚の話をぼつ〳〵と持ち込まれるやうになつた時、貞子さんは「親のいひつけだつたら何處へでも行きますし、若い時の苦労はどんな苦労でも厭ひませんが、どうか老後だけは安樂に暮らしたいと思つてゐます」といつてゐた。久敬翁に嫁したのは二十五歳の時だつた。

平五郎の久敬翁は後に八十九（そく）と改め、晩年には薙髪して天然坊と號した。貞子刀自は家には姑の加井氏があり、久敬翁との間には五男一女があつたり、相當多人數の家庭であつたが、よくそれをひきしめ、注意がよく行屆いた。長男の鹿太郎則久といふ人は漢學の造詣が深く、秋山家を繼いだが、二十五歳の時に發病して家を治めることが出來なかつた。大正二年六十歳で此の人は逝去した。二男の寛二郎正矣氏は岡家を繼いだ。此の人は朝鮮京城電氣株式會社の重役奉職中に死亡した。三男は信三郎好古將軍で、四男の善四郎道一氏は西原家に養はれ才氣煥發、實業界に入つて活躍してゐたが惜しいことに若死をした。五男の淳五郎が眞之提督、其の下にゐい子さんといふ末子があつた。それらの子供たちに、貞子刀自は、男子には自ら四書五經の素讀を授け、女子には炊事から裁縫、絲車で紡ぐ事まで教へた。

姑にもよく仕へた。姑が「お貞さん、もうおやすみ」といふまで起きて裁縫をしたり、絲車をブウン〳〵と廻してゐた。四男の善四郎氏が生れると、「もう此の上男の子供はいらない」などといつてゐたが、眞之提督のやうな大人物を生んでしまつた。そして望み通り若い時には苦労もしたが、晩年は樂しい安らかな餘生が送られた。

好古將軍が滿洲駐屯軍司令官時代、福島安正將軍が北滿から歸つて貞子刀自を挨拶旁（かたがた）訪ねた。

其の時福島將軍は、

「秋山さん御兄弟は、お二方ともどうして揃ひも揃つてあんなに偉い方になられたのでせう。たぶんあなた方の御教育の力に依る事と思はれますが、どういふ御教育をなすつたのですか」

と質問した。ちよつと返答に困るやうな質問であつたが、貞子刀自は事もなげに答へた。

「私のやうな昔氣質の人間ですから、たゞ普通の事をしただけで、何も變つた教育などはいたしませんでした」

泣き蟲と餓鬼大將

好古將軍には何處かに鬼將軍とでもいつたやうな、如何にも昔の武將でも見るやうな所があつた。上原元帥なども好古將軍を評して「典型的な古武士だ、もう今後、あゝした人間は種切れになるだらう」といつてゐた。鄕里に歸つて一私立中學校長となり、子弟敎育の爲めに盡してゐた頃は、其の人格が最も完成された時であつて、一見非常に温厚な田舍の中學校長さんのやうに見えたが、それでも何處かに將軍らしい鋭さがあつた。所謂三軍を叱咤するやうな威風といつていか凄みといつていゝか、さうしたものがあつた。その好古將軍も、幼少時代には大の泣き蟲だつた。

「この子が一人前の人間になるだらうか」

と母堂の貞子刀自は心配した。

「洟をたらした泣き蟲の坊さんでした」

と大正十年位まで、殆んど五十年間も、秋山家にゐた女中の拜志クマといふ婆さんは云つてゐた。

兄の好古は毎晩のやうによく泣いたので、その度毎に此のクマ婆さんや、シゲといふ婆やさんが、裏の竹藪の所へ抱いて行つて機嫌をとつた。十五の時まで母堂の乳をいぢりながら寢たほどである。

將軍になつてからでも「俺の體は丈夫ぢやないが藥は飲まん」といつて、腹をこはすと懷爐を入れてゐた。頑强でない體を氣分でひきしめてゐたのである。

其の兄とはまるで反對に、弟の眞之は、やんちやな、いたづらッ子であつた。遊ぶ時には何時でも餓鬼大將だつた。

松山の町は加藤嘉明が築城した城山を中心としてその周圍に擴がつてゐる市街である。城山の

東麓の一角に東雲神社といふのがあり、そこに毘沙門様を祀つた堂宇があつたので、其のあたりを東雲町とも毘沙門下とも呼んでゐた。秋山家のあつた中歩行町といふのは東雲神社に近かつたが、徒行侍が居たので、さうした名稱になつたのであらう。從つて武士階級の屋敷町であつたが、東雲町は町家の町だつたので自然と子供同志も「士族の息子と町人の息子」といふ階級的團結が出來、階級的對立して何時も喧嘩をやつてゐた。

其のころの喧嘩は石投げや、竹切れや木切れなどを手に〳〵持つて突貫したりする喧嘩だつた。其の士族の方の餓鬼大將が眞之少年であつた。そんなことからよく相手の子供を泣かしたし、其の度毎に子供の親たちから抗議を持ち込まれ、いつも貞子刀自が、お詫をしなければならなかつた。

親思ひ

或る時、母堂は眞之を膝下に招いて、突然短刀を突きつけた。

「お母さんも是れで死ぬからお前もお死に」

いたづらを通り越し、亂暴に近かつた餓鬼大將の眞之は、さうした思ひ切つた訓戒を母堂から受けたことがあつた。

流石の眞之にとつても母堂はおつかない人だつた。

併し眞之は其の貞子刀自を限りなく敬慕した。彼が結婚した時でも、其の結婚の條件の一つには母堂の事が含められてゐた。

海軍兵學校卒業後少壯時代の提督は獨身主義者だつたが、其の獨身主義は時流にかぶれたものではなくて、親孝行の爲めの獨身主義だつた。いつも母堂の事を「おばあさん〳〵」といつてゐたが「嫁を貰ふのなら、おばあさんの氣に入るやうなのを貰ひたい」といつてゐた。

眞之夫人は東京の稲生眞履といふ人の三女で季子といふ名である。眞履氏は宮内省の書畫鑑定等をする人で、刀劍等もよく鑑定した人だつた。眞之が自分で選んだ愛妻は勿論刀自に氣に入りさうな人であつた。母堂によく仕へ、姑との間は極めて圓滿だつた。所謂良妻賢母であつた。

母堂はいよ〳〵結婚する時に、季子さんに、

「私の大切な眞之をお前さんに差上るのだから」

と、嚴肅な態度で言つた。母堂は非常に眞之を愛してゐたので、日露戰役の出征中は勿論、平時

の航海中でも屢〻眞之に對して送り物をしてゐたやうだつたが、そんな時眞之は包を解く前必ず押し戴くのが例であつた。あの無造作で時に傍若無人でさへあつた提督だけに、これは一入尊嚴な氣がする。

眞之も亦非常に親孝行であつた。確か靑山高樹町に住んでゐた頃、近くの親戚の家に家人が貰ひ湯に行く習慣になつてゐた。その頃母堂は病氣で足腰が充分でなかつたので、眞之は當時已に海軍佐官であつたにも拘らず、いつも自ら母堂を脊負つて貰ひ湯の往復をしてゐたのには、見る人感嘆せざるはなかつた。

母堂が亡くなつた時、兄の好古將軍は戰場にあつた。明治三十八年の六月で、奉天から昌圖に行つて滯陣してゐた時だつた。何かの記念日で蒙古の管租大臣（日本の大藏大臣のやうな人）を招いて、六月の木立に綿の雪を作つたりして祝宴を張らうといふ時、――十九日午後五時母死亡――の訃音があつた。

將軍は其の電報を手にして深く瞑目した。だが眼を開くと傍の參謀にいつた。

「此の事は誰にもいふな」

そして靜かに謹愼した。

眞之は日露の海戰も休戰狀態の時であつたので、母堂の訃に接すると直ちに歸つて其の死にめにあふことが出來た。

明治二十三年久敬翁が亡くなつた後、好古將軍は歐洲から松山の實家に歸つて來たが、其の時母堂に、

「お母さん、お父さんが亡くなつたさうぢやな」

といつたきりだつた。

眞之は母堂の顏を見ると、何もよういはなかつた。涙が頰を傳つてハラ〳〵と落ちると、默つて奥の間に入つてビシリと襖をしめ切つた。

そこに兄弟二人の性格の相違があつた。

眞之は江田島兵學校時代にも、其の後もよく墓參に歸つた。そして秋山家の墓を整理した。今松山市の公園になつてゐる石手川堤防にあつたのを道後溫泉のある湯之町の鷺谷墓地へ移したりした。母堂の墓は東京にあるが分骨して鷺谷に埋葬した。

眞之提督はさうした父母や祖先の事を常に想ひ、考へる人だつた。さうした點、提督は情味深い人だつた。提督は歸省すると北京町の村上正氏の家によく行つたし、墓地の整理にも村上家の

人を煩はしたが、花活の寸法まで書いて寄越した。提督はさうした頃から、頭の綿密な人だつた。

少年戰術家

眞之が十二三の時だつた。近所であつた今の海軍少將櫻井眞清氏の家に、岩戸流、宇佐美流の煙火傳書といふ煙火の火藥調合を書いた書物があつた。櫻井氏の嚴父が筆寫したものであつたが、それを櫻井氏の令兄瀞氏や眞之が發見した。直徑二三寸位の花火筒もあつた。

「やらうか」

「やらう」

といふので早速煙火の製造に著手した。花火殼の外側に何回も紙を貼つた。眞之少年は藥を何匁宛か量つてそれを藥研でおろして調合した。近くの野原へそれを持つて行つて揚げるとドーンと凄じい音がして開いた。眞之少年や櫻井氏たちはそれが面白くて堪らなくなつた。

「今度はお星樣だ」

といつて眞之少年が作つた、吊火裝置のしてある花火筒を野原に持つて行つて揚げてみた。ドーンと音響がしてパアンと開くと中から風船に吊られた星が現はれて、ふはり〳〵と風のまゝに空を流れた。今でも九段あたりでやる煙火の「流星」の幼稚なものだつた。

煙火はさうして子供達の興味を煽つたが、勿論それは子供の遊びの領分のものではないし、大人がやるにしても警察の取締法があつて、人家から幾らか離れた箇所でなければ打ち揚げる事は出來ないといふやうな事になつてゐた。それに大きな音響を伴ふものなのだから巡査に發見される事も早かつた。ズドーンと音がすると巡査は飛んで來て「こらあツ」と子供達を追つかけた。それがまた花火の副產物的興味にもなつた。

「こらあツ」と追つかけて來るのをどし〳〵逃げて、何處かに姿を晦ましてしまふことが、探偵物を地で行くやうな興味に子供達を追ひたてた。

花火と、巡査に追つかけられて逃げるといふ興味が、遂に甲乙なくなつてしまつた。眞之少年は持前の戰術的智囊を此の頃から發揮して其の部下の者たちにそれ〳〵の役割を與へた。

「逃げる時、誰は何を持つて逃げろ」

と命令した。櫻井眞清氏は八つ位で忠實な眞之少年の部下だつたので、火藥箱を持つて逃げる役割を命ぜられた。

「若し巡査が追つかけて來たら、之れを牛蒡畑へ投げ込んで、身輕になつて一生懸命に逃げろ」といふのだつた。牛蒡畑は葉が大きいから物を匿すには恰好の場所であつた。眞之少年は此の忠實なる部下たちを率ゐて野原に行つた。巡査を警戒すべき者には其の部署につかせ、其の他直接煙火打揚に必要なる助手にはそれを手傳はせ、相變らず花火を打ち揚げた。作戰としては實に上出來なものではあつたが、併し巡査に捕はれた。巡査は此の小生意氣な悪戯者を彼等よりも巧みに包圍し一擧に總檢擧しようと努めた。

「巡査が來た」

といふと此の悪戯者たちは一齊に蜘蛛の子を散らすやうに逃走したが、其の首魁者たる眞之少年や櫻井氏等は遂に捕はれた。

巡査は、眞之少年や櫻井氏をつれて櫻井家にやつて來て嚴談した。櫻井氏の嚴父がだん〳〵謝罪して、漸つと此の花火一件は無事に解決したが、眞之提督の頭は、もう其のころから戰術家らしい萌芽を兆さしてゐたのであつた。

凧揚と歌

松山の儒者に近藤元修といふ人があつた。今の大街道の新榮座といふ活動常設館のある少し南の方に其の塾があつた。眞之少年も櫻井氏も其の近藤塾に通つた。本挟みも今のやうなしやれた美しいものでなく、無裝飾の二枚板で、其の間に書物を挟み、板の上下に穴があいてゐて、それに眞田紐を通し、肩に引つかけて行くやうになつてゐた。

塾へは學校へ行く前に出かけるので、まだほの暗いうちから起き出て行かねばならなかつた。餘り早く行くと門が閉つてゐたので、門前に竝んで門の開かれるのを待つた。門が開くと待つてゐた順で、一二三といつたやうに寺子屋式の經机の前に坐らされて敎はるのだつたが、近藤先生直接の敎授ではなかつた。先生の代りに高弟子が論語や孟子を半枚位素讀してくれる。それからはじめて先生の前へ出て行く。先生は竹の鞭を持つて儼然と坐つてゐて、若し讀み方を誤ると、ピシリと胸に沁み入るやうに机をたゝいた。少年たちは皆ビク〳〵ものだつた。

それから學校へ行つた。學校は今赤十字社支部病院のある所で、勝山小學校といつてゐた。

中學校も小學校と棟を並べて同一構内にあつた。併句で有名な正岡子規居士も其處で學んだ。小說家の夏目漱石氏が英語の教師として來てゐたのも、建物は違ふが矢張り其の中學だつた。併し眞之少年たちが通つた時には、明倫館といふ昔の藩學の講堂を使つた粗末な校舍だつた。

俗に病院下と呼んだ所があつた。先に書いた東裏町の續きで、矢張り城山の麓に、其の當時では珍らしい洋館建の縣立病院があつたので、其の町は別に小唐人町といふ名があつたのであるが病院下で通つてゐた。其處に伊奈のをぢさんといふのがゐた。伊奈のをぢさんは舊士族の零落した人で、生活の爲めに釣道具を作つたり、風繪を描いて賣つてゐた。其の家が通學の途中に在つたので、眞之少年はよくこの伊奈のをぢさんの所に立寄つて遊んだ。提督は晩年よく繪を描かれたが少年時代から繪は好きだつた。

伊奈のをぢさんの所で風繪を見てゐるうちに眞之少年も風繪を描き出した。牛若丸と天狗だとか、源頼光の鬼退治だとか、坂田の金時だとか、其の頃の風繪はさうした武者繪が多かつた。

「天狗さあん風おくれ」といつて、子供達は野原などに行つて其の武者繪の風を揭げて遊んだ。

「淳さん繪を描いてお呉れ」

「よし來た」

といつて、淳さんは誰にでもよく風繪を描いてやつた。貞子刀自は「此の頃は淳の繪の具代がだいぶんいつて困る」とこぼしたこともあつた。淳さんは前に言つた通り眞之提督の幼名である。

眞之を二歳の時から世話をしたクマ婆さんは、彼を「八幡樣の申し子」だと頻りに吹聽してゐた。眞之が七八歳の時に、もう歌を詠んだりしたからだらう。

雪の日に北の窓あけシシすればあまりの寒さにチンコちゞまる

和歌といふには勿論取りあげていふほどのものではないかも知れないが、七八歳のころの口吟としては、矢張り後の名文提督を思はせるものがある。九歳か十歳の時には、風呂屋の揭示じみてはゐるが、それでも大分大人らしいまとまり方を見せてゐるものがある。

湯に入るに前や後ろをよく洗ひどんぶり入るは大のおきらい

眞之が近所の親戚の湯殿の羽目板に、女が後向きになつてゐる繪を描いて、それに讃のやうに書いたものだつた。

十四五歳頃になると、眞之は松山の歌人井手正雄翁（櫻井眞清氏の伯父）に就いて正式に和歌を學んだ。其の頃の歌は頗る多いが數首を左に選み出して置かう。

野外霞　　春の野に若菜をつめる乙女子はなへて霞のころもきるなり

惜　花　櫻花今をさかりと咲くものをさそふ風の風そつれなき
浦夏月　打よするなみにあつさをあらはれてうらはすゝしくやとる月かな
夏　草　此頃はゆきゝになれし旅人もまよふ夏野の深草の里
杜鵑涼　しはしとて杜の木蔭に立ちよれはたもとすゝしき夏の夕風
漁村夕　風の音も身にしむあきの夕暮にさひしくかへる海士の釣舟
深山鹿　世をすてゝ深山のいほのねさめにも友はありけりさをしかの聲
暮秋蟲　かれ殘る野山の蟲の聲々は暮行く秋のかたみなりけり
籬殘菊　暮はてし秋や籬に殘るらんうつろふ色も白菊の花
山家月　たつねくる友こそなけれ山里のふせ屋さやけき月の夜比も
夕所之松　とことはに榮ゆる御代の例には名にたかさこの松をひかはや
臘梅薫風　過去しむかしや風もしのふらん花たち花にそよくゆふへは

嚴しかつた好古將軍

秋山家は、久敬翁が徒行目付まで勤めたのだつたが、明治の御維新があり、續いて廢藩置縣となつて舊士族は忽ち失業した。久敬翁は清廉な高士であつたし、蓄財などもなかつたから、止むを得ず暫く手習ひの師匠などをやつて辛うじて生活を維持して行つた。

ある晩、久敬翁夫妻がしみ〴〵と相談してゐた。

「また一人子供が殖えたのでます〳〵困るが、どうだな、末の子供は寺へやつて坊主にでもするか」

「さうでもしなければなりますまい」

といふやうな話であつた。兄の好古がそれを次の室で聞いてゐた。

「お父さん待つとお呉れ、今に私が大きくなつたら、豆腐角ほどのを儲けてあげるからな」

と好古は健氣に言つた。兩親は「あれが、あんなにいふのだから」と、遂に眞之を寺へやることを思ひ止つた。「豆腐角ほどのを」といつたのは豆腐角ほどの厚みを持つた紙幣を蓄て儲けるからといふ意味だつた。松山の豆腐は東京の豆腐よりは遙かに厚味のある大きなものだつた。

同じ松山の舊藩士に戒田といふ人があつた。之れが秋山家の近所で風呂屋を營んでゐた。秋山家とはかなり懇意な間柄であつたので、好古等は時々風呂番に頼まれたりした事があつたが、風

[illegible]になつてゐた。「貧乏少尉にやり[illegible]生活は極めて[illegible]であつた。[illegible]當時の[illegible]の離れを借りてゐた。家は[illegible]あつたが家財[illegible]が一つあつたきりだつた。履物も晴雨を[illegible]何時も飯は釜の中に冷めたくなつてゐた。[illegible]の女中が見兼ねてそつと飯を入れておいて與れ[illegible]の主人から[illegible]借りることもあつたが、一度だつて[illegible]

[illegible]感心してゐた。そんな事から――（といふよりも[illegible]家には男の子がなかつたので）――「あゝいふ人が妻[illegible]は長女に嗣がせてもいゝから、長女を貰つて與[illegible]」といつてゐた。

それが遂に實現して其の佐久間の長女が好古の夫人になつた。

さうした切り詰めた生活ではあつたが、「田舍に置いてゐたのでは立派な男にならない。矢張り東京へ呼んで、自分が監督し、みつちりと勉强させねばならない」といふので、眞之を自分の許に呼び寄せた。

眞之が好古に呼ばれて上京したのは十五歲の時だつた。從兄の內山直枝といふ人と二人で上京した。

松山から神戶、神戶から橫濱と、未だ東海道にも汽車がない時代だつたので、小さい汽船で二人は東京に來たのだつた。

いくら鄉里では餓鬼大將であつても、一度び鄉土を離れ、長い時間を船中でばかり過ごしてゐると、何といつても田舍の少年だ。つい感傷的になつて、當時長崎にゐた岡しん子夫人――岡家を繼いだ令兄正矣（寬二郞）氏夫人――にセンチメンタルな和歌入りの手紙を船中から書き送つたりした。

好古は一切の面倒を見てくれたが、併し飴をしやぶらせるやうな可愛がりかたはしなかつた。母堂の貞子刀自が、東京は寒いだらうと思つて綿の入つた足袋を送つて來ると、好古は「贅澤だ」といつて脫がせてしまつた。

或る時眞之が頻りに新聞を讀んでゐると、好古がいきなりそれを取りあげて叱りつけた。

「まだ頭のかたまらないうちに、新聞などを讀んではいかん」

眞之の直ぐの兄で西原家を繼いだ道一（善四郎）氏が横濱で貿易商を營んでゐた。二十二三歳で才氣の溢れた人だつた。其の家へ眞之は時々遊びに行つたが、あまり汚ない風體で行くので道一氏が困つた。「是れでも結んでをれ」といつて、其の頃流行つてゐた縮緬の兵兒帶をやつた。それを結んでゐると好古が、

「誰にそれを貰つたんだ」と叱りつけた。

「横濱の兄さんからです」といふと、

「そんな贅澤なものを締めるな」と解かせてしまつた。

それ以後、眞之は縮緬の兵兒帶を行李にしまつて結ばなかつた。

或る雪の日、眞之が玄關で何かグズ〳〵してゐると、好古が出て來て、

「何をしとるんぞ」

「下駄の鼻緒が切れてるから直してゐるんです」

「跣足で行け」

と叱鳴られた事もあつた。

教育方面ではそれほど峻嚴な兄であつたが、斯うした兄を持つてゐた事が、そして其の上に立派な兩親を持つてゐた事が、後日の眞之提督を作りあげたのであらう。

晩年眞之提督は、自分の家に訪ねて來るやうな人々には、親戚の誰人であり年長者であらうと、自分が床の間を脊にして坐り、決して其の座を與へなかつたが、唯好古將軍が訪ねて行つた時だけは、自分で立つて座布團を裏返し、好古將軍を床の間の方に坐らせ禮儀を正した。そして何時も第三者に言つてゐた。

「自分がこれまでになつたのは、陸軍の兄のおかげだ」

正岡子規と提督（大學豫備門時代）

明治十七八年ごろだつた。眞之は好古の家を出て、友人の正岡子規等と神田の猿樂町の下宿にゐた。今の一高の前身である大學豫備門に通つてゐたのである。二階の八疊の室に眞之と、俳聖子規とが机を竝べて居た。

或る時眞之が頻りに新聞を讀んでゐると、好古がいきなりそれを取りあげて叱りつけた。

「まだ頭のかたまらないうちに、新聞などを讀んではいかん」

眞之の直ぐの兄で西原家を繼いだ道一（善四郎）氏が横濱で貿易商を營んでゐた。二十二三歳で才氣の溢れた人だつた。其の家へ眞之は時々遊びに行つたが、あまり汚ない風體で行くので道一氏が困つた。「是れでも結んでをれ」といつて、其の頃流行つてゐた縮緬の兵兒帶をやつた。それを結んでゐると好古が、

「誰にそれを貰つたんだ」と叱りつけた。

「横濱の兄さんからです」といふと、

「そんな贅澤なものを締めるな」と解かせてしまつた。

それ以後、眞之は縮緬の兵兒帶を行李にしまつて結ばなかつた。

或る雪の日、眞之が玄關で何かグズ〳〵してゐると、好古が出て來て、

「何をしとるんぞ」

「下駄の鼻緒が切れてるから直してゐるんです」

「跣足で行け」

と敗鳴られた事もあつた。

教育方面ではそれほど峻嚴な兄であつたが、斯うした兄を持つてゐた事が、そして其の上に立派な兩親を持つてゐた事が、後日の眞之提督を作りあげたのであらう。

晩年眞之提督は、自分の家に訪ねて來るやうな人々には、親戚の誰人であり年長者であらうと、自分が床の間を脊にして坐り、決して其の座を與へなかつたが、唯好古將軍が訪ねて行つた時だけは、自分で立つて座布團を裏返し、好古將軍を床の間の方に坐らせ禮儀を正した。そして何時も第三者に言つてゐた。

「自分がこれまでになつたのは、陸軍の兄のおかげだ」

正岡子規と提督（大學豫備門時代）

明治十七八年ごろだつた。眞之は好古の家を出て、友人の正岡子規等と神田の猿樂町の下宿にゐた。今の一高の前身である大學豫備門に通つてゐたのである。二階の八疊の室に眞之と、俳聖子規とが机を竝べて居た。

下宿屋は間口の廣い大きい家であつた。入つた所が土間、それから板の間があつて其の奥の見付のところに炊事場が見えてゐた。其の板の間から二階への階段がついてゐたが、二人のゐた室は日南向きの明るい室で床の間もあつた。兩側が壁で、入つた左側に秋山、右側に子規が陣取つてゐた。

二人の友人で、連雀町にゐた柳原極堂といふ人が或る朝、二人の下宿を訪ねた。丁度飯を食つてゐる時だつた。女中が給仕をしてゐた。其の時どちらが云ひ出したのだつたか、お汁のお代りを請求した。すると女中が「お汁は一杯きりです」といつて應じなかつた。

「もう鍋にないのか」

「ある事はあります」

「あるのなら出せ」

「あつても、おかみさんがちつとにらんでるから駄目です」

そんな押問答を頻りにやつてゐたが、どうしても女中を動かす事が出來なかつた。

「そんなら僕ら二人が、毎朝お前に英語を一つ宛教へてやるが、其の代りお汁を誤魔化して持つて來い。そんなら宜いだらう」

「さあ」

と女中はちよつと考へてゐたが、漸つと此の交換條件で妥協が成立した。

「とにかく下へ行つてみませう」

といふので下りて行つたが、間もなく溫かい湯氣の立つたお汁の代りを持つて來て、

「おかみさんがちよつとわきみをしてゐる間にごまかして來たんですよ」

と辯解を附け加へた。其の時二人が女中に教へた英語といふのが、

「アイ・サンキュウ・ベリーマッチ」だつた。

晩飯の箸を置くと「さあ行かう」といひだすのは眞之だつた。行かうといふ所は寄席だつた。小川町には小川亭といふのがあり、萬世橋のところには白梅といふのがあつた。其の他にもいろいろの寄席があつたが、小川亭がいちばん近いので小川亭に出かけた。其のころは大きな下足札を呉れてゐた。

今は寄席も落語も凋落してゐるが、其のころはまだなか〳〵盛んな時代で、落語家にも良いのがゐた。併し何時だつて前座にはまづいのがゐるに定つてゐる。すると眞之が、みんなの下足札

を集めて「ダメダメ」なんて歌唱りながら、其の下足札をパチ〳〵打ち鳴らして叩きおろしてしまつた。後には子規も眞之の尻馬に乘つて「ダメダメ」なんて下足札を頻りに鳴らした。書生時代だから面白半分にやつたのだらう。

眞之が淨瑠璃本を頻りに讀みだしたのも此のころだつた。當時の寄席では娘義太夫が盛んであつたし、義太夫を聞くには、淨瑠璃本を讀んでゐなければわからないので、自然と近松ものなどを讀むやうになつた。

寄席へ行つた晩でも、眞之は下宿に歸るとすぐに勉强にとりかゝつた。徹夜をやる事もしばしばだつた。子規も敗け嫌ひだつたので「俺もやる」といつて徹夜の競爭をやつた。だが殘念ながら子規は眞之よりも體力が弱かつた爲めか、よく机に凭れたまゝで眠つてしまつた。

或る日柳原氏が二人の下宿を訪ねると、子規の机の上の壁に大きく子規が轉た寢をしてゐる影法師の輪郭が鉛筆でとつてあつた。

「正岡が勉强しとるといふても此の通りちやからねや」

と眞之がひやかすやうに笑つた。

「ちやが秋山もやるんだよ」

と子規が抗議すると、

「それでも、こちらは此の通り、ちやんと證據をとつとるんぢやからねや」

と、眞之が勝ち誇つたやうに又笑つた。

そのうちに、眞之は其の下宿から姿を消した。訪ねて行つた柳原氏が、

「秋山はどうしたのか」

とたづねると、

「秋山は方針を變へた。年々學生がどん〳〵殖えてゆくのを見て——きつと將來は大學生があふれるだらう。さうなると我々も悲觀せざるを得ん——といつて、海軍兵學校に行つた」

と子規が言つた。

子規居士と提督とは、そんなに親しい間であつたので、子規は隨筆『筆まかせ』等に提督の事をよく書いてゐる。

眞之が、後に米國留學を命ぜられて日本を去る時、子規居士は、

君を送りて思ふこゝとあり蚊帳に泣く

といふ俳句を作つてゐる。

一方は後の日本海々戦の名參謀、一方は後の俳聖である。其の二人が、豫備門時代、同じ下宿屋の一室に起居を共にしてゐたといふことは面白いことである。

兵學校時代

眞之が海軍兵學校に入つたのは明治十九年十月だつた。兄の好古は其の翌年渡佛した。

兵學校は當時築地にあつて、それから今の江田島に移つた。眞之は築地で二年、江田島で二年の學校生活をやつたのである。入學當時彼は五十五人中の十五番位であつた。それに生來地味の方であつたから別に注意を惹かなかつたが、當時の兵學校生徒たちは、洋服も初めてだし、靴も初めて、シャツも、カラーも、ライスカレーも、何も彼も初めてのものばかりであつたけれど、豫備門出の眞之はそんなものには慣れつこで、洋服を著ても非常に迅速で羨望の的であつた。そんな事が異彩であつた位であつた。しかし第一年を終つた時には一躍首席を占め、遂に卒業まで首席で押し通した。

そのころから既に眞之は非凡であつた。大なる膽玉（もったま）とは反對に小形の人であつたが、容易に動

かず、動けば敏捷なること隼の如くであつた。負け嫌ひの、意志の強い、無頓著な、器用な、組織的な、稀代の人物であつた。

首席で押し通したが餘り勉强してゐるのを見たといふ者はなかつた。それでゐて試驗問題を當てる事などには妙を得てゐた。試驗前になると「どうだ、今度はどういふ所が出るかい」と尋ねて、其所をうんとやつて良い成績を得たといふ人もあつた。眞之は萬事にかけて、要所や急所をちやんと押へて居つた。同クラスであつた森山慶三郎中將等は、今でもさう云つて感心してゐる。

櫻井眞清少將などは此の眞之提督の兵學校時代、江田島に出かけて行つたのが動機で遂に兵學校に入つた。

櫻井少將が松山の伊豫尋常中學三年生位の時だつた。クラスの者たちと和船で十日位の豫定で江田島往復を試みた。夜船は危險だといふので避け、帆船の事だから風がなければ行かないといふ暢氣な航海だつた。江田島へ行くと秋山眞之と山路一善（後の中將）とが「よく來た」といつて兵學校を案内して見せた。そして「お前も兵學校に來い」といつた。

櫻井氏等が五年生位になつた時、山梨の遠藤、金澤の中島といふ同窓生が「兵學校へ行く」といひだした。櫻井氏は「はゝあ、秋山、山路などに見せて貰つたあの學校だな」と以前の記憶を

甦らせた。遠藤は兵學校の試驗を受けたが體重が足りなかつたので遂にパスせず、それつきり斷念した。中島も遲れて受驗したが體格で刎ねられ、櫻井氏だけがうまくパスした。

眞之は其の頃卒業してゐなかつたが、兵學校では愛媛の秋山眞之が首席、次席が土佐の田所廣海、三番がまた愛媛の山路一善、四番が佐賀の森山慶三郎といふやうな成績であつたので、四國の人間といふと「偉い」と思はれてゐた。

櫻井少將などは、だから兵學校では所謂肩身が廣かつた。

提督の勉强

眞之は他のクラスメート等が、所謂試驗勉强などをやつてゐると「ちと運動をやらなきや駄目だぜ」と肩を叩いた。と言ふ本人はあまり勉强をするやうではないのに、首席で押し通したといふ事は、クラスの不思議な事實であつた。

豫備門時代でも「寄席へ行かう」といひ出すのは何時も眞之だつたが、寄席から歸ると直ぐ勉强したし、兵學校卒業後、軍艦に乘り込んでからの勉强振りも亦さうだつた。

彼は艦が港に著くと直ぐに酒を飲みに出かけた。それが一の樂しみだつた。彼の酒は頗る快活だつたが、何時の間にか姿が見えなくなつてしまふのである。そして歸るとすぐ仕事だつた。飲むのも早いが歸るのも早く、艦に歸つて仕事を始めるのも亦早かつた。

上陸の樂しみがもう一つあつた。それは本をうんと買ひ込んで來る事だつた。眞之は上陸する時も本をうんと持つて行くが、歸る時にも亦うんと携へて歸つた。彼は讀んだ書籍を賣り飛ばしては新本を買ひ込んで來たのだつた。そして吊された端艇の中などでそれを讀んでゐた。彼の勉强は何時、何處でやつてゐたか、誰にもわからなかつた。

しかし眞之だつて神ではないのである。いくら本を讀んでも、それを悉く諳記してしまふといふやうなことが出來るわけのものではない。唯其の要所々々をうまく摑んで、それを頭の中へ入れてゆく。さうした所に多分の天分があつたのである。

彼の鄕黨の後輩として指導を受けてゐた海軍中將竹內重利氏等は、其の勉强のコツを授けて貰つた。

眞之は兵學校を出る時、大小試驗問題綴りを全部竹內氏に呉れてしまつた。そしていつた。

「試驗問題などは、過去五年間の試驗問題を通覽すれば、出さうな問題は大體見當がつくもん

だ。必要な問題は、どの教官でも大抵繰り返して出すもんだ。それと、平素から教官の説明振りや、講義中の顔付に氣をつけてゐると、其の教官の特性がわかるから、出しさうな試驗問題は略ぼ推定が出來るよ」

提督から貰つた試驗問題紙を見ると、それには、鉛筆で答案の要點がみな記入されてゐた。しかも其の記入法が、實に簡潔で要を得てゐて、到底凡人には眞似が出來ないものだつた。

竹内中將等は其の試驗のコツを傳授されたので、兵學校で好成績を得た。しかし、其のコツを敎へて貰つても、どうもそれだけでは不安心だといつて、敎科書全部の復習に熱中したりしたものは、とても一から十までの記憶は出來るものではないので、結局「虻蜂とらず」といふやうに失敗し、不成績に終つたものもあつた。

何でもない事のやうではあるが、かうした所に其の人の機略がある。眞之が兵學校を首席で押し通したのも、日露海戰の名參謀たり得たのも、畢竟かうした機略迸發の所があればこそで、凡人と非凡人との相異は、かうした點にもあると云はねばならない。

用兵作戰の天禀

兵學校ではいつもボートレースがあつた。ボートレースといつても當時は比較的幼稚なものであつたが、同じクラスに眞之を舵手とする一組と、田所廣海を舵手とする一組とがあつて、常に競漕した。ところがいつも定つたやうに勝つのは眞之の方だつた。しかもその勝利の原因は、眞之が名舵手として競漕の曳引に長じ、號令振りの非凡な點にあつた。

一方の舵手の田所氏も、これは提督とは逆つた意味で鈍重型の傑物であつたが、どんなに苦心慘憺しても、遂に一度も勝つた事がなかつた。

眞之は兵學校時代、既に用兵戰略といつた方面に、不思議な天禀を現はしてゐたのであつた。眞之は頭も好いが、手先も非常に器用であつた。彼は學校の食事時間の時間潰しに、パン屑で種々な人間の顔を作つた。

學校では食事時間を規定され、全部食事を終るまでは食堂外に出る事を許されなかつた。彼は非常に食事が早かつたので、いつも箸を置いてしまつてから相當の時間待つてゐなければならな

いので、此の間にパン屑細工をはじめたのである。

食卓の上の食ひ殘しのパン屑を集め、それを指先で揑ねたり、まるめたりして、人間の顏や首を作つた。其の顏に楊枝で眼鼻を刻んだ。其の顏はいづれもナポレオンとか、ビスマルクとか、豐太閤とかいつたやうな古今東西の偉人の顏ばかりであつた。そいつを次から次へと順に並んでゐる生徒に廻したが、そのパン屑細工の偉人の顏は、「これはナポレオンだ」、「これはビスマルクだ」といふことが一見してみんなにわかつた。

隨分變つた藝當であるが、ビスマルクの顏は、いつも好んで眞之が作つたものであつた。眞之は特にビスマルクが好きだつたらしい。

野球と禪論

近頃の野球熱は實に素晴らしいが、四十年の昔、海軍兵學校で野球を始めたのは眞之だつた。眞之は米國出版の小冊子を持つて來てみんなに言つた。

「これは米國で專ら行はれてゐるベースボールといふ遊戲ださうだ。ルールが書いてあるから、

これを飜譯して我々同志がひとつやつてみようぢやないか」

「よからう、やらう」

とみんなが贊成した。眞之が英書を譯し、みんなはルールを覺えた。バットなどいふ氣の利いたものはないから棒切れをバットとし、兵學校生徒でチームを作つてやり出した。

後年まで提督の左手小指が硬直してゐたのは、此の時代、盛んに野球をやつた爲めだつた。當時は、勿論ミットとか、グラヴとかいふ氣の利いたものはなかつたので、ボールを素手で引掴んだ。今からみると、隨分原始的なものだつた。

野球といふ言葉は正岡子規が創作したのだといふ説もある位だから、眞之は兵學校入學以前から子規などと一緒にボールを手にして居たのであらう。その事は提督の「禪論」の中にも「其の昔大學豫備門に居りたる頃は、隨分野球に耽りたるものにて……」とあるのを見てもわかる。

提督の持論に「禪論」といふのがある。之れは大分後の事であるが、慶大野球選手に提督が與へた「禪論」の書翰は、今日でも慶大野球部に保存され貴重なものとなつてゐる。

前略

武士ガ戰場ニ臨ムニモ相撲取リガ土俵ニ上ルニモ或ハ又碁打チガ碁盤ニ對スルニモ總テ其方

間ノ勝負ニハ之レ無クテハ叶ハヌ必要ニテ其效用ハ
「決シテ睾丸ノ保護ニハ無之」實ニ左記ノ如キ偉大ナル效能有之ニ依ル次第ニ御座候
一、心氣ヲ丹田ニ落着ケ從ツテ逆上ヲ防ギ智力氣力ノ發作ヲ自在ニスル事
二、腹部ニ體力ヲ保持シ從ツテ腕力ノ發作ヲ大ニスル事
三、氣息ヲ容易ニシ從ツテ息切レヲ防グ事
四、身體ノ中心ト重心トヲ一致セシメ從ツテ體ヲ輕クシ歩速ヲ增加スル事

此等ノ效用顯著ナルハ小生ガ多年實驗スル處ニテ日露戰爭中黃海日本海等ニモ小生ハ先ヅ褌ヲ締メテ艦橋ニ上リ確ニ心氣ノ動搖ヲ防遏シ得タル樣相覺ヘ居候

又昔時東海道ヲ早打ガ二重ニ褌ヲ締メ白木綿ニ腹ヲ卷キ締メテ此ノ長途ヲ三日間ニ往復シタリトノ實例ニ照シテモ其效能明白ニ御座候　然ルニ近時ノ青年諸君ハ世俗ノ進化ト共ニ此ノ褌ノ大效用ヲ知ラレザル方多ク越中褌又ハ普通猿又等ヲ用ヒラルヽ故ニ腹ニ力ガ入ラズ血ガ頭腦ニノミ逆上スル爲メ嘔吐危急ノ場合等ニ處シテ肝要ナル虛心平氣ノ態度ヲ失ヒ從ツテ出ルベキ智能モ技倆モ出シ得ザル事有之候

無論貴選手等ニハ斯ノ如キ事萬々有之間敷候ヘ共小生ガ昨日老婆心ヨリ見タル處ニテハ未ダ

腹ニ締リガ足ラザル樣相見受申候　偖テ其褌ノ締方如何ト申セバ臍ノ下約二寸ノ處ニ卷キ更ニ股ニ掛ケ上方ニ滑リ上ルヲ防グ事ト同時ニ睾丸ヲ緊縮シ最後ニ脊筋ノ中央ヲ扼スル事ガ至極效能有之即チ總テノ力ハ此點ヨリ湧出ト見ルモノニ御座候　又其ノ締メ加減ハ餘リ堅過ギテモ宜シカラズ締上タル處デ丁度五本ノ指ヲ平タク入レテ通ルカ通ラヌカ位ガ適度ニ御座候　若シ又日本流ノ六尺褌ガ習慣上具合惡シケレバ越中褌ノ紐ヲ一尺巾ノ木綿ニテ卷キ締メラレテモ宜シク要スルニ臍ノ下二寸ノ處ヲ締メテ居ルガ肝要ニ御座候

兎ニ角緊褌一番ヲ實驗シ御試ニ被成候得バ必ズ多少ノ效能ハ可有之五十間飛ブ球ガ六十間飛ビ五秒掛ル所ヲ四秒ニ走リ三度ノ過失ガ二度デ濟ム位ノ事ハ確ニ候

小生目下海軍ニ奉職致シ居リ候　其ノ昔大學豫備門ニ在リタル頃ハ隨分野球ニ耽リタルモノニテ貴校ノ今回ノ對外御試合モ眞ニ不少趣味ヲ以テ拜觀致シ居リ今後兩回ノ御勝負ハ實ニ帝國腕力ノ名譽ニ關スル者ト相心得是非共貴選手ノ大勝ニ歸スル樣希望致シ老婆心ノ發スル所ヲ書流シテ申進候　御笑味被下候得バ本懷ノ至リニ御座候　不一

明治四十年十一月十三日

秋山眞之

慶應義塾野球選手各位

明治四十年、早慶試合中止の直後、初めて布哇のセントルイス野球團が日本に來て慶應と試合をしてゐた時であつた。慶應はそれまで連戰連敗であつた。そして最後の試合が一つ殘されてゐる時だつた。日本の名譽のためにも、どうしても勝たねばならないといふ、非常に重大な時であつた。

その頃毎日のやうにネット裏で其の試合を見てゐる海軍將校があつた。それが日露の海戰に東鄕大將の懷刀として偉勳を奏し、大戰術家として名聲内外に嘖々たる秋山提督であつた事は誰も心附かなかつた。慶應の選手が「禪論」を受取つた時、初めてそれと知つて大に元氣を鼓舞された。連戰連敗の最後の試合に初めて慶應は「緊禪一番して大勝を博し得た」のであつた。

そんな因緣があるので、提督の手紙は、慶應野球部の寶のやうになつてゐる。

機敏豪膽

眞之は學校が休暇になると、よく江田島から鄕里の松山に歸省した。松山には舊藩時代から神傳流といふ水泳術があつて、夏にはお園池といふ所がその練習場所となつてゐる。土地の青年や少年はみんな眞黑になつて、そこで泳いでゐた。其の中には歸省中の眞之の顏も見えてゐた。

お園池では練習生以外は無斷では泳がれないし、殊に無禪で泳ぐ事は何人にも嚴禁されてゐた。にも拘らず、或る日二人の陸軍の兵士が斷りもなく、制止も聞かず無禪のまゝ池へ入つて來た。それを見た年少氣鋭の眞之は「不都合な奴だ」とばかり、池に飛び込み、其の兵士が池の中の筏の上に上つて一息入れようとするところを「貴樣は怪しからん奴だ」と、バン〳〵兵士を引つぱたき水中に突き飛ばした。兵士は岸に泳ぎ著くと、一目散に逃げてしまつた。

すると翌日、五六人づれで兵士たちが復讐にやつて來た。眞之はその時休憩室で晝寢をしてゐた。兵士達はちつと場内を見てゐたが、中の一人が眞之を見付けて「こいつぢや〳〵」と言つた。見てゐたお園ひの連中はどうなることかと非常に心配してゐた。一人の兵士は更に言葉を續けて「昨日叩いたのはこいつぢや」と言つた。その時眞之はやつと眼を醒した。そして「何か用か」と尋ねた。兵士達はその落ちつき拂つた態度に先づ威壓されてしまつた。眞之は「俺は中步行町の秋山ぢやが何か用か」と却つて逆襲を試みた。

兵士たちは警察へ告訴するといつて騒ぎ立てた。眞之は「無褌で斷りなしに泳ぐのは此のお園池では規則違反だ。お園池の神聖を汚すものだから制したのだ。併し喧嘩なら此處で起つた事だから此處で始末をつけてやらう」と威喝し、一歩も譲らなかつた。

傍に居た正岡水泳師範らは、警察沙汰になつては面倒だ、出來れば調停しようと試みたが、眞之も譲らず兵士たちも譲らなかつた。正岡師範は脱衣場前の荒筵の上に、いつもキチンと扇を持つて坐り込んでゐるやうな古武士的な人であつたが、兵士たちがどうしても承知しないので、

「此の御園池で規則違反をやつた者は、お園池の水を飲ませるといふ事になつてゐる。それほどあなた達が御不滿なら、秋山のいふやうに、水の中で勝負をさつしやい」

と云ひ放つた。兵士たちはそれで最早とりつく島がなくなつた。水の中の喧嘩ではお園池の連中には叶はないことは判り切つてゐるので、其のまゝ退却してたうとう警察へ訴へた。

眞之は警察から呼び出しが來ても頑として出て行かなかつた。そして結局此の問題は五十錢の罰金といふ事で解決した。

體は大きい方ではなかつたが、剛毅で磨つ玉は其の時から太かつた。

同郷會の蠻風

眞之は兵學校時代、郷黨青年の氣風振興に頗る努力した。

眞之は此の目的の爲めに松山で山路一善中將、前の大藏、文部大臣勝田主計氏、故陸軍少將小崎正滿氏などいふ同年輩の人々と共に同郷會を組織し、郷黨の長老鈴木重遠といふ人を會長に仰いだ。

同郷會は極力柔弱を敵として活動した。五十箇條ばかりの規約があつたが、それが悉く柔弱排撃で、

一、女と同席すべからず

一、嚴寒と雖も足袋を穿くべからず

一、芝居を見るべからず

といつたやうな箇條が竝んでゐた。それで會員は金五錢也のメタルを佩用し、弊衣破帽、棕櫚鼻緒の下駄といふ服裝で市内を濶歩した。本部を松山市の出淵町に置き、矢來を巡らして道場を設

け、土俵を築き、劍道、柔道、相撲等の武藝を勵んだ。

會員は四五人づゝ、隊を組んで市内を濶歩し、會員中頭髮を長くしてゐる青年などがあると直ちに捕へてザン切頭にさせたり、會員で芝居に行つたりしてゐたものは、其のハネル時刻を見計つて、出て來たところを毆つたりした。非常に嚴しい會則で、其の勢ひは全市を風靡して居つた。

そんなふうだつたから、同郷會員には軍人志願者が多かつた。餘り軍人志願を奬勵し過ぎるといふので、當時の中學校長から同郷會に對し抗議が持ち込まれたといふほどだつた。

當時、全國の陸海軍志願者數は廣島が第一、松山が第二位を占めた。少し峻嚴には過ぎたやうであつたが、其の爲め松山青年の氣風は大に肅正された。

明治二十三年兵學校を卒業した眞之は明治三十年、アメリカへ留學を命ぜられたが、同郷會の爲めには、海外に居ても常に盡力し、育英の事に思ひをよせた。

「將來有爲の青年を作らねばならぬ。それについてアメリカ製の時計を贈るから有爲の青年にやつてくれ」といつて、「之を贈る」の名文を副へて送つて來た。

「――即ち德性、元氣、勵心、健體は社會に立つて百邪を排し千難に耐へ萬業を成就するの大要素にして、人若し之を缺くる時は、その事業の何たるを問はず眞正の大成は得て期すべからず、

今君その素因を具備せらる、實に國家他日の良材たりと囑望す。この四素は以て學識を進め、技能を練り、功業を成すの大資本にして光陰は其の過ぐるや箭の如く、去りては復歸らず、乃ち鼓に時辰儀一組を贈呈して君が光陰の經濟の用便に供す。君尙益〻德を磨き氣を練り、精を勵まし健を保ち、此の秒針の徐行するが如く將來の大成の達域に漸進されん事を庶幾す」

眞之の依託により此の時計を誰にやるかといふ事になつたが、其の選に當つたのが林直親氏であつた。同氏は給仕をしながら勉强して海軍兵學校に入つた秀才である。陸軍中將清水喜重氏等も其の一人であり、其の他の人々にもこの時計が贈られた。

眞之はアメリカを去つて英國へ行つた。その時も青年に對し「良材を作るには世界の大勢を知らしめねばならぬ、それには大地圖を掲げて親切に示せよ」と言つて青年を鞭撻した。

決死隊に加はる

決死隊に加はる

明治二十三年七月、眞之は兵學校を卒業すると同時に少尉候補生を命ぜられ、實地練習として『比叡』乘組となつた。

翌二十四年紀州近海でトルコの軍艦が遭難したので、練習艦は其の遭難乘組員を送つてトルコに航海した。

其の後程なく少尉に任ぜられ、『龍驤』分隊士、『松島』航海士等を經て、軍艦『吉野』が英國で製造せられた時、その回航委員に選拔せられて英國に渡り、引續き『吉野』の航海士になつた。が、此の時分は眞之が海軍將校としては未だほんの搖籃時代で、これぞといふ話もなかつた。明治二十七年日清戰爭が起つた時には、眞之は少尉で、第四遊擊隊の先任艦『筑紫』の航海士に過ぎなかつた。

しかもその『筑紫』は、主力を離れて雜作業に從事してゐた爲め、敵艦隊と砲火を交へるといふやうなことはなかつた。年少氣鋭の眞之は、英氣勃々として髀肉の歎に堪へなかつた。已むなく月明の夜甲板に出で、劍を拔き、それを振り廻して鬱を散じたほどだつた。

たま〳〵眞之にとつて日頃の鬱憤を晴らすべく千載一遇の好機會が來た。それは威海衛攻擊に、第四遊擊隊が、日島砲臺襲擊のため決死隊を送ることになつた爲めだつた。

眞之は大尉和田賢助氏（現中將）と共に、白鉢巻と白襷を以て合印とせる一隊の決死隊を率ゐ、軍艦『赤城』に搭じて日島に乘り込み、之れに突擊する任務に當つた。眞之は勇躍して其の日を

待つた。所が其の事を遂行すべく豫定した當夜から、連日朔北より吹き來る强風のために波濤大いに起り、計畫を實行することが出來なかつた。そして風濤が收つた時は、既に日島の沿岸は堅氷に鎖されて近寄れず、空しく腕を扼すのみで終つた。

眞之は地團駄踏んで口惜しがつた。が今日から之れを考へて見れば、この風濤大いに起りしこそ天佑ともいふべきであつて、之れに依つて我が國海軍の至寶、秋山提督竝に佐藤中將（當時『赤城』の航海長）の二大戰術家を全うすることを得、延いて彼の日本海々戰の名參謀を得て、萬古無類の大捷を博したわけである。

天は無情にあらずして、神國日本のために加護を垂れ賜うたのであつた。

威海衛の戰況

日清戰役での大海戰の一は威海衛の戰であつた。

我が海陸總攻擊は二十八年一月三十日から始まつた。東口百尺崖の諸砲臺は其の午後陷落した。西口諸壘は二月二日すつかり我が陸軍が占領した。しかし劉公島、黃島の水上諸砲臺は、敵艦隊

と協力死守して容易に降らなかつた。

そこで我が軍は三月四日夜、東口の防材鐵鎖を破り、五日の夜、ちやうど其の夜は月明の夜であつたが、月の入るのを待つて、我が第二、第三水雷艇隊が港内に突入し、見事敵の戰闘艦『定遠』を撃沈した。我が水雷艇のうち二隻は坐礁し破損したが、勇敢な友艇の救助に依つて、乘組員は全部無事歸陣した。

六日の夜も引續いて第一水雷艇隊が港内に突入し、『來遠』『威遠』外一隻を撃沈した。

七日は我が艦隊の總攻撃が始まつた。

日島海堡は、秋山眞之が乘組んでゐた『筑紫』の巨彈の爲めに爆發した。

港内から逃走を企てた敵の水雷艇十二隻は、我が第一遊撃隊並に本隊に追撃され、其の内七隻は我が軍に捕獲され、四隻は破壞された。

敵勢は最早、前日の四分の一に減殺された。

九日の午前には『靖遠』も我が鹿角嘴砲臺の放彈に沈んだ。

「殘りは無傷のまゝで故郷への土産にしたいもんだ」と、我が艦隊の將士たちは手ぐすねひいて待つてゐると、十二日の朝、白旗を揭げて敵の砲艦『鎭南』が、提督丁汝昌の降伏書を持つて

來た。

一、兵艦兵器は我が軍に引渡すこと

二、殘兵は自由解放すべし

と云ふので降伏談判は整つた。之れは我が司令長官の非常に寛大なる處分である。

提督丁汝昌、『定遠』艦長劉步蟾、並に護軍統領長文宣は、責を其の身に負うて美事名譽の自殺を遂げ、劉公島の朝露と消えた。敵ながらも此等は天晴れな武將であつた。

我が軍は敵の殘兵退去の猶豫を與へ、二月十七日總艦隊堂々入港し、『鎭遠』『濟遠』『平遠』『廣丙』外數隻の小艦を捕獲し、之れに日章旗を揭げ、一同萬歲を三唱した。

敵艦の逃走を封鎖するために、我が海軍が連日如何に苦闘したことか。時には終日彈雨の下を潜り、或は終夜怒濤の中に揉まれ、非常に艱苦を味はされた。それだけに「萬歲」の聲は、我が將士の肺腑から絞り出された歡喜の絶叫であつた。

此の戦において、我が海軍の損害は死傷者六十餘人、水雷艇二隻に過ぎなかつた。しかし其の水雷艇は二隻ながら引卸して修理すれば役立つものであつた。

威海衛の軍港は港域十里餘に亙り、なか〳〵一日や二日で陷るやうなものではなかつた。しか

も其の威海衛の街は唯舊來土民のゐた一市街地に過ぎない。軍艦の主力は劉公島に集り、大陸沿岸には防禦砲臺あるのみであつて、陸岸砲臺と、威海衛市街が陷落しても、軍港の勢力は依然として存してゐた。

國民は新聞の報道で、陸岸砲臺と、威海衛市街の陷落だけで、大勝利、大勝利といつて祝盃をあげ、お祭騒ぎをやつたりしたが、それは氣が早すぎた。

旅順、威海衛が陷落し、北洋艦隊が全滅した時、はじめて海軍の方はホツとしたのである。

秋山眞之は『筑紫』の甲板に立つて、平壤、旅順、威海衛等の陸戰がどんなに激戰であり、又慘烈なものであつたかを追想した。

「この筑紫の甲板だつて——」

眞之はさう呟いて、改めて自分の立つてゐる甲板の上を新たな眼で眺めた。此處にも骨碎け肉飛ぶやうな悲慘さがあつたのだ。

父を持ち、母を持ち、兄弟姉妹を持つた立派な人間が、此の戰では、まるで蛆蟲のやうに慘めである。

しかし戰は、さうした慘めな、悲慘なものではあるが、それが國威を宣揚し、國力の充實を圖

る最も早い近道であり、最も手近な手段だとすれば止むを得ない事である。

我々兄弟中、兄好古は陸戰に從ひ、自分は海戰に參加し、幸に應分の義務を盡し、國家に御奉公申し上げたことは、一家の榮譽である。地下の亡父もきつと滿足して下さるであらう。

眞之の胸には萬感交〻至るといふ有樣であつた。

如月の身を切るやうな海の風が、ヒユウ〳〵と甲板の上を走つてゐた。

既に立派な參謀

日清戰爭中、眞之は纔かに軍艦『筑紫』といふ一小砲艦の一下級將校に過ぎなかつたが、此の時から眞之は、既に戰の大局に目を注ぎ、我が軍のとつた作戰が果して完全なものであつたか、又遺憾な點がありはしなかつたかといふやうな事を考へ批判してゐた。

明治二十七年八月三十日、其の日『筑紫』は牙山に碇泊してゐた。牙山の清兵は我が軍に追ひ捲くられ算を亂して退却したのであつた。

陸では清兵二萬餘が多數を恃んで大同江を渡つて南下して來たけれど、既に牙山が陷落し、我

が軍の鋭鋒當るべからずといふ敗兵の注進に驚いて、彼等は皆浮足立つて再び大同江を渉つて北方へ引揚げ、平壤には一人の清兵の影さへ見えなかつたのである。我が第五師團は大同江畔まで押し寄せ、將に河を渡つて平壤に入城しようとしてゐた。

海では近日、清艦を見出し得るかも知れない豫想があつた。

それより前に、我が艦隊は全力を以て堂々威海衛前に現はれ示威をやつたので、彼の方でも、我が艦隊の勢力を知つてゐるから今度やつて來れば、きつと大擧して來る事は十分豫想された。

さうした肝腎の場合、我が艦隊はどうしてゐたか。『筑紫』は牙山に、巡洋艦『高千穗』は第一遊擊隊に屬して其の南方漢江沖を巡羅警戒し、主隊は南方遙か長直路の根據地にあつた。

斯くの如く我が艦隊の海上勢力が分立し、離隔し、連絡が斷絶してゐては甚だ危險である。餘程お互ひが充分の警戒を加へて、其の職責を盡さなければ、意外の不覺をとるやうな事がないとも限らない。殊に彼我の兵力は互角である。若し第一遊擊隊の一艦でも、又『筑紫』の如き砲艦の一つであつても、それが破損するやうな事があつては、彼我の均衡を失するのみならず、軍全體の士氣をも沮喪せしめ、遂に國家の大計を誤るやうになるかも知れない。

兎に角油斷は大敵、泰山も蟻の穴より崩るゝの譬もあるから夢にも油斷をしてはならない。み

んなが死地にある積りで充分警戒しなければならない。

『筑紫』は直ちに淺水灣に出發する。若し外洋に砲聲を聞いたならば、微弱ながら水雷艇を引連れて應援に出かける。

何といつても兵力の分離は、海上戰略の最も戒むる所である。時恰も二百十日の荒天近き時である。天敵を一つ加へ、更に我が艦隊中往々修理を要するものが現出し、萬事意の如くならなかつたならば、敵艦をして長くその餘命を保たしむるやうになるだらう。

我が指揮官は如何なる目算があつてか、又は止むを得ない事があつてか、爲すべき事を爲さないでゐるのでなからうか。

斯う言つて秋山眞之は八月三十日付の手紙を、『高千穗』の少尉連の士官次室に送つて一同を勵まし警めた。まるで高級參謀のいふやうな事をいつて、作戰を批評してゐるのであつた。

更に明治三十二年五月、駐米武官（當時大尉）であつた時、當時の海軍大學校教官の某氏から、日清戰役に對する戰術批判を求められた時、眞之は詳しく意見を書いて其の人に送つた。

それには、司令長官の執つた艦隊區分とか、戰鬪隊形とか、翼擊旋回の戰法とかは、誠によく時宜に適して間然する所がない、指揮、計畫上からいつても、それは近世戰術の好範例である。

又戰術實施に於て、諸隊の陣形の整備してゐた事は稀有の好績であつて、佐世保出征前の訓練與つて力ありであつた。

けれども指揮官數氏の行つた事については、どうも同意が出來ない。

さういつたふうに、細かに戰略、戰術、指揮、計畫等についての意見を述べてゐる。それが一一其の大學教官をうなづかせるほどの立派な批評であつたので、全く其の人は驚いてしまつたといふ事があつた。

眞之は此の時分からして、立派に參謀の役でも勤められるほどの素質を持つてゐたのであるが、日清戰爭は、遂に眞之をして未だ其の手腕を試みさせる事が出來なかつた。

しかし此の戰爭が、後年眞之の戰術其の他の研究の基礎となり、どんなに役立つたかはいふまでもない事である。

日清戰爭後、眞之は暫く水雷方面に廻され、明治二十九年十月には大尉に昇進した。そして海軍々令部諜報課員として活動した。

もう此の時分は日露戰爭は豫知せられた。陸海軍ともにその作戰はロシアを假想敵國としてゐた。眞之が朝鮮の洗濯夫にまで化けて滿鮮の間で重大な任務を遂行したのも此の時分の話である。

其の後引續いて眞之はロシア研究と、對露作戰を熱心に繼續した。それに關する上申書は纏めたならば相當尨大なものとなつたはずである。作戰に關するものの一部は典範として、海軍省に今も藏せられてゐるさうである。

廣瀨中佐と提督

同窓ではなかつたが、眞之と廣瀨中佐とは肝膽相照らした仲であつた。

此の兩雄が相知るやうになつたのは八代大將の仲介だつた。

廣瀨中佐は眞之より一級上であり、八代大將は二人の兵學校在學時代の教官であつた。八代大將と廣瀨中佐とは共に柔道好きであつたので、八代大將の獨身時代は其の家を道場のやうにしてドツタン、バツタンやつてゐた。そんな關係で八代大將は廣瀨中佐を此の上なく愛してゐたし、勢ひ、八代大將を介し、八代大將を中心として兩雄相結ぶやうになつた。

秋山眞之は同輩には常に優越を感じてゐたので、對等の氣持で交際する場合は少かつたやうであるが、廣瀨中佐とは全く相信賴し相尊敬しあつてゐた。四谷で一戸を借りて二人で同棲してゐ

た事もあつた。何しろ豪快そのもののやうな二人の合宿の事であるから、その生活は亂暴極まるもので、籃の中に幾日分ものパンを入れて置いて、それで飯も炊かねばお茶も沸さぬ、パンと水ばかりで生きてゐるといふやうなやり方であつた。

二人の住居の眞向ひに一寸した屋敷があつたが、其處の女中は云つてゐた。

「廣瀬さんといふ方は顔が恐ろしくて武張つた人であるけれども、つきあつて見ると案外優しい人で近づきやすいが、秋山さんといふ方は、顔はそれほどでもなく、脊も低いが、何となく恐ろしくて近づきにくい人でした」

眞之はそんなに恐ろしい人間ではなかつたが、其の頭腦の鋭さ、滿身是れ膽といつたやうな所が恐ろしく見えたのであらう。

眞之はその後鄕里から母堂を呼んで、芝區高輪車町に居を構へた。廣瀬中佐も其の高輪の家によく遊びに行つて母堂の世話になつた。廣瀬中佐が眞之と雜煮の喰競べをして二十一喰つたといふのも此の頃の事であつた。よく雉子の御馳走などにあづかつたので、廣瀬中佐は眞之の母堂を自分の親のやうに慕つてゐた。

提督の結婚

八代大將と秋山眞之との關係は、江田島から始まつて晩年までずつと繼續された。兵學校時代八代大將は眞之の教官であり、八代將軍が海軍大臣の時、眞之は軍務局長となつた。英雄は英雄を知るで終始此の兩雄が相信じ、共に共の親交を深めて行つた事は麗はしい。

八代大將は眞之の結婚の時にも大いに盡力した。眞之が夫人を貰ふ時、其の使者に立つたのは八代大將であつた。夫人の嚴父稲生眞履氏は最初「軍人には娘をやらない」といつて居たが、後には「軍人にやるなら秋山の外にはない」といつて遂に結婚が成立した。さうしたわけで實際の媒妁人は八代大將であつたが、侯爵佐々木高行氏が表面の媒妁人となつて華燭の典は擧げられた。

眞之がまだ大尉位の時、海軍の或る權勢家が眞之の人物を見込んで、其の令孃を嫁がさうとしたが、之れを斷つて日露戰爭前まで獨身生活を續けてゐた。稲生氏と結婚したのは三十六歳、海軍少佐の時で可なり晩婚の方であつた。

「大概の人は妻子を持つと共に片足を棺桶に衝き込みて半ば死し、進取の氣象義へ退歩を始める」

といふのが眞之の持論であつたから、眞之の晩婚も此の主義の爲めであらうと思はれる。

此の結婚に對し早速祝詞を寄せた山屋現大將に對し、眞之が送つた禮狀がふるつてゐる。

拜啓仕候　日頃ヨリ軍神ノ化身ト自信セル小弟ガ物騷ナル昨今ノ時節ニ急ニ思立タル妻定メハ別段平和ト見セテ敵方ニ油斷サセル大計略ニモ無御座唯此一生ノ大道樂ノ中途ニ於ケルホンノ靈晴シニテ素ヨリ誰人ニモ沙汰モ披露モ致サヾル積ノ處早クモ筑紫ノ果ナル大兄ノ御耳ニ迄相達シ先ヲ越サレテ早速ノ御祝辭ヲ頂戴シ眞ニ恐縮至極ニ存候　然シ此入道ガ偶然ニモ女房持ツ氣ニナツタ事ハ此頃北天ノ一隅ニ現レタル異樣ノ彗星ト共ニ少シハ異變ノ沙汰トモ可申蓋シ天下太平ノ吉兆カ將又大亂ノ徵候カ時ニ取ツテノ判ジ物ニ御座候（以下略）

米西戰爭と圖上演習

明治三十年六月眞之（當時大尉）は海軍制度視察の爲め米國留學を命ぜられた。

眞之の偉才は米國の海軍部内でも認められて多大の尊敬を拂はれてゐた。

其の後日露海戰があり、其の作戰が秋山眞之に依つて成されたものだといふことを聞いて、米國海軍界では、恰も眞之を米國の海軍出身者であるかの如く自慢した。それほど眞之は米國でも有名な人だつた。

米國留學中（三十一年）に米西戰爭が起つた。眞之は米國船及び米艦『ニューヨーク』に乘組んで戰況視察をした。これは眞之の戰略戰術の研究に生きた材料を提供したもので非常の參考になつた。眞之は米艦隊のサムソン提督の作戰用兵振りを激賞し、後日海軍大學校教官當時、それが軍略の科目を設くる動機となつたといはれてゐる。

眞之が米國留學中、我が海軍當局へ寄せた海軍圖上演習に關する意見書は、當時非常に貴重視されたものである。

眞之の頭は、何時もそんなふうに、我が海軍の事で一杯であつた。

「どうすれば日本の海軍をより良くすることが出來るか」と。

實際眞之ほど詳細に報告書を送つたものは他に類例がない。それからよく書籍や雜誌を本省へ送つて來た。フィスタ距離測量儀の本を送つて來て「早く之れを作つて各艦に配布されるやうに

せよ」と督促して來たなどは其の一例である。

さうした書籍の購入費は勿論眞之のポケット・マネーから出たものであるが、それが少からぬ金額だつたさうである。

今でも米國から送つたそれらの書籍は、海軍省に保管されてある筈である。

星亨に一矢

眞之の米國駐在中の公使は有名な星亨氏であつた。星亨といふ人は其の頃から餘程傑出した人物であつて、館員たちも平素餘り接近し得なかつたほどであつたが、獨り眞之だけは平氣で遠慮なく公使の室に出入してゐた。

其の頃から星亨氏は藏書家でもあり書物はよく讀んだ。星氏の書架には色々な書籍がぎつしりと詰つてゐた。眞之は其の書齋に出入し、其の書架から自分の讀みたい本を勝手に取り出して讀んでゐた。

或る時、星氏がそれを詰責した。大抵の者だと星に詰責されると縮みあがつてしまふのだが、

眞之は平然として答へた。

「公使はいろ〳〵貴重な書籍を購入されるが一向それを閲讀されるといふ模樣がない。それで僕が好意を以て、公使に代つて讀んでゐるのです」

剛愎を以て一世に鳴つてゐた星亨氏も、此の眞之の剛膽には開いた口が塞がらなかつた。

此の話は、當時華府の外交官補であり、後にスペイン駐劄公使となり、其の任地で逝去した坂田重次郎氏から海軍中將吉田增次郎氏が聞かれた話であるから間違ひない。

眞之は翌三十二年、更に英國駐劄を命ぜられたが、在英半年に滿たずして三十三年五月歸朝を命ぜられた。

天劍漫錄

眞之が米國留學中、明治三十二年の頃、軍人として、國民として時々の感想を天劍漫錄と名づけ、勉學の餘閑に「ビゼロウ」の陸軍戰術書附圖の裏に書きつけた。此の戰術書は後日、外の書物と一緒に我が海軍大學校に寄贈され、大學校では、書物そのものよりも圖の裏にある秋山大尉

時代の天劍漫錄眞筆を貴重なものとし、淸河中佐の敎官時代、この書物と井出謙治大尉の寄贈した古き「アニュアル・レジスター」一揃ひは將來永遠に祕藏したいものだといつてゐたが、震災で燒けてしまつた。天劍漫錄は實に、古聖の言のやうである。

一　細心焦慮ハ計畫ノ要能ニシテ虛心平氣ハ實施ノ原力也

二　敗ケヌ氣ト油斷セザル心アル人ハ無識ナリトモ用兵家タルヲ得

三　大抵ノ人ハ妻子ヲ持ツト共ニ片足ヲ棺桶ニ衝込ミテ半死シ進取ノ氣象衰ヘ退歩ヲ始ム

四　金ノ經濟ヲ知ル人ハ多シ時ノ經濟ヲ知ル人ハ稀ナリ

五　手ハ上手ナリトモ力足ラヌトキハ敗ル戰術巧妙ナリトモ兵力少ケレバ勝ツ能ハズ

六　一身一家一鄕ヲ愛スルモノハ悟道足ラズ世界宇宙ヲ愛スルモノハ悟道過ギタリ軍人ハ滿腔ノ愛情ヲ君國ニ捧ゲ上下過不及ナキヲ要ス

七　本年ノ海軍年鑑ヲ見ルニ吾國海軍モ幕內ニ入レリ精勵息マザレバ大關ニモ横綱ニモナルナラン勉强セザレバ又三段目ニ下ガラザルベカラズ

八　「ネルソン」ハ戰術ヨリモ愛國心ニ富ミタルヲ知ルベシ

九　人生ノ萬事虛々實々臨機應變タルヲ要ス虛實機變ニ適當シテ始メテ其ノ事成ル

十　吾人ノ一生ハ帝國ノ一生ニ比スレバ萬分ノ一ニモ足ラズト雖吾人一生ノ安ヲ偷メバ帝國ノ一生危シ

十一　成敗ハ天ニ在リト雖人事ヲ盡サズシテ天、天ト云フコト勿レ

十二　敗クルモ目的ヲ達スルコトアリ勝ツモ目的ヲ達セザルコトアリ眞正ノ勝利ハ目的ノ達不達ニ存ス

十三　平時常ニ智ヲ磨キテ天藏ヲ發キ置クニアラザレバ事ニ臨ミテ成敗ヲ天ニ委セザルベカラズ

十四　苦キトキノ神頼ミハ元來無理ナル注文ナリ

十五　敎官ノ善惡書籍ノ良否等ヲ口ニスル者ハ到底啓發ノ見込無シ

十六　自啓自發セザルモノハ敎ヘタリトモ實施スルコト能ハズ

十七　岡目ハ八目ノ强味アリ責任ヲ持ツト大抵ノ人ハ八目ノ弱味ヲ生ズ宜ク責任ノ有無ニ拘ハラズ岡目ナルヲ要ス

十八　虛心平氣ナラント欲セバ靜界動界ニ修練工夫シテ人欲ノ心雲ヲ拂ヒ無我ノ妙域ニ達セザルベカラズ兵術ノ研究ハ心氣鍛練ニ伴フヲ要ス

十九　天上天下唯我獨尊ハ軍人ノ心劍ナリ

二十　進級速カナレバ速カナル程吾人ハ早足ニテ勉强セザルベカラズ何トナレバ一定ノ距離ヲ行クニ少キ時間ヲ與ヘラレタレバナリ

二十一　吾人ノ今後三十年其ノ内十五年ハ寢テ暮ラスト思ヘバ何事ヲ爲ス遑モナシ

二十二　治ニ居テ亂ヲ忘ルベカラズ天下將ニ亂レントスト覺悟セヨ

二十三　世界ノ地圖ヲ眺メテ日本ノ小ナルヲ知レ

二十四　世界ヲ統一スルモノハ大日本帝國ナリ

二十五　家康ハ三河武士ノ赤誠ト忠勤ニ依リテ天下ヲ得タリ小大此理ヲ服膺スベシ

二十六　元龜天正ノ小天地ハ目下世界ノ全面ナリ

二十七　人智ノ發達ト機械ノ進歩ハ江戸長崎ノ行軍時間ヲ東京倫敦ノ行軍時間ト同一ニシタルコトヲ忘ルベカラズ

二十八　三月ニナルト早ヤ冬ノ寒サヲ忘レテ陽氣ニ浮カル、樣ノ事ニテハ次ノ冬ノ防寒ハ覺束ナシ

二十九　咽下過グレバ熱サヲ忘ル、ハ凡俗ノ劣情ナリ

三十　觀ジ來レバ吾人ハ緊褌一番セザルベカラズ

大學校教官時代

歸朝後、眞之は海軍省軍務局員や、常備艦隊參謀等に任ぜられたが、明治三十五年七月、海軍大學校に戰術講座が設けられる事になつたので、海軍少佐で其の教官となつた。

眞之が教官になつた動機は、勿論兵學上の蘊蓄が海軍部内に知れ渡つてゐたからでもあるが、當時の海軍大學校長、今の貴族院議員男爵坂本俊篤中將が教官時代、歐米視察の途すがら米國留學中の眞之と會談した時、其の兵學上の卓見を聞き、且つ眞之の人物に魅せられて、「大學の此の新講座の擔當者は秋山を措いて他にない」といつて眞之を迎へたのであつた。

海軍大學では、それまで用兵の研究は、專ら圖上演習で山屋他人中佐（後大將）が主として之れを擔任してゐたが、眞之は新たに米國流の兵棋演習を取り入れた。此の兵棋演習はその後盛んに行はれ、陛下の御臨幸を仰いで御前試合までするやうになつた。これは兵棋といつて、將棋の駒のやうなものを軍艦に擬し、模擬作戰をするのである。しかし兵棋演習の取り入れなどは眞之

[illegible]

つの原因であつた。

提督歿後、故教官の徳を慕ふ當時の學生——今はそれ〴〵顯要の職にある——が醵金して、イタリーの美術家に依賴して提督の胸像を作つた。當時の海軍大學校の生徒が、どんなに秋山眞之を尊敬し、慕つてゐたかは、此の「胸像が出來た」といふ事だけでもわかるであらう。

眞之は讀書を非常にやつた。兵書、軍書、其の他各方面の書籍を和漢洋の別なく涉獵して貪ぼる如く讀んだ。自宅ではエンドウ豆をボリ〳〵嚙りながら讀み、讀んだ本には必ず意見を書き入れたり、線を引いたりした。それで眞之の讀んだ本は本屋に出てゐても直ぐ發見される程だつた。卓の上は何時でも讀んだ本、讀みかけてゐる本が散らばつてゐた。しかし讀んで其の要點を掴む事が早かつたのは矢張り天才だつた。讀んでしまふとそれを惜し氣もなく人に呉れてやつた。何處かに常人とは異つたところがあつた。

兵學校時代でも同窓の者がうん〳〵いつて試驗勉强をやつてゐると「運動をせなけりや駄目だ」と眞之は屢々忠告したものだつたが、大學教官時代にも學生に向つてよくそれをいつた。「蒼くなつちやあいかん」といつてテニスコートを作つてテニスを始めた。午飯を喰ふとテニスコートへ出て來て學生達と一緒になつて一時頃までやつた。ぐつしよりとテニスで汗をかくと校

長が來て見てゐる其の前でも、ズボンを脱ぎ、シャツを脱いで、平氣で汗を拭いた。

秋山提督の大決心

「いよ〳〵日露戰爭がありさうだ」と、世の中が何となくざわめいて來たし、新聞等を見ても、「どうも日露戰爭は避ける事が出來さうにもない」と思はれるやうになつたのは、明治三十六年の夏頃からであつた。

それからだん〳〵「戰爭だ、戰爭だ」といふ聲が大きくなつて來て日本國中、津々浦々まで「今にも戰爭が始まるぞ」と湧き立つやうになつて來た。

それでも海軍首腦部の方では、しんとしづまり返つてゐた。少壯將校たちは、「海軍首腦部はまだ決心がつかない」といつて頻りに憤慨した。

ある日、海軍省の人事局から海軍大學の秋山教官へ、本省に出頭せよといふ通知があつた。海軍省に出かけて行くと、東郷中將も登省して居り秋山に會つて、

「今度はあんたの努力に待つ事大なりぢや、大いにやつてもらはんけりやいかん」

莊重な、どつしりとした、威嚴のある言葉であつた。

秋山眞之が、ほんたうに大決心をしたのは此の時であつた。

蛟龍風雲を得て大飛躍すべき活舞臺が眼前に展けて來たのだ。

「やるぞ」

秋山教官は、腹の底から力强く、さう叫んだ。

宣戰布告さる

政府がいよ〳〵開戰の腹を定めたのは明治三十六年十月二十七日であつた。此の日常備艦隊司令部の異動が發表され、之れと相前後して常備艦隊が解かれて、新たに第一艦隊、第二艦隊、第三艦隊が編成され、第一、第二兩艦隊を以て聯合艦隊が組織された。之れですつかり準備が整つたのである。

「さあいつでもやつて來い」

と腕を叩いて開戰の日を待つた。

しかし戰機はまだ熟さなかつた。今にも風雨がありさうな險惡な形勢のうちに明治三十六年は暮れて、明くる三十七年が迎へられた。さうするうちにも形勢は愈〻急となり、遂に二月六日談判破裂となつた。

二月十日、對露宣戰は布告された。

東鄕中將を司令長官とする聯合艦隊が、海軍の根據地、九州の佐世保軍港から威風堂々、征露の途についたのは、談判破裂の日の二月六日午前九時であつた。

此の當時の聯合艦隊司令部の陣容は左の如くであつた。但し開戰後間もなく、有馬先任參謀は病の爲めに歸還を命ぜられて大本營附となり、後任參謀の秋山眞之少佐が先任參謀の重職に就いた。島村參謀長は旅順陷落後加藤友三郎少將と更迭し、其の他の參謀も悉く更迭されたが、唯一人、秋山參謀だけは、終始一貫參謀の職を離れなかつたのである。

司令長官（旗艦三笠）　海軍中將　東鄕平八郎
參謀長　海軍大佐　島村速雄
參謀　海軍中佐　有馬良橘
參謀　海軍少佐　秋山眞之

參謀　海軍大尉　松村菊雄
副官　海軍少佐　永田泰次郎
機關長　海軍機關大監　山本安次郎

「此日風靜かにして波なく、一天拭ふが如く、幾隊の艨艟は威風堂々として意氣既に敵を壓するの概あり」

と戰記は當日の光景を記してゐる。

研磨十年、或は實地踏査に、或は圖上戰術に、或は兵棋演習に、練りに練つて鍛へあげた對露作戰を深く胸に藏し、必勝を期しつゝ艦旗翻翻と飜る『三笠』の舷頭に立つた秋山少佐の英姿は、實に颯爽として意氣衝天たるものがあつたであらう。

鏡の如く平らかに和いだ海面を睥睨して、眞之はきつと微笑してゐた事であらう。

母堂の激勵

いよ〳〵眞之が、聯合艦隊參謀として出征する事となつた時、眞之の母堂貞子刀自は、彼の出

征を祝し、且つ訣別を兼ねた激勵の手紙を寄せた。それには、

「若し後顧の憂ひがあり、手足纏ひの家族の爲めに、出征軍人としての覺悟が鈍るやうな虞れがあるならば、私にも充分の覺悟があります」

といふやうな意味の事が記されてあつた。

母堂の手紙を手にし、其の一字一句を感激の心で讀んでゐた眞之の眼からは、熱い涙が、はらはらと雙頰に流れた。

「おつ母さん、きつと今度の戰には勝つて御覽に入れます。ありがたう〳〵」

眞之は手紙を持つたまゝ、ブル〳〵と武者振ひした。

嚴肅な、崇高な母の愛情、それに酬いるためにだつて、きつと勝たねばならない。

眞之はハンカチで眼を拭ひながら、きつと誓つた。

母堂の書狀は封筒ぐるみ別の封筒に收められた。それから母堂の寫眞も。そして其の表に、自ら筆をとつて「大慈大悲」と達筆で記した。

今一つ、眞之は新たに一葉の名刺を入れて封じた。それは、兄好古將軍の名刺であつた。

「這回の役一家全滅すとも怨なし」

といふ意味の事が記されてあつた。好古將軍の「盡忠報國」の宣誓である。

眞之は、此の三つのものを入れた封筒を更にハンカチで包み、軍服のポケットにをさめ、戰爭中、守護神の如くに、肌身離さず持つてゐた。

此の母、此の兄にして眞之提督の如き偉人が出現したわけである。

さながら手足の如くに

日清戰爭が日本の大勝利で終ると、眞之はすでに「此の次の戰爭はロシアとだ」と考へた。そんな事はすぐにピンと頭に響く眞之であつた。英國駐在武官としてロンドンにゐた時、彼は知らん顏してロシアに渡つた。「此の次の戰爭はロシアとだ」といふ頭と眼で、眞之はロシアの國情を詳細に調査し、ロシアの國民性を熱心に研究した。

海軍大學校でやる秋山教官の講義もロシアを假想敵國として、地圖を展げてはやる圖上戰術や、將棋の駒のやうなものでやる兵棋戰術などで、旅順口の封鎖はどうする、浦鹽の攻擊はどうすると、そればかり講義した。明けても暮れても「日露戰爭が始まつたらどうする」といふ事で眞之

の頭は一杯であつた。流石の海軍當局も其の熱心さと、綿密な調査研究には舌を捲いて驚いたほどだつた。

いよ〳〵日露の開戰が定まると、前いつたやうに眞之は聯合艦隊の參謀に拔擢された。海軍大學で眞之の講義を聽かされてゐた學生たちは、それ〴〵第一艦隊、第二艦隊、第三艦隊の樞要な地位につく事となつた。

教室で地圖や兵棋で教はつてゐた作戰が、事實の上に應用され、結果の現はれる日が來たのである。海軍大學の講堂が、俄かに黃海となり、日本海となり、そこでロシアを相手に、實際に、戰ふ事となつたのである。

旗艦『三笠』から發せられるいろ〳〵の作戰命令は秋山參謀だし、それを受取る人は海軍大學で毎日眞之の教へを受けてゐた教へ子たちなのだから、此の兩者の意思はピツタリと一身同體のやうに合致し、秋山參謀から云はせれば、恰も其の手足を動かす如くであつた。日本海々戰で、あの大捷を博した大原因の一つに、之れを數へる事を忘れてはならないのである。

三笠艦上の名參謀

秋山參謀は、ポケットに忍ばせた煎豆を嚙りながら甲板を無暗に歩いた。そして時々ペッ〳〵と煎豆の皮を吐き散らした。それは何か、名作戰を考へ出さうとしてゐる時であつた。

「今度はどうじてロシアをやつつけるかな」

そして其の足がピタリと停ると、參謀は喰ひかけた煎豆をペッと吐き出し、急いで幕僚室に歸つて行つた。それは何か名案が浮び出た時だつた。

幕僚室はいつもピタリと鐵窓が閉めてあつた。外部の光がそれに遮られて薄暗く、冥想するに誠に都合よく出來てゐた。

甲板からヒントを獲て歸つた秋山參謀は、ゴロリとベッドに横になつた。天井を睨んだまゝで考へ續けた。

湯に入る時のほかは靴も脫いだ事はなかつた。睡眠の時でも靴は穿いたまゝでベッドに横になつた。「すは」といふ時には何時でも飛び出せるやうになつてゐた。

頭の中は日夜を問はず作戦で一杯であり、おち〳〵と眠る暇もなかつた。

日本海々戦の迫つた數日間は不眠不休であつた。ベッドに體を横たへてゐても眼は大きく開いて天井を睨みつけてゐた。

「君、それぢや體がもたないだらう、少し睡眠をとつたらどうだ」

と參謀長の加藤友三郎少將が心配していつたが、秋山參謀は感謝しながら、唯笑つてゐたばかりであつた。

少佐參謀の飯田久恒氏は時々用件があつて、夜中でも秋山參謀の室を叩いたが、何時行つても大きく眼を見開いて天井を睨んでゐた。

どうかすると眼を閉ぢて眠つてゐるやうな時もあつたが、そんな時でも、作戦が湧き、何かの想が浮びあがると、ガバと起き上つて案を立てた。

戦爭の隙には、食後の時間等に、艦上で東郷長官を中心として雑談にふけるのが例であつたが、さういふ場合でも秋山參謀は仲間入しなかつた。

長官がまだ食堂の席についてゐようがゐまいが、一向お構ひなしで、さつさと食事も済ませば、又食事がすめば、さつさと自分の室に引上げて何かちつと考へてゐた。

「何をくだらない世間話に時間をつぶすのだ」といつたふうにも見えた。

時には講談本を讀んでゐる事もあつた。他の者は其の側で作戦計畫を盛んに論じあつた。

「今度の戦爭には斯ういふあんばいにしてみたらどうか」

などと云つてゐると、講談本を讀み耽つてゐる筈の秋山參謀が、むつくりとソファーから起きあがつて、

「今の話をもう一度言つてみてくれ、どうするつて云つてたんだ」

と聞き直した。そして早速コンパスと定規を取り寄せて、何の根據もない冗談話の内容をちやんと學理化して、意外な大作戦を寸時に編み出したこともあつた。

戦の眞つ最中でも秋山參謀は、曾て雙眼鏡を手にした事はなかつた。

「どうして雙眼鏡を用ゐないのか」

と同僚が聞くと、

「雙眼鏡はハツキリ物を見ることは出來るが、視界が狹くて一部分しか見えない。肉眼は局部的には物をハツキリ見ることが出來ないが、大局は見える。俺は戦の大局が見えればそれで宜いのだ」

と云つた。

どんなに脊負ひ切れないほど重荷をしよつてゐても、冷靜に、沈著に、常に眼を大局に注いで見てゐる人だつた。

誰だつて長い間には、偶には悲觀したり、怒つたり、喜んだりするものだが、秋山參謀にはそれがなかつた。いつも同じ調子であつて、決して心の平調や平靜を亂すやうな事はなかつた。

練りに練つた作戰が圖にあたつて大勝した時などは、誰だつて躍りあがつて狂喜するものだが、それも秋山參謀にはなかつた。

「うまく作戰圖にあたりましたね」

「うん、さうだつたなあ」

と云ふきりだつた。

平常研究に研究を重ねた作戰を、ほんたうの戰でどう活かして用ゐるかといふ事を、前の研究の時よりも、もつと綿密に、周到な用意で考究してゐたのである。

しかも其の頭はラヂオのアンテナよりも鋭かつた。どんな些細な事でもビン〳〵と其のアンテナに響いて來た。

命令書一つ書くにも考へ、考へ拔いて上官に具申した。其の代り、大體の指揮を受けると筆をとつてすら〳〵と書き上げた。まるで他の者が友達などに出す手紙のやうに、何の屈託も躊躇もなく筆を走らせ、瞬間に書き上げた。

驅逐艦の接戰の模樣を書き現はす時に「絃々相摩す」といふやうな名文を書いたが、之れなども別に考へるやうな事はなく、すら〳〵筆が走つて現はれた名文句であつた。

先づ旅順口の水雷攻撃

日露海戰の主なる作戰計畫は、大概秋山參謀の頭から考へ出された。秋山眞之の名が、稀世の戰略家として、又世界的偉人として靑史に殘るやうになつたのも、此の日露海戰の活躍臺に、大きな功績があつたからである。

上に千古の名將東鄕司令長官があり、其の帷幄に世界獨步の大戰略家秋山參謀があつて、神策鬼謀泉の如く湧き出で、それを悉く東鄕司令長官が容れた爲めにあの大戰果が收められた。

此の名主將と、名軍師と、全く凄いバッテリーだつた。

開戰劈頭の戰爭は旅順口の攻擊であつた。秋山參謀の考では、水雷攻擊よりも先に、閉塞をしたかつたのであるが、いろ／＼の關係でそれは出來なかつた。秋山參謀としては、あの時やつたやうな汽船や何かでなしに、大分古くなつて、あまり役に立たないやうな軍艦を、何隻も沈めた方が、閉塞の效果が遙かに大きいだらうと思つたのであつたが、當時の日本はロシアに對して、さう優勢な艦隊を持つてゐたわけではないから、秋山參謀の計畫通り、思ひきつて軍艦を沈めることは出來なかつたのであらう。そこで先づ水雷攻擊からはじめることにした。

明治三十七年二月八日の午後六時、我が第一、第二、第三の驅逐隊は、艦隊から別れて縱列を作り、速力を早めて旅順口に向つた。

驅逐艦は皆艦尾燈（後方だけよりしか見えぬ樣に裝置せる一燈）だけをつけて、暗い海の上を老鐵山を目當に進んで行つた。十時三十分頃になつて、右舷の艦首に靑白い光が遠く闇の中に隱顯するのが見えた。

あれは港外にゐる露國艦隊の探海燈に違ひないと思ひながら、同じ針路を猶ほ二十分も航進すると、今度は左舷の艦首に當つて、前よりもずつと近く二箇の燈火が見えた。

暫く艦の速力を緩めてぢつと見ると、敵の驅逐艦が二隻、その邊を警戒の爲めに北東に向つて

進みつゝあることがわかつた。

氣がつかれてはいけないといふので、直ちに之れを右に避けて、艦尾燈を消してしまつた。

敵から委を暗ましたまではよかつたが、何しろ暗い海上の事だから、あとから知らずに進んで來た第二驅逐隊の二番艦『朧』は、忽ち一番艦の『雷』に衝突した。『朧』は艦首を痛めて更に進むことが出來ない。三番艦の『電』もこの騷ぎで前へ進まれず、第二驅逐隊の艦は全く離れ離れになつた。前隊がさうなつたので、第三驅逐隊も自然聯絡がとれなくなり、三隊はばら／＼の行動を取るより仕方が無くなつてしまつた。

最初に敵を右に避けた第一驅逐隊は、又もとの針路に返つて進むうちに、やがて老鐵山の燈火が見えはじめた。

「もう方角に間違ひは無い」

艦は速力を緩めて、しづかに敵に迫つて行く。時に九日の午前零時二十分、片割月はまだ海上に現はれず、折々波頭を照らすものは敵の探海燈の光だけである。討つべき敵艦は、闇の中にほのかに見える、と思つた時、淺井第一驅逐隊司令の號令一下、驅逐隊は一齊に攻擊を開始した。

第一に火蓋を切つたのは先頭の『白雲』である。艦首を左に回らすと、先づ三本煙突の敵艦を

襲撃し、他の二本煙突の艦にも一撃を喰はして南方に退く。

二番の『朝潮』も『白雲』に倣つて「ベレスウェート」型の艦と「レトウヰザン」型の艦とを襲撃した。

敵はこの時已に我が襲撃を知つたらしく、どの艦も俄かに騒ぎ立つて、やたらに大砲を撃ち出した。弾丸は頻りに近くへ落ちる。

三番の『霞』も二本マスト、三本煙突の敵艦に一撃を加へ、次いで「パルラーダ」型の艦を襲撃した。水雷は命中したらしく、敵艦の横腹からは水煙が立ち騰るのが見えた。

殿(しんがり)に控へた『曉』は始終探海燈に照らされて困つたが、遂に「レトウヰザン」型の艦と、もう一隻二本マスト、三本煙突の艦を襲つて、両方とも水雷の爆發するのを見屆けた上、全速力で南方へ退いた。『霞』も『曉』も盛んに敵の弾丸を浴せられたけれども、幸に無事であつた。

第二の驅逐隊はばら〳〵になつてしまつたが、司令の石田中佐は、自分の乘つてゐた『雷』を全速力で旅順口の沖まで進めた。探海燈の頻りに閃く中を、巧に妻を晦ましながら行くうちに、敵艦の竝んでゐるのを發見したので、二本マスト、三本煙突の艦に向つて水雷を發射した。それと見た「アスコリド」型の敵艦から、探海燈の光を投げては大砲を撃ちかけたが、弾丸は皆艦の

上を掠めただけで一つも中(あた)らなかつた。

第三驅逐隊は前の二隊とはぐれてから、北西の方角に當つて探海燈の光を發見した。敵艦に違ひないと思つたので、前進をやめて様子を見てゐると、忽ちに二隻の驅逐艦が近づいて來た。これは敵ではなくて第二驅逐隊の『雷』と『朧』とであつた。

『雷』は第三驅逐隊司令の土屋中佐にかういふ報告をした。――『朧』は故障があつて大速力が出せないので、今夜の襲撃には加はれない。本艦も亦司令の艦とはぐれてしまつたから、あなたの指揮を受けて行動致したい――といふのであつた。

丁度第三驅逐隊の方でも、殿(しんがり)の『漣』が何處にゐるかわからない際だつたので、土屋司令は『漣』の代りに『雷』を用ゐることにした。

それから前に見つけた探海燈の方角へ進んで行くと、果して十數隻の敵艦が集つて碇泊してゐることがわかつた。この時は已に第一驅逐隊等の襲撃が始まつてゐたらしく、敵艦はいづれも探海燈を照らし、盛んに砲撃を開始しつゝあつた。

こゝだといふので、先頭の『薄雲』が先づ「チイヤーナ」型の敵艦に迫つて一撃を加へ、その西隣にゐた艦にも水雷を發射した。二番艦の『東雲』も『薄雲』に續いて敵を襲撃する。臨時に

この隊に加はつた殿の『電』は、二隻の間から突進して「チイヤーナ」型の艦と「レトウヰザン」型の艦とに各一撃を喰はせた。

『蓮』が第三驅逐隊の仲間にはぐれたのは八日の午後十一時頃であつたが、聽て前方遙かに燈が二つ見えるので、自分の隊の艦かと見て進んで行くと、豈圖らんや航海燈をつけた敵の驅逐艦二隻であつた。匆々之れを避けて仲間の艦を搜したけれども、遂に行方がわからない。そこで單獨に敵を襲ふ決心をして、旅順口の燈臺を目當に進み、更に黄金山に向けて進んだ。敵は全部探海燈を點じて一齊に天空を照らしつゝある。中には赤い燈を揭げた艦も二隻あつた。『蓮』は九日の午前一時二十五分に至り、敵の中央にねたらしい『ポルターワ』に接近して、一撃を加へて歸つた。

はじめ『雷』と衝突した『朧』も決して何もしなかつたわけではない。衝突の結果として艦首に泡沫が起るので、忍んで行く夜襲には都合が悪いし、舵機の工合も十分ではなかつたが、他に大した異狀が無いことがわかると、もうぢつとしてはゐられなくなつた。これも單獨で旅順口に向つた。午前一時に港口を遠く眺めると、我が驅逐艦は襲撃を終つて引揚げたらしく、一時猛烈だつた敵の探海燈の光や砲撃も稍〻緩漫になり、夜討のあとのやうな寂しさであつた。『朧』はこの間に乘じて敵艦隊に近づき、四本煙突の一隻に水雷を發射して、砲彈を浴びながら引返して

來た。

さうした襲撃を終つた我が三隊の驅逐艦は、九日の夕方には相前後して朝鮮の北西岸に集合し、十日仁川の港口附近まで歸つて來た。この夜襲の爲めに、敵の戰艦『ツエザレウヰツチ』は舵機室を壞され、そこから水が入つた爲めに、左へ十八度も傾いてしまつたし、同じく戰艦の『レトウヰザン』は水線下喞筒室の側、巡洋艦の『パルラーダ』は中央水線下汽機室の近くを壞されたのである。

旅順と同時に大連灣にも、第四、第五の驅逐隊が向つたのだけれども、二隻の汽船に出會つただけで、遂に敵艦の影を發見することが出來なかつた。十日の午後二時には、兩隊とも仁川港口附近まで引揚げて來た。

驅逐艦の夜襲は期待されたほどの成績は得られなかつた。これは最初の夜襲隊が功を急いで、あとの隊がまだ來ないうちに敵に氣づかれてしまつた爲めに、十分な攻撃が出來なかつたのであるが、驅逐隊の司令が各隊別々になつてゐたのも一つの原因であつた。

この戰爭が濟んでから、驅逐隊を一司令官の下に統括されるやうになつたのは、この一度の經驗によつて編隊制度の缺陷がよくわかつたからである。併しこの襲撃が敵の膽を冷さしめたこと

は非常なもので、形に現はれない效果は決して少いものではなかつた。

水雷攻撃が濟むと翌九日には第一、第二、第三戰隊の全力で敵を砲撃し、多大の損害を與へ、更に二月十四日には艦隊の一部で第二次攻撃を決行し、次いで旅順口の封鎖となつた。

無造作な命令

例の決死隊が募られ、活躍したのは此の時だつたのである。

秋山參謀にも面白い逸話が傳へられてゐる。

或る夜更のことである。旅順港外の敵艦隊の様子を偵察してゐた若林艇隊から、突如として「今夜港内煤煙高く颺り敵艦隊出動の徴あり」といふ警報が、我が旗艦『三笠』に入つた。『三笠』は當時、聯合艦隊と共に裏長山列島に碇泊しつゝあつた。

警報に接した宿直將校は、電報を携へて直ちに下甲板にある秋山參謀の室へ飛んで行つた。深夜の艦内はひつそりと靜まり返つてゐたが、室の扉をあけて中を覗ふと、秋山參謀は上著を脱いで椅子に凭れたまゝ、すや〳〵と眠つてゐる。

「參謀、警報がありました！」

この聲が耳に入ると、眞之は靜かに目をさました。さうして將校が電文を讀み了るのを待つて、一向動じた色もなく、即座に次の命令を傳へた。

一、全軍直ちに出動用意。

二、『臺北丸』に信號、中央防材を開き、其の兩端に松明を點ぜよ。

右長官、參謀長に屆け直ちに發令せよ。

かう云ひをはるなり、秋山參謀は何事も無かつたかのやうに、靜かに眼を閉ぢて、再び昏々たる眠に入るのであつた。

宿直將校は參謀の命令通り、時を移さず、東郷長官と島村參謀長とに此の旨を傳へた。「敵艦隊出動の徴あり」といふ警報に、少からず興奮してゐた將校の眼には、秋山參謀の様子が餘りに冷靜に見えた。殊にこれほどの大事に臨んで、首一つ捻らずに、無造作に命令を下すのを見て、何だか頼りないやうな不安を覺えたが、東郷長官も島村參謀長も、參謀の命令報告を聞くと、「よし〳〵」と大きく頷いただけで、何の疑ふ様子も見えなかつた。（命令の中にある『臺北丸』といふのは、當時碇泊場の世話役をつとめてゐた船である）

やがて艦隊の出動準備が出來た頃を見計らつて、秋山參謀は悠々と艦橋に現はれた。

「長官、此の航路を進みます」

秋山參謀は海圖の一角を指し示して、東鄕長官にかう云つた。この兩雄の間に多くの說明は固より不要だつたのである。

何の思案も費さずに下したやうに見えるその命令は、敵艦隊がいつ如何なる時間に、如何なる針路を執つて脫走を試みても、翌朝未明以前には必ず敵の前路を押へ得る唯一の名航路であつた。當夜不安を感じた宿直將校——今の寺島少將——も、後に海軍大學で研究を重ねた末、秋山參謀が、卽座に下した命令が右のやうなものとわかつた時は、今更ながら舌を捲いて驚いたさうである。

併し、秋山參謀の態度が冷靜とか、無造作とかいふ風に見えたのは別に不思議なことも無い。平生から頭の中に、かういふ名作戰を疊み込んであるので、何時どんな警報を受取つても直ぐこれに應ずるだけの用意が出來てゐたのである。後に當時の事を質問された時、將軍の答へたといふ言葉は、最も簡單に此の間の消息を語つてゐる。

「身は作戰の焦點にあるも、心は高く天上に在り、故に鐵火の興奮なし。明鏡、私情に曇らさ

るが故に、八目の岡目は萬目の光を生ず」

黃海の戰

日露開戰當時の我が聯合艦隊は、敵の東洋艦隊と大體同じ位の勢力であつたから、若し前に述べた驅逐隊の夜襲が、秋山參謀の希望した通り、五隻の敵艦を沈めることが出來たならば、その後の戰は大分樂になる筈であつた。然るに敵は水雷にやられた艦を修理して、戰鬪力を盛り返した上に、我が軍は五月十五日に『初瀨』『八島』の二戰艦が敵の敷設水雷にかゝつて爆沈したので、著しく歩が悪くなつてしまつた。作戰當局の苦心は一通りではないが、肝腎の敵は旅順口に引込んだきり、少しも出て來ない。戰はうにも相手の無い狀態が半年も續いた。秋山參謀が、どんなにじれつたがつたかは思ひやられるだらう。

八月十日に至つて敵艦隊は遂に旅順口脫出を企てた。

黃海々戰はそこで始まつた。

秋山參謀は、後に此の黃海の戰では「どう考へても我に勝目のある筈が無かつた」と云つたほ

どの苦戰であつた。

此の戰鬪半ばに、秋山參謀は戰況の思はしくないのを見て、ひそかに皇祖皇宗の神靈を念じたと云はれてゐる。

六月二十三日、敵の艦隊は兎に角全力を揃へ、或る程度まで決戰の覺悟を以て港外へ出て來たが、封鎖艦隊が逸早く之れを遮斷したので、再び港内へ引返した。戰艦『セバストポール』は其の時我が水雷に觸れて傷つき、其の後巡洋艦『バヤーン』も同じ危害を蒙つて敵の勢も一頓挫した。けれども一方、乃木大將の率ゐる第三軍の背面攻擊が、其の間に大分進捗したので、敵艦も最早絶體絶命の立場に陷り、要塞と運命を共にするわけにも行かぬところから、終に八月十日に至り、決然封鎖を破つて浦鹽に遁れようとした。我が封鎖艦隊は再び之れを遮り、こゝに黃海々戰は起つたのである。

黃海々戰の戰場は第一圖に示す通り、旅順の前面遇岩の附近から山東角の北方、約三十海里に亙つてゐる。此の日旅順の敵艦隊は朝早くから掃海艇を出して、我が軍の沈めた港外の機械水雷を掃除し一條の通路を開くと、旗艦『ツェザレウヰッチ』を先頭に戰艦六隻、巡洋艦四隻が徐ろに港外に現はれて來た。これは勿論浦鹽斯德へ脫出する計畫なので、午前十時頃には已に老鐵山

第一圖

黃海海戰行動圖

頭の『三笠』は絶えず敵の集弾を蒙り、その大檣は根本に二發も弾丸を撃ち込まれた爲め、殆んど倒れさうになつたくらゐで、このまゝでは戰機の發展は到底不可能になつて來た。

この第一合戰に於て三分の遲刻が、追及の爲めに三時間を費す原因となつた。敵を浦鹽に近してはならぬといふことは、誰もが一樣に考へたところであつたが、一方には又六月二十三日の時のやうに、旅順に引返されはせぬかといふ懸念もあり、かういふ結果になつたものとも見られる。若し敵を前方に逸してしまつて、我が艦隊にそれ以上の速力が無かつたとすれば、何時までたつても追ひつくことが出來ない。假令浦鹽の口元まで追ひ駈けたところで、敵と味方の距離は縮まらぬわけである。併しこの三分の遲刻によつて戰が長引いたことは、後日の日本海々戰の場合に非常な教訓になつたので、必ずしも無意義なことではなかつた。

一度機を失した第一戰隊は、何よりも敵を逃すまいとして、一時は戰鬪を中止し、出來るだけの速力を出して、敵を追ひ拔くことに力めた。午後五時には敵の南方、山東角の方向に出で、且つ『八雲』その他數隻の艦も來り加はつて、漸く敵の南下する前路だけは遮斷することが出來た。が、こゝで戰鬪を開始したのでは、我が先頭を擊壓される氣味があつて、あまり有利な狀態ではない。けれどもぐづ〳〵してゐては日が暮れる恐れがあるから、第二合戰はかういふ不利な形勢

のまゝで五時三十分から開始された。

約一時間ばかりは梯行相殺の激戰であつた。敵も味方も多大の損害があつたが、六時三十分頃になつて、我が一彈は遂にこの海戰の運命を決した。即ちこの彈丸は敵の旗艦『ツエザレウヰツチ』の司令塔附近に爆中し、その主將と幕僚とを倒すと同時に、舵機をも破壞したので、同艦は忽ち左方にぐる〳〵回つて、味方の隊列に突き出した。

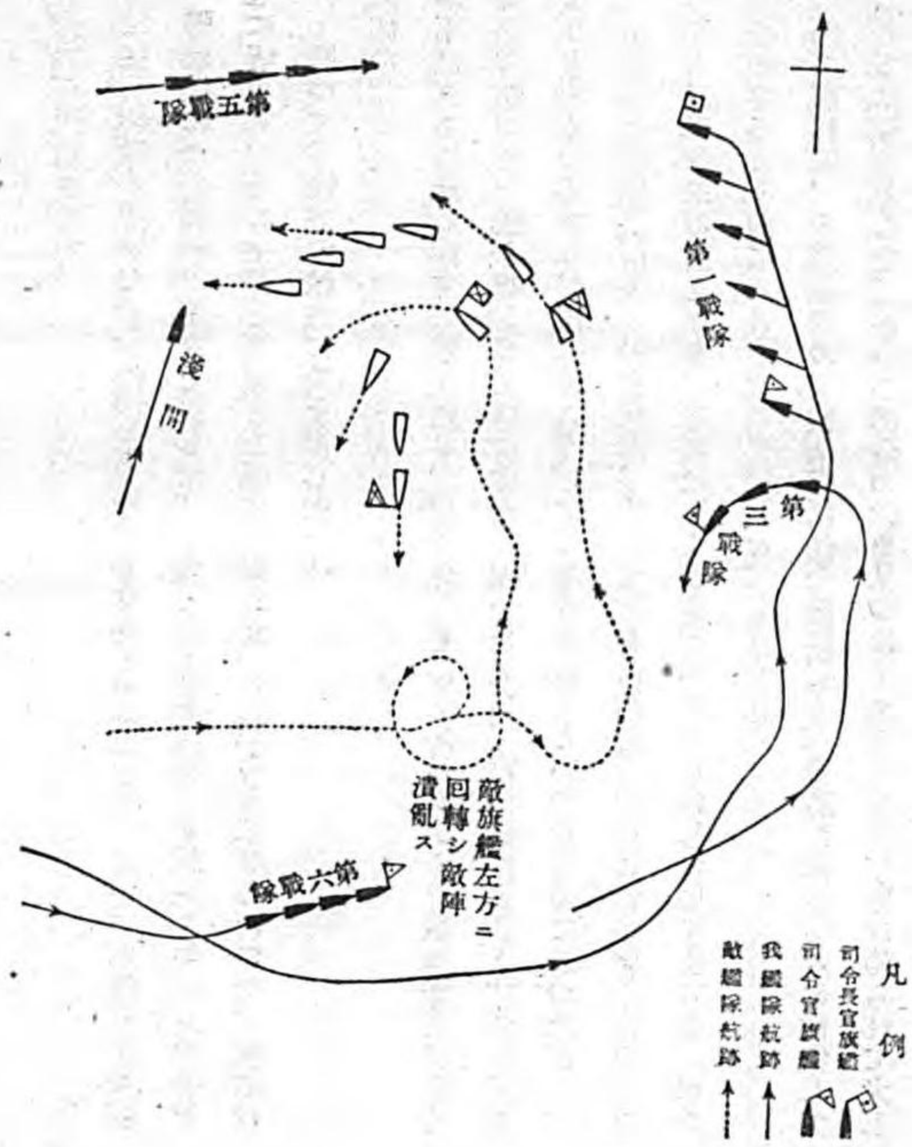
敵陣は立所に亂れた。

それと見て我が軍は直ちに敵の前方に廻り込み、狙撃急射を浴せかけたから、敵の隊列は全く崩れて遂に支離滅裂になつた。艦と艦とが互ひに意志の結合を失ひ、南へ逃げようとするのもあれば、北へ避けようとするのもあり、西へ還らうとするものもあるといつた有樣であつた。

この時『淺間』『松島』『嚴島』『橋立』の數艦が、後れて戰場に到著した。これが敵の西北方を押へて、第三圖の如き三面合擊の姿となり、戰鬪は全く我が軍の大捷に歸したのであるが、憾むらくは其の結果を收獲するより前に八月十日の日は暮れてしまつた。

夜に入ると共に例の驅逐隊、水雷艇隊の夜襲は行はれたけれども、敵艦が餘り方々に散亂してしまつた爲め思ふやうに見つからず、會〻小部分の敵を見つけて攻擊しても、逃げ廻られて大し

第三圖
黄海海戰第二合戰終期略圖



た效果が無かつた。

東郷長官はこゝで見切をつけて、翌日の戰鬪を期して黄海を南下し、對馬海峽の上村艦隊を此の方面に呼び寄せたが、翌朝になつて敵の過半は旅順に逃げ込んだといふことがわかつたので、自らは再び旅順に引返し、上村艦隊にも黒山島（朝鮮の南西端）附近から直ちに對馬海峽に歸つて、撃ち洩らされた敵艦を扼することと、浦鹽艦隊の出動に注意すべきことを命じた。

旅順の敵艦隊に合同する目的で、對馬海峽までやつて來た浦鹽艦隊が、上村艦隊の爲めに發見せられ、蔚山沖の海戰になつたのは八月十四日の早朝である。この戰爭によつて『ルーリツク』は撃沈せられ、他の二艦も復容易に立つことの出來ない大打撃を受けた。

黄海から逃げ延びた敵の快速巡洋艦『ノーヰツク』は、太平洋を迂回して宗谷海峽に出で、浦鹽に入らうとしたが、これも亦コルサコフ灣で、我が『千歳』『對馬』の一隊の爲めに撃沈された。『千歳』は黄海々戰を濟ましてから、對馬海峽に急航し、更に日本海の捷路を經て、宗谷海峽に先廻りしてゐたのであつた。

その他殆んど航海力を失つて膠州灣に逃れた『ツエザレウヰツチ』、上海に避難した『アスコリド』、又遠く西貢まで逃げ延びた『ヂイヤーナ』の如き敵艦もあるが、これらはいづれも武裝を解

いて交戰から除外せられ、旅順に引返した他の六艦も多くは大破して、遂にその要塞と運命を共にするの已むなきに至つたのである。

神靈の祈願空しからず

この黃海々戰に就いて、秋山參謀は所感を漏らしてゐる。

日露戰爭當時、我が海軍は敵の二分の一に足るか足らぬ位の兵力を以て、露國の三大艦隊を全滅せしめた。而かも我が聯合艦隊の大部分は殘存したのみならず、戰利艦を獲た爲めに、戰前よりも勢力を增加したといふことは、前古未曾有の不可思議な事實である。この不可思議な成功を贏ち得たのは、地理と時間の關係から、敵を二分して二度に攻擊することが出來た爲めでもあるが、それにしても我が艦隊の損失が少かつたことは、矢張不思議といふより外はない。

若し敵の第二、第三艦隊（所謂バルチック艦隊）が、三十七年中に東洋に到著するか、或は第一艦隊（在來の東洋艦隊）が、その半分だけでも三十八年まで殘つてゐて、バルチック艦隊に合同するとしたら如何であつたらう。縱令第一艦隊は全滅したにしても、その爲めに我が海軍力が

半減してゐたらば、到底勝算は立たなかつたに相違無い。いづれにしても我が海軍の勝敗は、バルチック艦隊がやつて來る前に、東洋艦隊を擊滅し得るかどうかによつて決するのであつたが、同時に又後に備へるだけの兵力の保全が必要なのだから、なか〳〵容易ならぬ問題であつた。黃海の海戰はこの難問題を解決して、日露戰爭の大勢を定めたものといつて宜いのである。

當時我が海軍の戰略的第一目標は、敵の東洋艦隊を出來るだけ早く——遲くともバルチック艦隊がやつて來るまでに擊滅するといふことであつたが、これに對して自然に起る第二の戰略的手段は、敵をして浦鹽の要地に據らしめぬことであつた。

同じく東洋艦隊を擊滅するにしても、之れを浦鹽に近づけず、黃海方面に拘束する必要があつたのである。開戰以來の作戰はすべてこの意味に於て行はれたので、東鄕司令長官の率ゐる主隊が旅順方面に在つて封鎖の第一線をなし、上村中將の率ゐる支隊は對馬海峽を扼して、旅順の敵を浦鹽に行かしめざる封鎖第二線を務むると共に、敵の浦鹽艦隊の行動をも監視しつゝあつた。即ち攻擊の主眼は旅順に於ける敵の主力に在つたので、浦鹽は敵を入らしめぬことを專らとして、その出るに任せ、寧ろすべてを旅順方面に纏めて擊滅しようとした。浦鹽艦隊が屢〻出沒して、我が運送船や商船に危害を加へたのは人の知るところであるが、當時の狀態としては、これまで

を處分する兵力が足らなかつたのである。

黄海々戰は實にかういふ意味の下に行はれたので、戰績の華々しからぬ割合に、全局に對する效果は偉大なるものであつた。その第一合戰の際、敵彈に九分九厘まで破られた『三笠』の大檣が、舷外に倒れかゝつたとしたならば、我が速力は減り、隊列は亂れて、とても敵に追ひつぐことは出來なかつたであらう。對馬海峽に上村艦隊がゐたといつても、果して敵の浦鹽に入るのを防ぎ得たかどうかは疑問である。或は又第二合戰の際、敵の司令塔を破つた怪彈が、反對に我が『三笠』の艦橋に中つたならば、勝敗の位置は顚倒してゐたかも知れない。これらは砲術の巧拙位で片づく問題ではない、戰運といふより外は無いのである。

秋山參謀は以上の事實を語つて、「吾人は何處迄も皇軍の天佑を確信せざるを得ない」と云つてゐる。けれども皇軍の天佑は決してこれだけでは無かつた。この日の兵力は敵味方略〻同じ程度だつたのだから、敵を全滅する代りに、我が軍も半減する位のことは、必ずしもないとは云へない。この日の結果によつては、ベルチック艦隊を迎へる場合の我が陣容は、心細いものになつてゐたかも知れないのである。

當時秋山參謀は、戰略的大勝利を獲ただけで滿足せず、戰場で敵を擊ち洩らしたことを殘念が

旅順に於ける第一艦隊・第三軍首腦部
乃木將軍と東鄕長官の中央後が秋山參謀

第一艦隊二艦隊長官と共の幕僚
右端が秋山參謀題字は秋山遺族の爲東鄕元帥の揮毫

つてゐたのであつたが、この時逃した敵の六大艦は、旅順陥落後すべて我が手に歸し、戰爭中に失つた我が海軍力を補足して餘りあつた。彼は「最早此に至つては全然天爲で、吾々人間には何が善いやら少しも分らない」と云ひ、又「之れを不可思議と謂はなければ、此の天地間に不可思議はなからう」とも云つてゐるが、この天佑を力說するところ、秋山眞之の面目躍如たるものがある。戰酣にして眞之が神を念じたのは、蓋し疑ひないと思はれる。

黃海の一戰は確かに日露戰爭の大勢を決した。參謀たる秋山少佐の胸中に戰爭全局に對する確乎たる信念と成算を生じたのも、恐らくこの時からであつたらう。

旅順の開城

旅順の敵艦隊は黃海の一戰によつて大打擊を蒙つたが、港內に引返した六艦がある間は、我が聯合艦隊はまだ封鎖勤務をやめるわけには行かなかつた。

當時對馬海峽を哨戒中であつた軍艦『浪速』の參謀森山少佐に宛てた秋山參謀の書翰には、

「旅順の殘艦さへ全滅すれば新來の波羅的艦隊等は左程恐るゝに足らざれども之を浦鹽に逸し

ては由々敷大事に可有之筈方にて隨分封鎖監視を嚴重に致居候得共又々脱出の際取逃さんとも保證致し難く候得ば御苦勞千萬に候得共海峽の監視尙精々御盡力の程奉願候」

といふ一節がある。新たにやつて來るバルチック艦隊は恐れぬが、それまでに旅順の艦隊を全滅しなければならぬといふのである。

當時旅順攻撃の大任に當つてゐた乃木大將の第三軍には、海軍からも參謀が派遣されて、共同作戰の議を交しつゝあつた。秋山參謀は此等の海軍參謀に對して、頻繁に激勵の書面を送つてゐる中、その十二月三日の書中に次のやうな一節がある。

「如何に大局より打算すればとて二萬有餘の大損害、而も作戰の目的は充分に達せられず、如何なる小生も第三軍の將卒に對し同情悲痛の熱涙を禁ずる能はず、殊に、乃木閣下の御心中を推察すれば吾々の困難苦心の如きは物の數にも無之、小生は未だ毛頭失望せず、大局に於て第三回旅順攻撃は戰略上の捷利と大觀し居ればなり。見られよ此の攻撃の大結果が程なく現れ來るべきを。」

二〇三高地の占領は、旅順陷落の一歩手前の大切なことである。秋山參謀は、旅順の攻略を、日露兩國の存亡に關することだと考へ、二〇三高地の一日も早く占領されんことを希望したので

あつたが、眞之の豫言は果して違はなかつた。

十二月五日に至つて二〇三高地は我が軍の手に歸した。此處に彈著觀測所を設けて間接射撃を行つたので、旅順口内の敵艦は一つも其の的から免れる事は出來なかつた。今まで氣がゝりであつた東洋艦隊の殘りの敵艦も、三日を出でずして一掃することが出來た。

かくして翌三十八年の正月匆々、遂に旅順は開城した。

曠古の日本海々戰

秋山提督の名を知るほどの人は、誰しも直ちに日本海々戰を聯想するであらう。それほど秋山と日本海々戰とは離れ難いものになつてゐる。黃海々戰が日露海戰中、最も重大な意義のものであつたことは、前に云つた通りであるが、武勳の華々しさから云へば、矢張り日本海々戰を推さなければならぬ。

東洋艦隊を全滅せしめた我が聯合艦隊は、殆んど息をつぐ間もなく、新しい大敵バルチック艦隊を迎へねばならなかつた。しかも我が聯合艦隊が最も頭を惱ました問題は、敵が對馬海峽を通

過するか、津輕海峽を通過するかといふことであつた。

此の問題は又、日本の全國民の熱血を沸騰させたり、氷のやうにつめたくしたりした。「對馬だ」「津輕だ」さう云つて世間では隨分騒いだ。米國海軍のマハン大佐の如きは、「日本艦隊は澎湖島附近に位置を占むべきだ」と云つた。

だが、我が東郷艦隊は沈著だつた。そして徐ろに敵艦の來るに備へた。敵が新嘉坡あたりへ來るまでは、專ら鎭海灣で訓練に從事しつゝあつたが、同時に、敵が津輕方面に向ふ場合をも豫想して、哨戒の計畫は樹てられた。愈〻敵が支那海に入り、臺灣の南方を通過したといふ情報があると、聯合艦隊は、今後或る時期までは對馬海峽方面に居るが、それから先は臨機、津輕方面に向ふといふ、前の哨戒計畫よりも一歩進んだ計畫が樹てられた。

併しながら敵は津輕海峽には向はず、對馬海峽を通過した。東郷司令長官は明斷を以て麾下艦隊を朝鮮海峽に集中し、之れを迎へ撃つて一擧に撃滅し得たのであるが、さりとて津輕海峽通過の場合を全然考慮に入れなかつたわけではない。若し敵艦隊が津輕に廻るとの情報があつたならば、鎭海灣の艦隊は直ちに猛然として活動を開始し、全速力を以て敵艦隊迎撃に向ふだけの手筈は出來てゐた。

戰務の上に於ても手配は遺漏なく行き渡り、沿海の要所々々には炭水彈藥の準備までして萬全を期してあつた。

この東西應機の構を樹てたことに就いて、世上では往々說をなす者もあるが、參謀たる秋山眞之の作戰に就いてのみ云へば、それは決して機械的なものではなく、飽くまでも科學的、組織的なものであつた。

秋山眞之は平素口癖のやうに「一擧撃滅」といふ言葉を用ゐた。單に口癖であつたのみならず、秋山の作戰は常に「一擧撃滅」を標準として樹てられたものであつたが、今やこの語を實現すべく、曠古の大海戰に臨んだのである。

練りに練つた七段構

バルチック艦隊を迎へ撃つに當り、秋山參謀はかねてからの練りに練つた七段構を以てしたといはれてゐる。七段構とは晝戰、夜戰の正攻、奇襲を交互に活用するもので、濟州島近海から浦鹽沖に至る海上を七段に分ち、それ〴〵の區域に於て、最も有效適切な攻撃法によつて敵を撃滅

しようといふのであつた。

時間的にいへば、第一段は主力艦隊が戰ふ前夜に、我が驅逐隊、水雷艇隊の全力を以て敵艦隊を襲撃せしめる。第二段は右襲撃の翌日、我が艦隊の全力を擧げて敵に正攻撃を加へる。第三段と第五段は、引續きその夜間に驅逐隊、水雷艇隊をして再度の奇襲的水雷攻撃を試みさせる。第四段と第六段は、その翌日我が艦隊の大部分を以て、敵の殘存部隊を鬱陵島及び浦鹽港前に追撃する。最後の第七段に至つて、かねて竊かに浦鹽の港口に敷設したる水雷沈設帶に敵を追ひ込む——大體かういふ作戰であつた。

その作戰の規模雄大にして而かも用意周到なことは、古今の海戰を通じて類が無いものであつた。

併し愈〻海戰がはじまつてから、實際に用ゐられたのは第二段から第四段までに過ぎなかつた。夜戰を目的にした第一段が省かれたのは、戰爭が畫間から始まつた爲めであるが、第五段以下が用ゐられなかつたのは、第四段までで敵艦隊が全滅してしまつた爲めである。

堂々たる七段構の戰法を案出した秋山參謀からいへば、いさゝか張合が無かつたかも知れないが、日本海々戰が豫期以上の大成功であつたことは、これだけでも十分にわかるであらう。

有名な丁字戰法

日本海の大海戰は、五月二十七日午前五時、南方哨艦の一である『信濃丸』の無線電信に始まつた。

「敵艦隊二〇三地點ニ見ユ、敵ハ東水道ニ向フモノ、如シ」

といふ警報に接した我が艦隊は勇み立つて直ちに活動を開始し、各部隊は豫定の部署について對敵行動を執ることになつた。

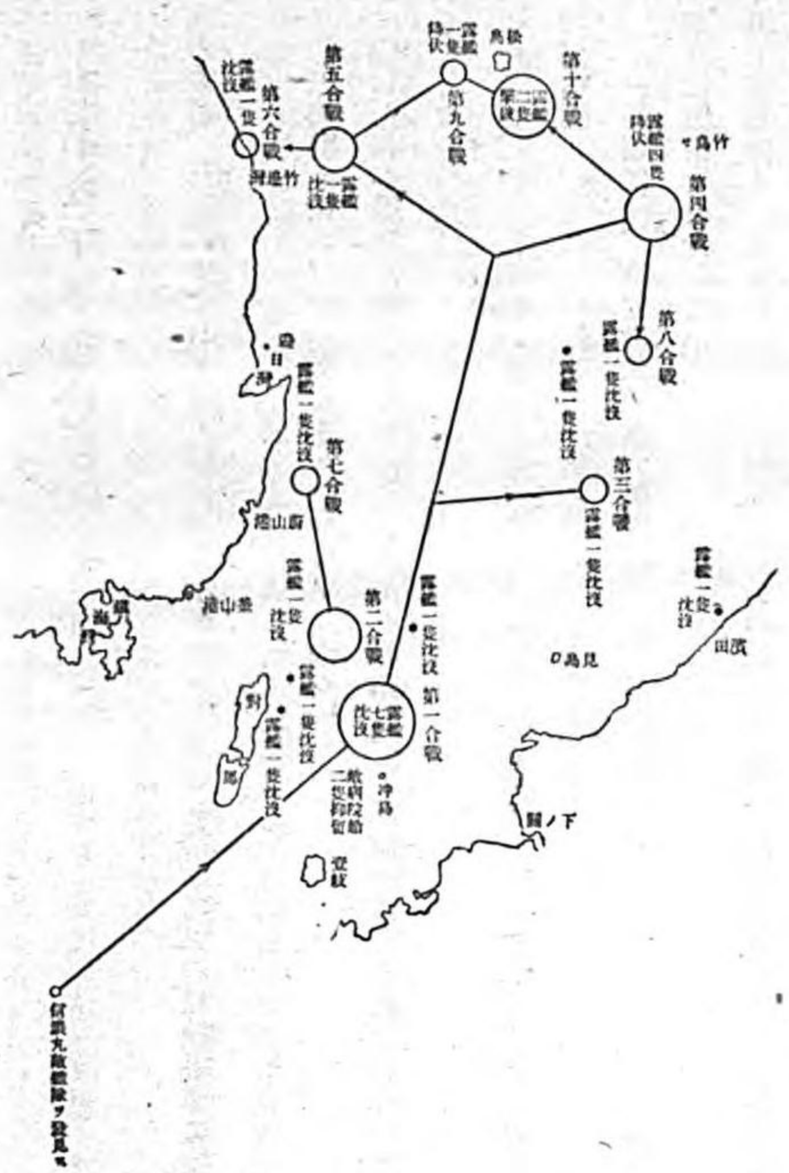
午前七時になると、內方警戒線の左翼哨艦であつた『和泉』からも、敵は已に宇久島の北西二十五海里の地點に達し、北東に航進しつゝある事を報じて來た。

午前十時、十一時頃には、第五戰隊、第六戰隊は敵の砲撃を受けたけれども、終始よく敵と接觸して時々刻々に敵情を報告して來た。

この日は海上濛氣深く、五海里とは展望が利かなかつたに拘らず、右の報告によつて數十里を隔つる敵艦隊の模樣を手に取るやうに知ることが出來た。卽ち、

第一圖

日本海海戰戰場略圖



一、敵の戰列部隊は第二艦隊及び第三艦隊の全力であつて、特務艦船約七隻を伴つてゐること。

一、その陣形は二列縱陣であつて、その主力は右翼列の先頭に位し、特務艦船は後尾に續いてゐること。

一、その速力は約十二海里で、尙北東に進みつゝあること。

等の事實は、敵を見るより先に知り得たところであつた。我が軍は之れに對し、主力を以て午後二時頃沖ノ島附近に敵を迎へ、左翼艦列から擊破する計畫を立てた。

我が第一、第二、第四の諸戰隊及び各驅逐隊は、正午頃已に沖ノ島の北方約十海里のところに達した。さうして敵の左側に出る爲めに、北西より心持西方に針路を執つた。午後一時三十分頃になると、第三、第五、第六の諸戰隊も敵と觸接を保ちながら漸次來り合したが、同四十五分に至り、我が左舷南方數海里のところに、はじめて敵影を發見した。

敵は豫想通り、右翼列の先頭に「ボロヂノ」型戰艦四隻の主力艦隊を置き、左翼列の先頭には『オスラービヤ』『シソイ・ウエリーキー』『ナワリン』より成る一隊が居り、『ニコライ一世』その他海防艦三隻より成る一隊が之れに次ぎ、『ジエムチウグ』『イズムルード』の二艦は兩列の間に介在して、前方を警戒するものの如くであつた。尙ほ後方の濛氣の中には『オレーグ』『アウロ

ーラ』以下二三等巡洋艦の一隊、『ドンスコイ』『モノマーフ』その他の特務船などが、數海里に互り連綿として續いて來るのが仄かに見えた。

機は至つた。我が軍はこゝに於て戰鬪を開始し、一時五十五分全軍に對して、有名なる「皇國ノ興廢此ノ一戰ニ在リ、各員一層奮勵努力セヨ」の信號を揭揚した。

斯くて第一戰隊は暫く南西に頭を向け、敵と反航通過するやうに見せたが、二時五分に至り忽ち東に折れ、その正面を變じて斜に敵の先頭を壓迫した。第二戰隊もこれに續いてその後に從ひ、第三、第四、第五、第六の諸戰隊は豫定戰策により、何れも南下して敵の後尾を衝いた。

この海戰に於て、我が軍が大捷を博し得た主なる原因は、開戰劈頭に針路を轉じて敵の先頭を壓した一事に在る。

丁字戰法なるものは黃海々戰にもあり、海軍戰術の定石なのであるが、この日はこの戰法を行ふべく餘りに距離が近過ぎた。それは朝來濛氣が海面を蔽うてゐて遠望に適せず、敵を認めるのが遲かつた爲めであつて、强ひて旋回を企てれば大いに敵彈を浴びなければならぬ結果に陷る。かゝる場合は定石が定石にならぬばかりか、寧ろ避けねばならぬ位のものである。

然るに東鄕長官は斷乎として之れを行つた。

我が艦隊が敵前八千メートルに於て、大膽不敵なる逐次回頭を試みるや、敵の旗艦『スウオーロフ』の艦橋に在つたロジエストウエンスキーの幕僚は手を拍つて叫んだ。

「我勝てり、東鄕狂せり」と。

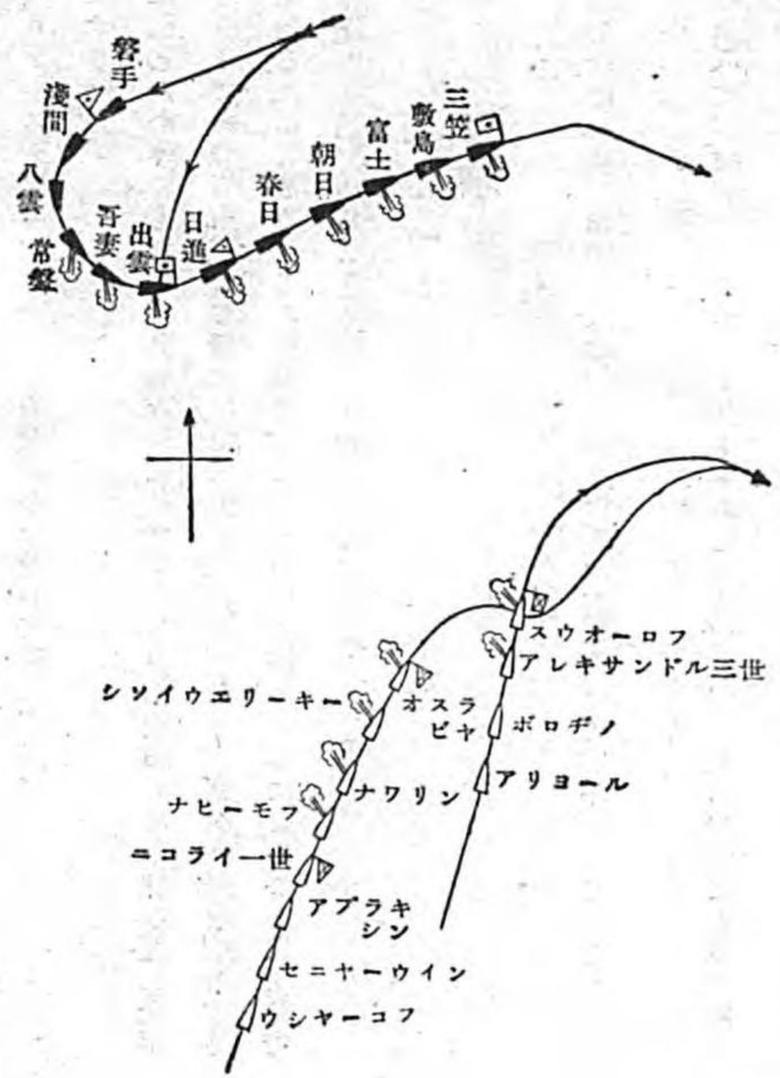
併し東鄕長官は別に狂したわけでもない。黃海々戰に於て敵と反航した爲めに戰機を逸した事を思へば、一時不利なやうであつても、この策に出でて敵の先頭を壓迫し、逐次敵艦を擊破するのが得策であることを信じたのである。この壯擧を敢てしたのは主將の果斷によることは勿論であるが、同時に秋山參謀の殊勳であることも認めなければならぬ。

晝戰＝一擧擊滅

我が第一艦隊の壓迫を受けた敵の先頭部隊は、稍〻その舵を右に向けて、午後二時八分から砲擊を始めた。

我が軍は暫く之れに耐へて、射擊の距離が六千メートルに入るに及び、敵の先頭にゐる二艦に猛烈な砲火を浴びせた。

第二圖
日本海海戰
午後二時十二分の對勢



敵はこの砲擊の爲めに益〻右方に壓迫された模樣で、左右兩列とも漸次東方に針路を變じ、自然に不規則な單縱陣をなして、我が軍と竝航の形になつた。左翼列の先頭に在つた『オスラービヤ』の如きは、忽ちの中に擊破され、大火災を起して戰列を脱するに至つた。

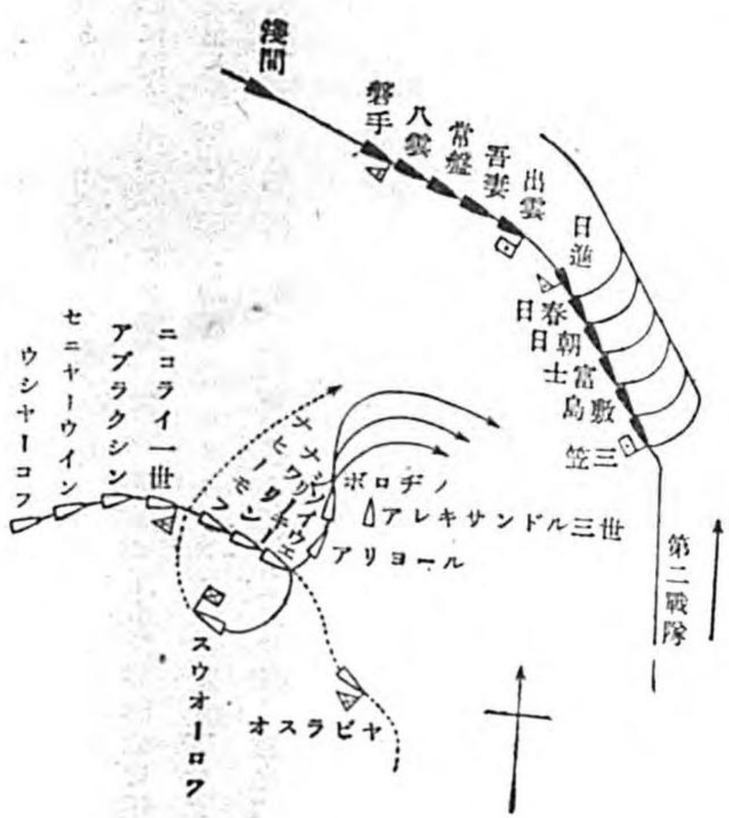
この時、我が第二戰隊は、已に悉く第一戰隊の後方に竝び、全線に亙る掩擊砲火は距離が縮まるにつれて益〻顯著なる效果を呈して來た。敵の旗艦『スウオーロフ』二番艦『アレクサンドル三世』も、大火災を起して共に戰列を離れ、敵の陣形は愈〻亂れて、之れに續く諸艦にも火災に罹るものが多かつた。

火災によつて騰る煙は折柄の西風に靡いて、忽ちに海上一面を蔽ひ、濛氣と共に敵艦を包んだので、第一戰隊の如きは一時射擊を中止せねばならぬ位であつた。

我が軍に於ても各艦に多少の損害があり、殊に『淺間』の如きは後部水線に敵彈を受けた爲め、浸水が甚しかつたのみならず、舵機を損じたので、一時列外に落伍するの已むなきに至つたが、間もなく應急修理を加へて再び戰列に入つた。

以上は午後二時四十五分前後に於ける兩軍主力の戰況であつて、勝敗は已に此の間に決してゐたのである。

第三圖
日本海海戰
午後三時十五分の對勢



我が主隊は、さうして敵を南方に撃壓し、煙霧の間に敵影を發見する毎に、徐ろに之れを砲撃しながら、午後三時頃には已に敵の前面に出て、約東南東に進みつゝあつた。

然るに敵は俄かに北方に頭を向け、我が後尾を廻つて北に走らうとする樣子だつたので、第一戰隊は急に左十六點に一齊に回頭し、『日進』を嚮導として敵を抑へつゝ北西に向つた。第二戰隊も亦その跡を追ひ、正面を變じて之れに續き、再び敵を南方に撃壓して猛射を浴びせた。

三時七分、敵艦『ジエムチウグ』は第二戰隊の後方に突進して來たが、我が砲火の爲めに殆んど撃退せられ、已に戰鬪力を失つた『オスラービヤ』も同十分に沈沒した。孤立した旗艦『スウオーロフ』は大破愈〻甚しく、マスト一本と煙突を失ひ、全艦は煙燄に包まれて、どうすることも出來なかつた。

其の他の諸艦も、いづれも多大の損害を受けながら、又針路を東方に執りつゝあるのを見て、我が第一戰隊は一齊に右十六點に回頭し、第二戰隊も亦之れに次いだ。

敵の遁ぐるを追つて益〻敗艦を掩撃し、時機を見ては水雷を發射した。

其の後、四時四十五分頃までの我が主隊の戰鬪には、別に著しい現象も無かつた。たゞ終始敵を南方に壓する如く砲撃を續けたに過ぎなかつた。

が此の間に在つて、特筆すべき壯烈なる事蹟は、廢艦『スウオーロフ』に對する兩度の水雷攻撃であつた。此の攻撃は『千早』及び第五驅逐隊によつて同四十五分ごろ試みられた。『千早』の奏效は確實でなかつたが、第五驅逐隊の發射した一水雷は過たず左舷後部に命中して、間もなく『スウオーロフ』の艦體が十度許りも傾くのが見えた。この勇敢なる襲撃中、第五驅逐隊の『不知火』と、第四驅逐隊の『朝潮』は附近の敵艦から猛射を浴びせられ、共に一彈を受けたが、幸にして無事であつた。

午後四時四十分頃に至り、敵は北方に血路を開くことを斷念したらしく、漸次南方に向つて遁走する模様であつた。我が主隊は第二戰隊を先頭にして之れを追撃したが、遂に敵影を煙霧の中に見失つてしまつた。

しかし、それから約八海里ほど南下する途中、我が右方に、離ればなれになつて彷徨しつゝあつた敵の二等巡洋艦、特務艦船等を認めたので、之れに對して徐ろに砲撃を加へたが、五時三十分、第一戰隊は再び針路を北方に執つて敵の主力を索むることとし、第二戰隊は南西方に折れて敵の巡洋艦に迫ることになつた。

斯くして、日沒に至るまで、この兩戰隊は分離したまゝ、遂に相見ることが無かつた。

（沈没の巡洋三隻中）敵　海　海　本　日

中　炎火大の「フローオウス」艦隊司令官旗は方後の其「ヤピーラェナ」はるせ湖に沒沈方前は「士官」「船長」「進日」「日春」「日朝」は左の艦隊「笠三」はるゆ見に田の艦隊と柱水東遠央「手教」「霧八」「春常」「春石」「霧出」りよ右で隊艦二第我は東遠方右（千へ見で に艦隊

五時四十分頃、第一戰隊は左方近距離に在つた敵の特務艦『ウラール』を一擊の下に擊沈した。更に北方に進んだ時、左舷艦首に當つて敵主力の殘艦六隻より成る一群が、北東に向つて遁走しつゝあるのを發見したので、直ちにこれに接近し再び竝航戰は開始された。

我が艦隊は漸次敵の前方に出でてその先頭を擊壓したので、初め北東の針路を執つてゐた敵も、次第に左方に屈折し、遂に北西に向ふに至つた。

この竝航戰は午後六時から日沒まで繼續された。

敵は大破の餘り、著しくその砲力を減少してゐるに反し、我が沈著なる射擊は益〻その威力を遺しうした。『アレクサンドル三世』と見えた敵艦は早くも列外に出て後方に落伍する。先頭に在つた「ボロヂノ」型戰艦は、六時四十分頃から大火災を起し、七時二十三分に至り、俄然爆煙に包まれると見えたが、瞬く間に沈沒してしまつた。蓋し火が彈藥庫に及んだ爲めであつたらう。

當時南方に在つて敵の巡洋戰隊を北方に追擊しつゝあつた第二戰隊の諸艦は、已に傾斜して進退の自由を缺いた「ボロヂノ」型の戰艦が一隻、七時七分に敵艦『ナヒーモフ』の側に來て、遂に顚覆沈沒したのを目擊してゐる。後日捕虜の言に徵すると、これが『アレクサンドル三世』だといふことであるから、第一戰隊の見たのは『ボロヂノ』だつたのである。

永い五月の日も漸く西に暮れた。我が驅逐艇隊は東南北の三面から漸次に敵に迫り、已に襲撃準備の姿勢を執るに至つたので、第一戦隊は敵に對する壓迫を弛め、日沒（時に午後七時二十八分）と共に東方に針路を變じた。同時に『龍田』をして「全軍北航シテ明朝鬱陵島ニ集合スベシ」と電令せしめ、當日の畫戰はこゝに幕を閉ぢた。

追撃また追撃

一方第三、第四、第五、第六の諸戦隊は午後二時、戦闘開始の令が下ると共に、いづれも我が主隊と離れ、敵を左舷に見て反航南下した。これは豫定戦策により、敵の後尾に在る特務部隊及び『オレーグ』『アウローラ』『スウエトラーナ』『アルマーズ』『ドンスコイ』『モノマーフ』等の巡洋艦を脅威する爲めである。

第三、第四の兩戦隊は終始共同連繫して、午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦隊に對して反航戦を開始し、漸次敵の後尾を旋撃してその右に出で、更に竝航戦を試みた。我が軍は連力の優勢なるを利用して、機宜によつて正面を變じ、敵の左に現はれ、右に廻り、約三十分ほど攻撃を

續けたが、敵の後方部隊は漸次に動搖潰亂し、その特務艦隊の如きは右往左往するばかりで、爲すところを知らない狀態に陷つた。

三時過『アウローラ』らしい敵艦が單獨突進し來つたが、我が猛射の爲めに多大の損傷を負うて撃退せられた。三時四十分頃突撃し來つた敵の驅逐艦も、何等爲すところなくして撃退された。

第三、第四兩戦隊の協力攻撃の效果は、午後四時頃から著しく發展した。敵の後方部隊は全く潰亂して個々に分裂し、且つ其の諸艦は皆多少の損害を受けたものの如く、特務艦船の中には已に操縦の自在を失つたものがあつた。

第四戦隊は四時二十分頃、『アナツイリ』かと思はれる三本マスト、二本煙突の特務艦が、一方に孤立してゐるのを認め、直ちに近づいて之れを撃沈した。次いで『イルツイシ』とおぼしき四本マスト、一本煙突の特務船も、我が猛射の爲めに殆んど撃破された。この頃に至つて第五、第六の二戦隊も來り加はり、協同して敵の巡洋艦及び特務艦船を掩撃しつゝあつたが、四時四十分頃、敵艦四隻南下し來つて巡洋艦に合力した。これは我が主隊に撃壓された戦艦（或は海防艦）で、我が第四、第五戦隊は暫く近距離に於て之れと對戦する苦境に陷り、多少の損害を受けたけれども、幸に大した事も無くて濟んだ。

これより前に第三戰隊の旗艦『笠置』は、左舷炭水庫の水線下に一彈を受けたが、浸水の度がだん〳〵烈しくなるので、その應急修理の爲めに、波の靜かなところへ行かざるを得ないことになつた。

出羽司令官は麾下の『新高』『音羽』二艦を一時瓜生司令官の指揮下に屬せしめ、自らは『笠置』『千歳』を率ゐて午後六時油谷灣に赴いた。さうして將旗を『千歳』に移し、夜に入つてから北へ向けて發航したが、『笠置』は修理に時間がかゝつたので、翌日の追撃戰には參加することが出來なかつた。第四戰隊の旗艦『浪速』も後部水線に敵彈を受けた爲め、同戰隊は午後五時十分頃一時戰場を離れて、損傷に應急修理を加へた。

けれども敵はこの時南北兩方面とも、已に全軍が潰亂滅裂の狀態に在つた。五時三十分頃、我が第二戰隊が主隊を離れてこの方面に來り、南方から敵の巡洋艦を追撃すると同時に、敵は群をなして悉く北方に遁れた。第四、第五、第六の諸戰隊は共に之れを追撃したが、その途上に於て已に進退の自由を失つた敵の廢艦『スウオーロフ』と工作船『カムチヤーツカ』を發見したので、第五、第六戰隊は直ちにその撃滅にかゝつた。かくて『カムチヤーツカ』は七時十分に撃沈され、『スウオーロフ』も第五戰隊に隨伴した第十一艇隊の襲撃を受けた。『スウオーロフ』は後尾に

ある小砲門を以て最後の抵抗を試みたが、遂に我が水雷二發によつて沈沒した。

時に七時二十分であつたが、間もなくこれらの諸戰隊は鬱陵島集合の電令に接したので、いづれも戰を止めて北方に向つた。

夜戰＝驅逐隊、水雷艇隊の夜襲

二十七日の夜戰は晝戰終結の後を受けて、驅逐隊及び水雷艇隊によつて開始された。この日は朝來南西の强風が浪を高く上げるので、小艇の操縱は甚だ困難であり、水雷艇隊の一部は晝戰の始まるに先だつて、悉く三浦灣に避けさせた位であつた。

夕刻になつて風はやゝ凪いだけれども、浪は依然として靜まらない。かうした際の水雷攻撃は、我が軍にとつて、不利が少くないに拘らず、勇敢なる我が驅逐隊及び水雷艇隊は、皆この千載一遇の好機を失ふのを恐れ、風濤を冒して日沒前に集つて來て、豫定通りの夜襲に移つたのである。

攻撃は午後八時十五分、第二驅逐隊が敵の主力の先頭に第一撃を加へたのをはじめとして、各驅逐隊は一時に突進し、敵の周圍に集つて十一時頃まで激烈な肉薄襲撃を續けた。

敵は日沒頃から探照砲火を以て極力防戰に力めたけれども、遂にこの攻擊に堪へず、四分五裂の狀態に陷つた。

敵は血路を求めて各艦任意に行動し、我が諸隊は之れを追うて襲擊したので、大混戰を現出することになり、戰艦『シソイ・ウエリーキー』裝甲巡洋艦『ナヒーモフ』『モノマーフ』の三隻は我が水雷に罹つて戰鬪力と航海力とを併せ失つた。

我が第一艇隊の第六十九號艇（司令艇）第十七艇隊の第三十四號艇（司令艇）第十八艇隊の第三十號艇の三隻が敵彈の爲めに擊沈されたのも、この襲擊の際である。駆逐艦『春雨』『曉』『夕霧』、水雷艇『鷺』、第六十八號、第三十二號艇等は敵彈を受けたり、衝觸したりした爲めに多少の損害を受けて、一時戰鬪に參加し難くなつた。死傷も亦少くなかつたが、沈沒した水雷艇三隻の乘組員は、『雁』、第三十一號、第六十一號艇等の友艇によつて救助收容された。

後日捕虜の話によると、當夜の水雷攻擊は實に言語を絶する猛烈さで、我が艦艇が相次いで肉薄して來る爲めに、到底應接の遑が無かつた。且つその距離があまり近く備砲俯角の度を超えてゐたので、照準することが出來なかつたさうである。

右の外第四駆逐隊及び爾餘の水雷艇隊は、他方面に敵を搜しつゝあつたが、二十八日の午前二

時頃、韓埼の北東微東約二十七海里の地點で、二隻の敵艦が北へ向ふのを發見した。その一隻は我が襲擊を受けて忽ちに轟沈された。後日捕虜の語るところでは、この敵艦が戰艦『ナワリン』で、兩舷に連續二發宛の水雷が命中し、少時にして沈沒したといふ話である。その他諸艇隊は終夜各方面を搜索したけれども、遂に何の得るところも無かつた。

古今未曾有の大勝利

日本海の一夜はかくして明けた。

二十八日の明方の空は、前日來の濛氣も拭つたやうに晴れ渡つてゐた。

第一戰隊、第二戰隊は已に鬱陵島の南方二十海里のところに達し、爾餘の諸戰隊、終夜奮鬪した各駆逐隊も、種々な航路を執つて集合しつゝあつた。

午前五時二十分、敵の退路を遮斷すべく、巡洋艦隊を以て東西に搜索列を張らせようとする際、後方約六十海里のところを北進しつゝあつた第五戰隊は、早くも敵影を發見し、東方に當つて敵の煤煙が幾筋も見えることを報じて來た。やがて又同戰隊から、敵は戰艦四隻——後にこの中の

二隻は海防艦であることがわかつた——と巡洋艦二隻で、今北東に向つて進みつゝある旨の警報があつた。それが殘敵の主力であることは疑を容れないので、我が軍は直ちに之れを包圍した。敵はいつの間にか五隻になつて、遙かに南方に後れた巡洋艦一隻は、最早その姿が見えなかつた。

包圍された敵艦は、已に多大の損害を負うても居り、敗殘の餘勇を奮つて抵抗することも出來なかつた。砲火は第一戰隊、第二戰隊によつて開かれたが、間もなく敵の司令官ネボカトフはその部下と共に降伏した。東鄕長官は特にその將校以上に帶劍を許すこととした。

この降伏に先だち敵艦『イズムルード』は、その快速力を恃んで南方に逃れようとしたが、我が第六戰隊に遮られて又東に走つた。この時油谷灣より急航した『千歳』は、途上敵の驅逐艦一隻を撃沈した上、こゝに馳せ加はつたのであつたが、これと見るや直ちに『イズムルード』を追跡した。しかし相手は敗餘の殘敵であつても、速力の差は如何ともすることが出來ず、遂に北方に影を見失つてしまつた。

これより前に第四戰隊は、午前七時頃、北航の途上に於て西方に一隻の敵影を發見した。有馬普羽艦長は『普羽』『新高』等を指揮して、之れを撃滅すべく分派されたが、漸く近づくに及んで、それは敵艦『スウエトラーナ』が一驅逐艦を伴ふものであることが明かになつたので、追窮戰鬪

の末、十一時五分竹邊灣沖に於て『スウエトラーナ』を撃沈してしまつた。

殘つた驅逐艦『ブイスツルイ』も『新高』及びその場に來合せた驅逐艦『叢雲』に追撃され、十一時五十分、竹邊灣の北方約五海里のところに乘り上げて最期を遂げた。但しこの二艦の生存乘員は我が特務艦『亞米利加丸』『春日丸』によつて全部救助された。

一方ネボカトフが降意を表して後、我が聯合艦隊の大部分は、その附近に漂泊しながら、敵艦四隻の捕虜を處分しつゝあつたが、午後三時頃、南方から敵艦『ウシヤーコフ』の來るのを發見した。『磐手』『八雲』の一隊はその南走するのを追及して、先づ降伏を勸告したけれども之れに應ぜず、却つて向ふから發砲してかゝつたので、已むを得ず撃沈した。この生存者三百餘名もやはり救助收容された。

この間に在つて思ひがけぬ手柄を立てたのは驅逐艦『薄』である。午後三時三十分頃鬱陵島の西南約四十海里のところで、東から遁れて來た敵の驅逐艦二隻を發見したので、驅逐艦『陽炎』と共に極力之れを北西に追かけた。四時四十五分、追ひついて戰鬪を開始したが、後の方の一隻は白旗を揭げて降伏の意を示した。『薄』が直ちに捕獲すると、これは驅逐艦『ベドウイ』であつて、敵の司令長官ロジエストウエンスキー中將及びその幕僚が此の艦内に移乘してゐることが

わかつたので、乘組員と共に之れを捕虜にした。『陽炎』は他の一隻を追擊して六時三十分に及んだが、遂に之れを北方に逸してしまつた。

同じく五時頃西方に敵を捜した第四戰隊及び第二驅逐隊は、敵艦『ドンスコイ』の北に走るのを發見し、鬱陵島の南方約三十海里のところまで來ると、竹邊灣方面から進み來つた『音羽』『新高』の一隊、驅逐艦『朝霧』『白雲』『吹雪』等が西方から敵に迫つて、期せずして第四艦隊と挾み擊ちにする形になつた。日が暮れるまで左右から猛烈に砲擊して、殆んど之れを擊破したが、全く擊沈するに至らぬ間に海上は夜となり、敵影は見えなくなつてしまつた。『吹雪』及び第二驅逐隊は砲擊中止と同時に襲擊にかゝり、この効果は不明であつたけれども、翌朝に至り『ドンスコイ』は鬱陵島の東南岸に漂ひ、遂に沈沒したことを發見した。生存者六百餘名が鬱陵島に上陸してゐたのを、『春日』『吹雪』等が救助收容した。

聯合艦隊の大部分が北方追擊にかゝつてゐる間、前日の戰場である南方に於ても亦相應の獲物があつた。

二十八日早朝、戰場掃除の任務を帶びて出かけた特務艦『信濃丸』と『八幡丸』は、韓埼の北東約三十海里の地點で、敵艦『シソイ・ウエリーキー』が前夜の水雷攻擊の爲めに沈沒せんとしつゝあるのを發見し、之れを捕獲してその乘員を救助收容したが、この艦は午前十一時五分に沈沒してしまつた。

又午前五時三十分頃、對馬の東方約五海里のところで敵艦『ナヒーモフ』が殆んど沈沒に瀕し、『モノマーフ』も艦體著しく傾斜してゐるのを、我が驅逐艦『不知火』特務艦『佐渡丸』が發見して、その乘員を救助したが、二隻とも十時頃に相次いで沈沒した。この時附近に來かゝつた敵の驅逐艦『グロームキー』も、俄かに北方に遁れようとして『不知火』の爲めに追擊された。さうして遂に蔚山沖に於て『不知火』及び水雷艇六十三號の爲めに捕獲され、生存乘員は皆捕虜となつたが、『グロームキー』は大破して午後零時四十三分に沈沒した。

その他にも砲艦、特務艦等が戰場附近の沿岸等に於て救助收容し得た敵の乘員は少からずあり、戰利艦五隻の捕虜と併せて殆んど六千人に達してゐる。

曩古の大戰たる日本海々戰は、斯うして五月二十七日午後から二十八日午後にわたる丸一晝夜で全部を終つた。その後、我が艦隊の一部は遠く南方に敵を捜索したけれども、遂にその隻影だに發見することが出來なかつた。

最初日本海を通過しようとした敵艦隊は約三十八隻であつて、我が擊滅、捕獲から免れたと認

めらるゝものは、巡洋艦、驅逐艦、特務艦等數隻に過ぎない。然るに我が艦隊の損失は水雷艇三隻のみで、その他多少の損害を蒙つたものもあるけれども、今後の役務に差支へるほどのものは一つも無かつた。

秋山提督は、後年日本海々戰を回顧して、「日本海々戰の過半は追擊戰であつて、眞に勝敗を決したのは最初の三十分間だつた」と云つてゐる。

實に驚くべき大勝と云はねばならない。

敵屍に祈る

海戰の第二日、二十八日の午前十時頃、我が艦隊に依つて包圍された敵の殘艦隊の主力は、一向應戰の樣子が見えなかつたが、やがて旗艦『ニコライ一世』の檣に何か信號旗らしいものの動くのが見えた。初めは遠いのでハツキリわからなかつたけれども、それは「降伏」といふ萬國船舶信號であることが明かになつたので、我が軍は發砲を止め、各戰隊をして竹島の南々西約十八海里のところに於て敵艦隊を包圍させた。

敵の降伏を受ける爲めに、秋山參謀と三笠分隊長の山本（信次郎）大尉が『ニコライ一世』に赴き、敵將ネボガトフに會見することになつた。山本大尉はフランス語に堪能なので、特に通譯に選ばれたのである。

軍使秋山參謀と山本大尉とは水雷艇『雉』に乘つて、直ちに『ニコライ一世』に赴いた。舷側に水雷艇を著けたが、浪が荒いのと、『ニコライ一世』は舷側の斜角が急なのとで、なか〳〵上れなかつたが、索梯によつて漸く艦上に昇つて行つた。

艦上は異樣な興奮狀態だつた。何だか不穩なやうな雰圍氣が漂うてゐた。しかし秋山參謀は敵の參謀長の案内に從つて、悠揚迫らざる態度で歩いて行つた。

甲板上には戰死者の死骸が澤山横たはつてゐた。水兵等がそれをハンモックで包み、水葬しようとして口々に祈禱の辭を捧げつゝあつた。初め艦内の空氣が不穩に見えたのは、この祈禱の聲と、水葬の準備に騷いでゐるのを、言葉がわからない爲めにさう感じたのであつた。

戰死者水葬の樣を目擊すると、秋山參謀はつか〳〵と死骸のところへ進んで行つて、その前に跪いて靜かに默禱した。その樣子には固より僞りならぬ至誠の心が溢れてゐたので、之れをぢつと見てゐた敵の艦員の眼にも、自ら僞りならぬ感謝の情が動いた。

それ以來彼等の態度に反抗の色は消えて、尊敬と親しみに似た感情さへ仄見えるのであつた。

將官室で會見したネボカトフ少將は汚い戰衣を著けてゐた。秋山參謀は、山本大尉の佛譯によつて東鄉司令長官の意を傳へた。

一、東鄉長官ハ貴下ト共ニ玆ニ慘烈ナル海戰ノ終リヲ告ゲタルヲ喜ビ、且ツ名譽ノ降伏トシテ貴艦隊ノ降ヲ受クルタメ小官ヲ送レリ、就テハ貴下等ノ帶劍ハ其儘ニ帶セラレタシ

一、已ニ受降ノ上ハ貴艦隊ノ艦船兵器等一切ノ現狀ヲ維持スベキコトヲ直チニ各艦ニ嚴達セラレタシ、若シ故意ニ之ヲ毀損スルモノアルトキハ我ガ軍法ニ依リテ處分スベシ

一、右ノ外降伏委細ノ條件ニ就テハ東鄉長官貴下ニ會見シテ協定サルベキヲ以テ、可成速ニ貴下自ラ我ガ三笠ニ來艦アランコトヲ望ム

ネボカトフ少將は、默々として聞いてゐたが、秋山參謀の言葉が終るとしづかに云つた。

「私の方は最早戰鬪の餘力も無いから、凡て御命令に從ひます。しかし其の意志を各艦に傳へる間、暫く御猶豫を願ひたい」

さうして參謀長と共に士官室に赴いた。しばらく幕僚と評議してゐる樣であつたが、約三十分ほどたつと再び入つて來た。

「各艦への傳達は漸く了りました。これから貴艦へ行かうと思ひますが、この艦のボートは皆破損して使用が出來ません。貴官の艇に便乘させて頂きたい、たゞこれから昨日來の戰死者を水葬し、服裝を改める必要があるから、尙ほしばらく御猶豫を願ひたいです」

この要求を承知すると、ネボカトフ少將は頻りに昨夜來の海戰の結果に就いて質問を始めた。秋山參謀は相應の返事をすると同時に、それとなく反問して敵情を知ることも出來たが、海戰談はなか〳〵果しがなかつた。秋山參謀が再び來艦を促すと、ネボカトフ少將と參謀長は、はじめて氣がついたやうに、倉皇私室に赴いて禮服に著替へた。

將官室を辭して上甲板に出ると、間もなくネボカトフ少將以下、參謀長幕僚は悉く禮服を著けて現はれた。彼等は總員を後甲板に呼び集め、涕を呑んで悲壯なる露語の演說を試みた。そして、簡單に戰死者の水葬式を了ると、一同我が水雷艇に乘り移つて旗艦『三笠』に來著した。

『三笠』の將官室で兩將以下の會見は行はれた。それが終ると、八代大佐の通譯によつて降伏條件が協定された。秋山參謀はこの時艦橋に上り、各艦捕獲員の部署を定めたりしてゐたので、約四十分ほどたつて將官室に還つて來たが、其の時は、談判は已に終つて、兩將は三盞酒の盃を擧げ海戰の終結を祝しあつてゐた。

敵の屍に對してさへ祈を捧ぐる眞之の心情こそ、日本の麗はしい武士道でなくて何だらう。

天佑と神助

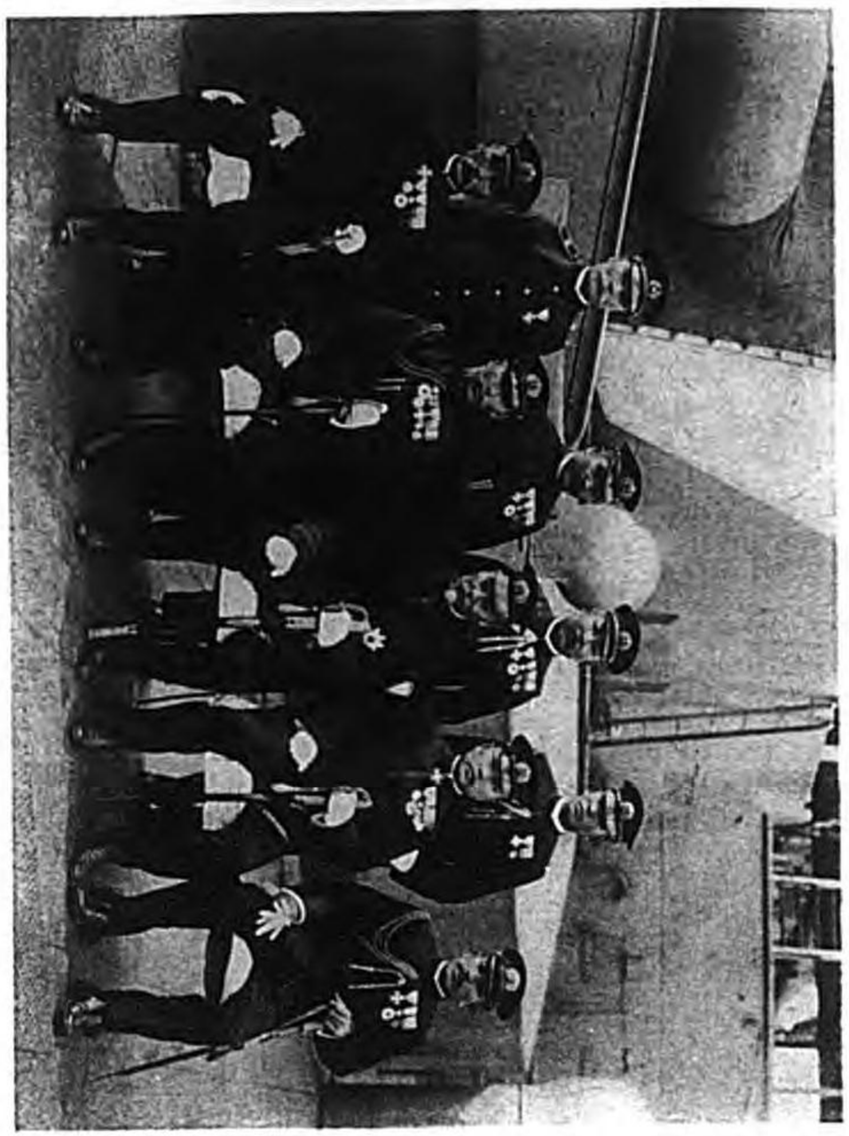
日本海々戰の顚末を記したものに、秋山參謀の文案に成る有名な報告文がある。報告文は、

「天佑ト神助ニ由リ我ガ聯合艦隊ハ五月二十七八日敵ノ第二、第三艦隊ト日本海ニ戰ヒテ殆ド之ヲ擊滅スルヲ得タリ」

の語を以て始まり、左の數語を以て終つてゐる。

「此ノ對戰ニ於ケル敵ノ兵力我ト大差アルニアラズ、敵ノ將卒モ亦其ノ祖國ノ爲メニ極力奮鬪シタルヲ認ム、而モ我ガ聯合艦隊ガ能ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇蹟ヲ收メ得タルモノハ一ニ天皇陛下御稜威ノ致ス所ニシテ固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ、特ニ我ガ軍ノ損失死傷ノ僅少ナリシハ歷代神靈ノ加護ニ由ルモノト信仰スルノ外無ク曩ニ敵ニ對シ勇進敢戰シタル麾下將卒モ此ノ成果ヲ見ルニ及ンデ唯感激ノ極言フ所ヲ知ラザルモノ、如シ」

これらの言葉は恐らく秋山眞之の肺腑から生れたものであらう。日本海々戰に於て天佑神助は



艦橋上の海軍參謀長（大佐）秋山眞之（中佐）山本權兵衛海軍大臣（海軍大將）東鄕司令長官（大將）
末田海軍參謀（少將）山本海軍參謀（中佐）中村海軍參謀（少佐）岡田參謀（少佐）川崎主計

少からずあつた。

バルチック艦隊が對馬海峽を通過するか、津輕海峽を廻るかが問題となつてゐた頃、敵は我が艦隊の眼をくらますべく、『テレツク』『クーバン』の二隻の假裝巡洋艦を南支那航海中から分派した。この二隻は臺灣沖から東京灣一帶の沿岸をかけて、太平洋一帶を遊弋し、日本商船を拿捕したり、艦影を出沒せしめることによつて、バルチック艦隊は津輕海峽を廻るものの如く見せかけ、その虚に乘じて對馬海峽を突破しようといふのであつた。而かもこの策謀は、戰後六箇月餘を經て、ロシアで出版された戰記によつて、我が海軍のはじめて知り得たところなのである。

けれども實際は、我が商船にしろ、沿岸の漁民にしろ、かういふ使命を持つた『テレツク』『クーバン』二艦を誰も發見しなかつた。商船の拿捕などといふことに立到らなかつたのはいふまでもない。然らばこの二艦は何處へ行つたか。最後に南洋へ航行したといふのが事實らしいが、これが任務を果さなかつたのは、日本にとつて大なる天佑であつた。多少日本近海にも現はれたらしいのに、どうして何人の目にもつかなかつたか。若しその片影でも見た者があつたとしたならば、戰前に於ける敵艦隊通過航路の問題がより一層重大なものとなつて、東郷長官、秋山參謀を惱ましたに相違あるまい。

或は浦鹽艦隊「信濃丸」が最初に敵艦隊を發見した時でもさうである。「信濃丸」の通力が非常に強い上に、この頃は霧が深くて偵察が困難であつた。それが濃霧の中で逸早く敵を發見したのは、敵の艦隊が本十字の信號旗を揭げてゐた爲めであつた。單分科陸給にしろ、敵艦隊に附屬してゐる以上は、殊に艦隊と一緒に進行して戰場へ入らうといふのに、經を點じて行くといふ法は無い。それが何故信號旗を揭げてゐたか。これさへ揭げれば、或は「信濃丸」に見つからないで濟んだかも知れないのだから、敵としては非常な不幸であるが、さういふ點を彼の誰も氣がつかなかつたといふことは、これが天佑でなくて何であらう。

天佑と呼ぶべき事柄はまだいくらもあるが、「天佑神助」の一番が、如何に非常に効した事であるかは、この一二の例でも明かであらう。秋山提督は後に黃海々戰と日本海々戰を比較して、「海は海に喰へてゐる。海の黃海々戰も、日本海々戰も、共にせたる天佑神助に惠まれてゐたこと」は、我が國にとつて此の上もない佳合せであつた。

海軍兵學上の功績

日露戰役中に於ける武勳ほど華やかではないが、むしろそれにも優れて、秋山提督が我が海軍に遺した偉大な功績は、提督が初めて我が海軍兵學の根幹を建設したといふ點にある。

眞之が、あの明晰犀利な頭腦をもつて、海軍兵學の諸項目を統合分類し、そこに組織的な一科學を確立するまでは、我が海軍の兵學なるものは、茫乎として何等の統制もなく、甚だ非科學的のものであつた。

然るに眞之が米國から歸朝後間もなく、海軍大學校に兵學講座を擔任するやうになつて、それを組織化し、合理化し、日本海軍兵學百年の根柢を築いたのであつた。

少壯士官時代から軍學研究に專念してゐただけに、眞之には早くから海軍兵學に對して獨創的の見識があつた。眞之が軍略家としての存在を認められるまで、當時ひとり海軍のみならず、我が國各方面の總ては、一にも西洋、二にも西洋で、ひたすら盲目的に歐米文物に心醉し、これを禮讃してゐた。隨つて海軍の兵學なども、一定の獨創があるではなく、歐米のそれを殆んど直譯的に丸呑みにして、我が物としてゐた。陸軍も亦同樣で、メッケルの兵書をもつて唯一の金科玉條とし、戰略にも、用兵にも、教材にも、專らこれを指針とし規準としてゐた。

天才的兵學家秋山眞之は早くも此の點に著眼し、帝國々防の爲めに多大の危惧を抱かざるを得

なかつた。

凡そ國防は、他の學術的眞理の探究とは事違ひ、國土の情況によつて左右さるべきもので、何處までも獨自的であるべきものである。それを國情も遙へば地形も遙ふ異邦の兵書をそのまゝ直譯して、我れに何等獨自のものがないとすれば、それは甚だ寒心すべきことである。眞之は斯う考へて、それ以來直譯でない帝國海軍兵學の樹立に就いて考へるやうになつた。そしてそれを見事に大成したのであつた。

秋山眞之が、海軍兵術を組織化したうちでも、最も主要なるものの一つは、兵術を戰略、戰術、戰務の三大種目に分ち、それを更に基本、應用に區別した事であつた。

即ち此の場合に於ける戰略とは、戰爭又は戰役の全局に對して考察するもので、軍の配備その他の根本問題を取り扱ふものであり、戰術となると、ずつと局部的で、敵軍との交戰に當り、如何なる計畫により、如何なる隊形を以て闘ふかといふ技術的性質を多分にもつものである。

圍碁で云へば、戰略は布石で、戰術は局部々々に起る手筋や定石に類するものである。更に日露戰役について言へば、開戰當初、我が全艦隊を三艦隊に分けて、それ〴〵の任務に當らしめたり、また旅順口を封鎖したり、バルチック艦隊迎擊の地點を定めたりしたのは戰略であつて、バ

ルチック艦隊と指呼の間に接して、丁字又は乙字戰法を用ゐ、或は夜襲を實行する等、正奇虛實の術を盡して之れを擊破したのは戰術に屬するものである。

戰務といふのは戰略、戰術を實施する事務的方面の總稱であつて、所謂後方勤務、即ち彈藥、兵器、炭水、兵糧等の補給作業等もそのうちに包含されるもので、これを前二者と對立し、獨立せしめたのは、秋山眞之の一見識であつた。一寸考へてみれば戰務の如き後方勤務は輕いやうであるが、その如何に依つて士氣にも影響すれば、作戰にも直接に關係がある。むしろ作戰の基礎をなすもので、その重大性は前二者に少しも劣らぬのである、俗に「腹が減つては戰爭は出來ぬ」などと昔から言つてゐるのは、偶然ながら此の戰務の重大性を物語つてゐるものである。

此の兵學上の三大事項に對する秋山眞之の區分法は、それが各〻典型的のもので、世界的にその價値を認められ、中にも戰務に對して秋山の組成したものは、彼の世界の海軍國である英國でさへも、その一部を採用してゐる所を見ても、如何にそれが完璧なものであるかが察せられるのである。秋山は獨り日本海軍の至寶であつたばかりでなく、世界的兵學家でもあつたのである。

兵理の會得

眞之は支那の孫呉から、西洋のブルーメ、メッケル、我が國各流の軍書といつたやうに、苟くも軍書といふ名の附くものは、手當り次第に讀破した。しかも單なる軍書ばかりではなくて、馬術、弓術の如き武藝書まで、軍事に關するものは拔目なく眼を通し、其の極意を會得して兵學に應用した。現に眞之が海軍大學校に於ける兵學講演中に學生に與へた、左の訓言は卽ち眞之自身の實踐躬行を示したものである。

「諸君願くば自ら兵理を會得せんには戰史の研究、各種兵書の涉獵を敢行されんことを、之れ實に諸君の術力を增加する唯一無二の方法である。講座に於て敎官に聞く所は啓發の端緖となることはあつても唯〻斯くの如きこともある、是れもある、と言ふ知識の增加で力は增加しないのである。卽ち此等戰史、兵書より得たる所を自分にて種々樣々に考へ、考へた上に考へ直して得たる所こそ實に諸君の所有物で、假令觀察を誤ることあるも尙百回の講座に勝る所得である。殊に兵術は口で言ひ筆で書いたものでない活術で、各自の研究自學に依り會得する外はないのだ」

卽ち眞之は和漢洋、片つ端から涉獵したとはいつても、それらの書籍は固より玉石同架で、その間眞之の選擇眼が鋭く働いてゐた事はいふまでもないことである。

眞之が特に愛讀し、常住の參考としてゐたものは、和書では甲越の爭ひに關する兵書、山鹿流軍書、漢書では孫子、呉子、洋書ではブルーメの「戰略書」などであつた。中にも川中島に於ける武田、上杉兩雄の用兵法は現地に就いて詳細に研究し、非常に會得する所あり、現に其の一部を日本海々戰にも應用した位であつた。又眞之渡米の際にはブルーメの戰略論一冊だけ携帶し、米國軍事の研究に從事する暇には、常に此の戰略論を精讀咀嚼し、それから得たる結論を米國軍事研究上に應用して、海軍々學の基礎根柢を作つたのであつた。

秋山軍學の基調

秋山軍學の根本精神は何處にあるか？

これはなか〳〵重大問題であつて、しかも秋山の軍學を知らんとする者には、最も必要な問題

である。

また同じさうした問題でも、觀點によつて歸納する所も多岐であらうが、秋山の軍學の目標が、殺敵にあらずして、屈敵であつた事が、その重大なる特質の一つであつた。凡そ歐米の戰略は殺敵主義であつて、敵に對しては單兵隻馬といへども、毫も餘すところなく全滅させる底のものである。然るに眞之は和漢の屈敵主義を採用し、孫子の所謂「戰はずして敵を屈するは善の善である」といふ主旨に則つて、獨創的戰略を編み出し、これを兵學の基調としてゐた。

由來我が國は仁義の國である。如何に敵國と戰端を開けばとて、必要以上、憎惡に驅られて殺戮を事とするといふやうなことは執らざるところである。秋山軍學が、現に我が海軍戰略の主流をなすとするなれば、此の屈敵主義の軍學こそ、君子國日本のそれとして誠に相應しいものでなければならない。隨つて一面からいへば、秋山のかゝる主義の軍學こそ國民性の現はれともいふべく、また眞之個人としては、智將、勇將であると同時に仁將でもあり、人間としては、人道主義者であつた眞之の個性の現はれであるともいへるのである。とはいへ屈敵主義も殺敵主義も勿論比較的の話で、たとへ屈敵主義なりと雖も、徒らに宋襄の仁に囚はれる事なきはいふまでもない話である。

眞之は又「戰略戰術の要訣は天地人の利を得るにある」といつてゐた。

天は時である、如何なる機に於て敵と合戰するか、如何なる天候のもとに如何なる作戰を執るか、これが卽ち天である。

地は場所である、我れは如何なる地點を取り、如何なる地點を敵に與へてならぬか、これが卽ち地である。

人は人の和である、如何なる統帥の下に如何なる軍を配するか、如何にして主將の命令を徹底せしむるか、如何にせば敵の連繫を絕ち得るか、これが卽ち人である。

以上を根本として、秩序正しく微細に互り考究するのが、戰略戰術の主眼であると眞之は說いてゐた。

まだ數へ上げれば他にもあるが、右の二つは特に秋山軍學の基調を成すものであつたことは確實である。

海賊戰法と甲越軍學

眞之は又日本古代の海賊戰法、伊豫の水軍などを非常に研究した。何でも明治三十二年頃の事で、眞之はまだ大尉の時だつた。彼は胃腸をひどく害したので長與氏の胃腸病院に入院してゐた。或る日眞之の知人である小笠原長生子爵が、見舞に行くと秋山大尉は「どうも寢て居ると退屈して困るが、何か面白い本はないか」といふことで、小笠原子は早速五六冊の書を大尉の許へ送つた。其の中に「野島流海賊古法」といふ寫本があつた。

一體日本中古の水軍は、吉野朝廷時代から戰國時代へかけて發達を遂げたもので、十數種の流儀が出來てゐる。其の中最も古い歴史を有してゐるのが海賊流である。これは北條氏の末路、天下漸く亂れんとする時に當つて、豪放不羈の士が部下を率ゐ、互ひに海賊と稱して內海沿岸の各所に據り、其の勢力は諸侯のやうであつたが、吉野朝の頃、伊豫の豪傑村上義弘が諸海賊を征服して己の麾下に置き、自ら其の大將軍となり、水軍を組織し之れを海賊流と稱した。野島流といふのは此の海賊流から分派したものである。

それから一週間程經て小笠原子爵は再び病院に秋山大尉を訪うた。すると大尉は會心の笑を滿へて、

「實に有益な本だ。あれを活用したら立派な戰術が出來る。自分も是非寫して置きたいから暫く貸して貰ひたい」といつた。

大尉が非常に熱心なので、小笠原子爵も、それならばといふので、早速同じ古書である所の「海賊流」、「三島流」、「甲州流」、「全流」等の書も送り屆けた。

當時眞之が特に會心に堪へない樣子で、「實に愉快ぢやないか」といひながら小笠原子に示したのは、

○全力を以て爭ふ。
○散舟共の志を一にすべし。
○舟を攻めずして人心を攻む。
○敵の氣を奪ふ。

と云ふのであつた。もつと詳しく云ふと、

一、水軍の根本主義とする所は常に我が全力を擧げて敵の分力を擊破するに存する事。

二、常に長蛇の陣を以て基本陣形となせる事。（長蛇の陣といふのは今日の縱陣を指すのである。何故に有利かといへば長蛇の陣は如何なる陣形にも變化し易く、從つて敵を包圍するに便利だと水軍書にある）

三、外來の戰術は物質上體形上には種々研究が積んでゐるが、精神上の修練には缺くる所がある。日本中古の水軍に至つては卽ち深く主將等の心得も論じてゐる。

といふ以上三個の特長を捉へて推賞したのであつた。恐らくは此の時こそ、秋山提督が本邦中古の水軍研究に興味を持つやうになつた一動機で、後年達成せる特有の光輝ある戰術は此處に發芽したのではあるまいか。

日露戰役後小笠原子爵は日露海戰史の編纂委員となつて、其の編纂中屢〻秋山提督（當時中佐）と會合し相談した。或る日小笠原子が冗談に海戰航跡圖を檢討しながら、

「どうも、どことなく水軍のにほひがするやうだね」

といふと中佐は例の通り少しく顏を突き出して、ちよつと頭を曲げ、

「白砂糖は黑砂糖から出來るよ」と笑つた。

日本海々戰には、此の古代の水軍戰法が、多分に取り入れられた事は言ふまでもない事である。

それにしても胃腸病院入院が端なく、秋山眞之に古代水軍研究の機會を與へ、それが彼の軍學、延いては我が海軍の戰略に重大なる影響を與へたといふことは、偶然といふ事の發展が、屢〻人生の上に面白い足跡を殘すものだといふ事を、今更の如く思はせられるものである。

又秋山眞之が甲越の軍書を愛讀した事は前にも記したが、伊豫の水軍を研究したと同樣に、その戰略の中には、此の甲越の戰法が餘程入つてゐる。たとへば日本海々戰の場合、あの七段の備へを立て、晝と夜と新手の軍を順ぐりに繰り出して、敵を殲滅するの策を樹てたのも、甲越戰法にある「車掛り」の戰術を應用したとも言へる。

「提督は甲越の爭ひには非常に興味を持つてゐたらしい。提督の性格としては、信玄よりも謙信の方が好きらしかつた。といつて謙信が好きかと正面から聞いてゆくと、例の負けず嫌ひの性格で、圖星をさゝれるのが嫌ひだから、これを否認して居たやうだつたが、どうもいろ〳〵の點から推して、謙信が好きだつたやうに思はれる。また提督が謙信のやうな人だつたといふと、相當反對論が出るであらうが、人物の全部がさうでないまでも、何處か一致した點があつた。しかし其の戰法となると、提督の戰法は寧ろ謙信流よりも信玄流の方に近いと思はれる。提督の作戰計畫は極めて科學的で綿密であつたからだ」

る可らず。然らざれば枯死するの外無し。即ち植物の其生を保たんが爲に土中より水分を吸收し、鳥獸は又植物を食して生存し、人類が牛馬を使役して生存するが如し。而して其食せらるるもの空氣水分の如き死物なるときは此に抗爭起らずと雖も、苟も生を保つもの即ち生物なるときは假令植物なりとも我性を以て必ず多少の抗爭をなすべきは又生存上當然の理なりとす。是れ即ち生存競爭の因て起る所以にして所謂弱肉强食となり、適者のみ生存する所以なり。若し其眞理を的確に觀念せんと欲せば、吾人が母の胎内を出て本來無一物ながら如何にして今日迄生長したるか、日々食ふ所の菜肉、著する所の衣服一つとして他を侵さずして得たるものにあらざるなり。

此生存競爭は苟も我なる本領を以て此世に出生したる者の爲さゞる可らざる天然自然の爭鬪にして、若し此爭鬪なからしめんとせば生者即滅の寂境を見るの外無く、即ち爭鬪は生活に伴ふものにして生活即ち戰爭なりとの極理に徹底する所以なり。

以上は單純なる生存競爭の根源を述べたるに過ぎざれども此生存競爭の情態は千樣萬態に變化し、單に前記の如く牛馬が植物を食ふが如き、即ち異類の侵食のみにあらずして又同類間にも行はるゝものなり。例へば二獸の一肉片を爭うて鬪するが如きものにて、人類の間にも此

爭鬪は常に絶えざるものなり。玆に二人の人ありて共間に一個の林檎あり之を喰はざれば生存する能はざる場合には忽ち玆に爭鬪を起し、其一人他の一人を殺倒若は屈服せしめ、果物を取つて自己一人の食となさゞる可らざるに至る。爰に於て其一人は斃れざる可らざるなり。古の聖賢は是等の爭鬪の極端に走りて人類相互の幸福を害するを憂ひ、道德家は或は人類を擧げて之に絶對的信仰服從、宗教家は絶對的の萬有の力を有する神を崇拜して己れの欲せざる處之を人に施すこと勿れと說き、或は身を殺して仁を爲せと敎へ、我は餓死するも林檎を彼に與へよと言ふと雖も、素と是れ人類の天性を制御する强制的法則なれば、世界開闢以來未だ爭鬪の絶えたること無く、人類の歷史は現象こそ變化するとも實に生存競爭の歷史にして諸種の情態に於て間斷なく爭鬪しつゝあり。而かも生存競爭は單に現下の必要のため目前の一林檎を爭奪する如きものならずして、之に慾望を加味して尙ほ將來のために之を貯へんとし、更に感情を加へて過去の報復を事とするに至る。其爭鬪の爲に智力を研ぎ手段を盡し爭鬪の情態は愈〻益〻複雜となり、所謂文明開化なるもの卽ち制度文物技術の改善は或る意味に於て此爭鬪の方法の進化を示すに外ならざるなり。

而して此等の爭鬪は單一なる個人のみにあらずして漸次に擴張して團體の爭鬪となり、或は

家と家、或は族と族、或は鄕と鄕となり、又州となり國となり、其團體中に於て各自の協同生活の爲に必要なる文物制度等を設け、又自衞若は進略の爲に必要なる常備の武備機關を設くるに迄にも今日は進化し來れり。又其團體中に於て起る所の個人、個家の小爭の如きは法律を布き、決裁者を定め、其判決に依り爭鬪を威力手段に訴へざる前に結著せしむるの道を設くと雖も、唯、手段の平和的なるのみにして爭鬪の消滅したることなし。

此生存競爭團結の範圍は現時に於て其最大極限を國家の程度迄擴張し來り、地球の表面に國する者は諸種の手段を盡して其生存に必要なる資料を爭奪す。而して地は物を生ずるものなるが故に土地の爭奪最多かりしも、近世は所謂利權の爭奪と進化し來るに至れり。而して其爭奪の手段は必ずしも威力的ならずして工業商業植民等の如き平和手段を用ふるもの多く、又世界の交通漸く開けて列國の交際も次第に親密となり、又昔時卽ち秀吉が朝鮮を戮し、忽必烈が日本に寇せしが如き所謂侵略手段を見ずと雖も唯手段の進化したる迄にて利權爭奪、生存競爭は人類本來の持前として今日も尙ほ地球の表面に行はれつゝあり。而かも利權の擴張が相牴觸せざる時は其處に國爭起らざれども、一たび生存上の利害相衝突して甲國は是れ我が利權なり乙國も亦是れ我が利權なりと主張して玆に意見の矛盾を見るときは先づ其理非を國際慣例等に匡

し言爭を以て之を爭ふと雖も、言爭決せざるときは遂に威力手段を用ふること尙ほ個人の口爭が腕力に化すると一般なり。此國と國との間の平和的抗爭が腕力的抗爭に變じたるものを稱して戰爭とは云ふなり。

而して世界に國するものは皆此戰爭の慘害を厭ひ、可成之を避け、生存競爭を平和的手段のみに限らんとし其利權の範圍を確定して爭奪なからしめんとするとも、人口の繁殖と共に其生存に必要なる物資及之を生ずべき土地等の必要は次第に增加し、而かも天が動物に爪牙手腕を賦與したる以上は遂に戰はざらんとするも得べからず、卽ち戰爭なるものは天に雷雨あり海面に風濤起る如く物理上自然に起るべきものにて、之を絕無ならしめんとするは單に人爲的に屬し自然にあらず、人多ければ天に勝つことありと雖も亦天定りて人に勝つの時節到來して遂に人爲は天爲に逆ふ能はずして戰爭を皆無ならしむる能はざるは必然なり。故に戰爭は永世絕ゆべきものにあらざるなり。而かも國家が干戈を以て爭鬪する狹義の戰爭は其起るべき間隔を或程度人爲的に延長し得れども所謂生活は戰爭なりと云ふが如き廣義の戰爭は日々夜々間斷なく活動の世界をなせることを觀ずれば所謂平和なるものも亦戰爭にして、吾人が先に戰術を考究して戰爭中に戰鬪の起るは僅少にして戰鬪の間に間隔を見るが如く、又大觀し來れば戰爭と戰

爭との平和の間は所謂戰爭準備の時間なること尙ほ戰爭間に於ける戰鬪の如きものなるを觀念するに至らん。卽ち一國の歷史は連綿たる大戰爭なりと見ざる可らざるに至る。此大戰爭の大戰略卽ち國是の大方針は其國の頭主の定めらるゝ處にて吾人の玆に研究せんとする處は此の如き大々戰略にあらずして唯前記したる戰爭の範圍內に於ける戰略である。

以上述べ來りたるが如く世界の列國は其存立の爲め常に其國利國權を保護すると同時に之を伸張せんとするが故に其意志の衝突牴觸に依り遂に抗爭せざる可らざるに至り、理非を平和手段に依り決する能はざるときは遂に戰爭なる威力手段に訴へざる可らざるに至るは人類の生存競爭より來るべき自然の趨勢にして決して避く可らざることなり。然れども若し此世界が統一せられて四海兄弟の理想の域に達し、恰も現下の一國が一領主を戴き法律を布き制度を置て自治せるが如くなるときは生存競爭の現象は或は平和的手段のみに依り、威力手段卽ち戰爭なる現象を見ざるに至るべしとの理想を抱くものありと雖も、斯くの如き時代に至れば抗爭の範圍を大にして更に此世界卽ち地球と他の世界卽ち火星の如きものが相競爭せざる可らざるに至ることあるべし。然れば是に宇宙を統一せざれば戰爭を絕無ならしむる能はず、然るに宇宙は洪大無邊にして統一し得べきにあらず、統一さるゝものは宇宙にあらざるなり、而かのみならず

分合は事物の眞理にして合すれば分れ分るれば合ふものなるは人事も物理に洩るゝことなく、周天下を一統すれば春秋戰國に分れ、秦之を一統して更に、漢楚となり、漢天下を定むれば更に三國を生ずるが如き分合離結の現象は過去の歷史に之を見る如く將來にも亦是あるものと覺悟せざる可らず。故に此理勢より見るも亦統一期す可らず、從て戰爭の熄むことなきを見るに足るなり。又吾々人間は其れ程迄に戰爭を嫌惡せざる可らざるかも亦疑なき能はず。戰爭は慘憺たるに相違なしと雖も之を避けて他人の侵害に屈服して其慘苦を嘗むると何れが嫌惡すべきやと問へば寧ろ前者を優れりとす。況んや吾人は已に生物の天然として其生存の爲に競爭せざる可らざるの天分を有せり。生活は戰爭なりの定義より云へば初より戰爭は人間としてなさざる可らざるものと覺悟し必要あれば之を敢行せざる可らず、故に吾人は戰爭を好むべきにあらざると同時に又惡むべきにあらざるなり。

卽ち吾人は渴すれば飲み餓すれば食ふが如き觀念を以て必要上より戰爭を見るを可とす。古哲曰く國雖大好戰者危、國雖安忘戰者亡、實に至言にして彼の戰爭を嫌惡して人爲的に之を絕無ならしめんとして却て之に倍する慘害に陷るべきを覺えざる徒と、又彼の必要以外濫りに腕力を勞してその贏ち得たる處失ふ處を償はざるが如きものとは共に憐むべき愚者の見なり。

秋山文學

「秋山文學」の名は一世に鳴り響いた。

日本海々戰を追想する時、誰の頭にも甦つて來るものは、あの開戰初頭、『三笠』の艦上に翻つた「皇國の興廢此一戰にあり」の信號と、秋山參謀の名文「天氣晴朗なれども浪高し」の報告文である。「皇國の興廢」は全員の士氣を鼓舞して彼の快勝を博したが、「天氣晴朗」の名文は國民を唸らせ、大本營に在つて胸を痛めてゐた人々をホッと安心せしめた。

あの海戰當時の日本海は、よく濃霧が海上を閉ぢこめた。大本營では、「若し此の濃霧のために、我が艦隊の行動を妨げられるやうなことがありはしないか」といふことを非常に心痛してゐた。濃霧のために、或は敵艦を取り逃してしまふといふやうなことがあつては、それこそ取り返しのつかない一大事であるからである。ところが「本日天氣晴朗」である。「しめた」と大本營では飛び上るほどに喜んだ。

續いて「浪高し」——之れも我が艦隊に有利なことである。我が國の軍艦は、みな近海の高浪

に堪へるために舷が比較的高く出來あがつてゐるのに對し、バルチック艦隊の方では反對に低い。若し浪が高ければ、舷の低い艦は、甲板を浪に洗はれて戰鬪行爲を阻害されるといふ戰術上の不利がある。反對に我が艦隊はそれだけ有利である。殊に我が艦隊は此の浪高い近海で常に射擊を練磨し充分の確信を持つてゐるが、敵は半歲の間、長い航海を續けて來たので、其の間さうした技術を充分に練る暇がなかつた。「本日天氣晴朗なれども浪高し」は卽ち「勝算我れにあり」であつた。單に其の日の情景を髣髴として眼前に思ひ浮ばしむるばかりの報告文ではなかつた。そこに秋山參謀の周到なる用意があつた。

最初この第一報告は「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動、之れを擊滅せんとす」であつた。『三笠』の幕僚室で之れだけの報告文が出來たので、秋山參謀の承諾を得て加藤（友三郎）參謀長に提出しようといふので秋山參謀のところへ持つて來た。秋山參謀はちらと一瞥すると「ちよつと待て」と云つて何かをスラ〳〵と書き加へた。それが「本日天氣晴朗なれども波高し」の一句であつた。

戰時中、大本營に達した聯合艦隊第一艦隊の報告書は、大概秋山參謀の手に成つたものであつて、それ等の名報告文は、今でも海軍省に保存されてゐるが、いづれも玉の如き美辭麗句だといはれてゐる。

輝ける殊勳者、聯合艦隊が、いよ〳〵解散される時の「聯合艦隊解散の辭」も矢張り秋山眞之の筆に成つたものである。

「二十閲月ノ征戰已ニ往事ト過ギ我ガ聯合艦隊ハ今ヤ其ノ隊務ヲ結了シテ玆ニ解散スルコトトナレリ」

と筆を起し、

「神明ハ唯平素ノ鍛錬ニカメ戰ハズシテ既ニ勝テル者ニ勝利ノ榮冠ヲ授クルト同時ニ一勝ニ滿足シテ治平ニ安ズル者ヨリ直ニ之ヲ奪フ、古人曰ク勝テ兜ノ緒ヲ締メヨト」

で結んでゐる。

當時の米國大統領ルーズベルトは、此の聯合艦隊解散の辭を見て心から感動した。彼は早速之れを印刷して、米國の各軍隊に配布し、大いに米軍隊の士氣鼓舞に努めたといふことである。

凱旋奏上文の如きも同參謀の筆に成つたもので、是れ亦非常な名文であつた。しかも斯うした名文が、立所に、何の考慮も費さないやうに、極めて無造作にスラ〳〵と出來あがるので、みんな「どうしてあんな名文がスラ〳〵書けるのだらう」と不思議に思つた。

山本英輔大將が、露骨に之れを提督に尋ねた事があつた。

「先生、あなたはいろ〳〵な名文章を立所に書かれますが、何か秘訣があるんですか」

すると提督は事もなげに答へた。

「なに秘訣なんていふものはないよ、唯平常、人の名文によく注意し、新聞や雜誌にあるものでも丁寧に切り抜いておいて、時々それを讀んでみるといふやうな事はやつたね」

提督の歿後、書類を整理してみると、雜記帳の中などにも、いろ〳〵な熟語や成語の拔書等があつた。提督はさうして平素から文章の練磨に努めてゐたのであつた。でなければ、幾ら頭の良い提督だつて、さう立所にスラ〳〵と名文が流れ出るわけのものでもないだらう。

議會で代表報告

明治三十八年戰後の帝國議會は、祕密會を開いて陸海軍から戰爭經過の報告を聽取した。報告はそれ〴〵二時間にわたる長時間のものであつた。その時の海軍の說明者は我が秋山眞之であつた。

秋山の報告演說はなか〳〵立派なものだつたが、その祕密會に出席した議員達はちよつと異樣に感じた。それは代表報告者が陸軍は少將級（松川少將）だのに、海軍はそれよりずつと下級の一中佐であつたことだつた。

「何しろ帝國議會に對する報告である。海軍として僅かに一中佐を以て當らしむる事はどうか」といふやうな意見もあつた。

一人の議員が立つて海軍當局にその理由を質すことになつた。ところが海軍當局の方では「海軍部內で帷幄に參じた人で、此の報告をなすべき最適任者は秋山中佐を措いて他にない」ときつぱり答へた。

眞之は中佐でありながら、中佐以上に重用されてゐたことが、はじめて議員達にも明瞭となつて、ます〳〵秋山の名は高まつた。

再び大學教官に

眞之は戰後再び海軍大學の教官となつた。

戰前教官時代の眞之は古今東西の軍書を渉獵した上、親しく米西戰爭の實戰を參觀して、いはば學術研究と實地見學を竝び行つたものであり、その時から既に兵學家の權威であつた。

それが日露海戰といふ世界的大戰爭の作戰の衝に當つて、縱橫の手腕を揮ひ、學識經驗兼ね備はつた兵學家となつたのだから、これ以上理想的の兵學教官はないわけだつた。

しかも此の理想的兵學家の講義を聽くべき學生が、これまた同じく日露戰役の實戰を踏んで來た兵學上一家の見を有する俊秀である。隨つて教室は教官生徒の間に論戰風發、海軍大學創つて以來の盛觀を呈した。當時の講義速記者はいつたものだ。

「私は海軍大學の速記者を長く勤めてゐますが、今の時代ほど海軍大學の教室の賑はつたことはありません」

眞之が初めて大學教官となつた時の軍略の研究は、專らロシアを假想敵國としてゐたが、日露戰爭後は戰略目標が變つた。

日露戰爭では陸海協力の戰爭であつたが、將來の戰爭はどうか、眞之は今後の戰爭は海軍の優劣如何だと思つた。廣漠たる太平洋を挾んで、世界の大海軍國を相手にしての大戰爭だ。さうした考で、その作戰計畫を考へ出した。

眞之は一室に立て籠り、室いつぱいに太平洋の大地圖をひろげて作戰を練つた。兵棋を使ひ、大好物の煎豆を、大砲や、配置すべき軍艦に擬して研究に餘念がなかつた。

その研究の熱心さは驚くべきもので、當時同僚の教官であり、また戰史家として眞之と共に海軍の雙璧といはれてゐた佐藤鐵太郎中將が「秋山君は餘り此の種の新戰略に頭を使ひ過ぎて多少精神に異狀を來したのではないか」と言つてゐた位であつた。

最後に作戰の成案が成つたものか、「一朝事あり、たとひ敵に九州を取られるとも、歴々として我れに勝算あり」と傲語してゐた。

大演習の明斷

明治四十年九州西南部の海上で、日露戰後最初の海軍大演習が擧行された。

中央審判部の審判長は伊集院元帥(當時中將)、中央審判部員は秋山眞之(當時中佐)であつた。

愈〻大演習が開始され、赤、青の兩軍が互ひに肉薄して決戰距離に入つた時であつた。

模擬戰とはいへ、愈〻戰爭が始まらうとするのに、中央審判部參謀の重任にある秋山中佐は如

何にも悠々と構へてゐて、艦内でさつきから軍醫長と碁を圍んでゐて、何といつたつて碁石を離さうともしない。甲板の幕僚が氣を揉んで、戰鬪開始を知らせに來たが秋山中佐は依然として落ちつき拂つてゐる。

「あゝさうですか、始まりますか、では時間をよくはかつて置いて下さい」

さういつたきりで盤面から眼を離さうとしない。

その内に兩軍火蓋を切つてドン〳〵打ち出す。だが秋山中佐の姿は一向に甲板に現はれないので審判官連がヒヤ〳〵してゐると、戰鬪が終りに近づいた頃にやつと甲板上に出て來た。

出て來ると彼は、兩軍の戰勢を一通りずつと見渡してから傍の士官に訊いた。

「此の對勢で發砲以來何分經ちましたか」

傍の士官がはかつてゐた經過時間を答へた。すると秋山中佐は即座に信號手に命じて、

「〇〇（艦名）半減、△△（同上）廢艦」

といふ信號を發せしめた。「半減」は即ち軍艦の半ば破壞を意味し、「廢艦」は擊沈を意味するのであつて、此の一語は即ち戰の結末に判決を與へたものである。そして信號を發すると同時に、秋山中佐は伊集院審判長に對し、

「演習は終結しました」

と報告した。

が、これは從來の慣例からすると、容易ならぬ問題であつた。「半減」「廢艦」等の審判を下す前には、審判長の判斷を俟たなければならないのである。それを秋山中佐はひとりで獨裁的に決斷してしまつたのだつた。

翌日艦隊が佐世保港に引上げて來た上、其處の水交社で徹宵講評會議が開かれた。

其の前に、赤、青兩軍の審判官齋藤七五郎、谷口尙眞の兩氏から講評の意見書が秋山中佐に提出された。

すると秋山中佐は何と思つたか、一讀するとそれをいきなり、

「こんなものが何になる！　わしは日頃からこんな講評をしろと君達に敎へてはゐなかつたぞ」

と、怒鳴つた。谷口、齋藤兩氏は海軍大學校の學生として秋山から兵學の敎授を受けた人であるが、突然此の霹靂の如き一喝に會つて吃驚してゐると、秋山は更に聲を勵まして言つた。

「その要旨は、それらの講評意見では、味方の事を棚に上げて置いて、敵の非點のみを指摘してゐるが、講評本來の性質は決してさうしたものではない。講評は敵の惡口にあらず、堂々味方

の作戦の勝れるを擧げ、敵の非に觸るべからず、その事は平常大學の教室で十二分に說いた筈ちやないか」

程なく講評會議は開かれた。會議は錚々たる人々が多數集まり、實に堂々たる大會議であつたが、秋山中佐は何と思つたか、會議の席を外づしてしまつた。

翌朝秋山は、その前夜のうちにスラ〳〵と書きあげたものを持つて水交社へ歸つて來た。歸つて來ると部下に命じて大車輪に謄寫版刷りに刷り上げさせた。それは秋山一個の意見で作りあげた大演習の講評であつて、その日伊集院審判長の口から正式のものとして發表された。

多數の審判員が徹宵して會議した講評は、全くムダになつてしまつたので、「秋山横暴」の聲が起つた。前の審判長を無視した獨斷も之れに結びつけられて由々しき問題にならうとした。

しかし結局問題は、秋山の書いた講評の價値である。その後大演習の戰況に就き、艦の配置、射距離、水雷術其の他あらゆる部門に分ち、それ〴〵專門の係員によつて精細な科學的研究を遂げた結果、秋山が戰勢を一望して刹那的に下した「半減」「廢艦」の宣言は、一分の隙もない完全を極めた判決であつて、隨つて秋山の認めた講評も實に立派なものである事が判明した。

かうなつてはどうにも致し方がなかつた。明斷神の如き秋山の戰術眼に對して舌を捲かざるも

のはなかつた。で、「秋山横暴」の聲もいつか消滅して、今更の如く秋山を謳歌する聲がこれに代つた。

立派な副長

海軍大學教官は二年餘りで、眞之は『三笠』の副長に補せられた。それから再び海上の生活が始まり、『秋津洲』、『音羽』、『橋立』、『伊吹』等の艦長、第一艦隊參謀長等に歷任した。

眞之が『三笠』副長に補せられたのは明治四十一年二月であつた。

はじめ秋山中佐が『三笠』の副長として赴任することになつたと聞き、艦長松村直臣大佐を初め乘組員一同雀躍りして喜んだ。

「日露戰爭で有名なあの秋山中佐が、本艦復活の最初の副長として來るとは光榮誠に此の上ない」

さう言つて、松村艦長は包み切れぬ喜びの顏を、配下の水兵達の前で見せたのであつた。

それには理由があつた。

先に爆沈した軍艦『三笠』は、その前年の明治四十年に浮き上り、その後復舊工事に幾月か費して、今度再び新裝を凝らして海上に浮んだのであつて、乘組員の氣持からいへば、新造艦も同じことであつた。

新造艦では、乘組員はその初代の艦長よりも副長といふものに對して、殆んど迷信的なくらゐに、その人選を氣にするものである。といふのは、軍艦では艦長よりも女房役の副長がいろ〳〵雜多の艦内の要務に當り、これを統轄するからである。だから軍艦が出來た時、最初の副長が、艦の爲めに好い慣例を作つたら、その慣例はいつまでもその艦に殘るわけで、隨つて乘組員の艦上生活もそれだけ幸福になれるのである。

其の復活の『三笠』の副長が、當時部内で名聲嘖々たる秋山中佐であつたから、乘組員が殆んど有頂點に喜んだのも無理からぬ話であつた。

果然、副長として『三笠』に乘り込んで來た秋山中佐は、その態度といひ執務振りといひ、悉く乘組員を滿足させた。任期は僅か八ケ月だつたけれど。

その性質からいへば、眼から鼻へ抜けるやうな眞之ではあつたが、副長として部下に對する態度は極めて鷹揚であつた。

軍艦では係りがあつて、毎日「食事報告」といふものを副長にすることになつてゐる。これは賄費の問題などが關聯してゐるので、動もすると係りの間に不正問題を生ずる虞れがある。それで食事報告といふものがあるのだが、それが五月蠅い副長であつたりすると、針で重箱の隅をつつくやうな事をいふ。ところが眞之は、その報告書を一度だつて見ようとはしなかつた。係りが報告書を持つて行くと默つて印形を出して係りに渡す、係りは報告書に眞之の印を捺して行く、俗にいふ盲判以上のやり方だつた。それでゐて、いつの間に見るのか、要所々々は押へて行くといふやり方だつた。

食事係りの方では、印形まで渡されるのだから絶對信任を受けてゐると同樣であるといふので、此の人の爲めに間違ひがあつてはならないといふ責任感が働き、却つて重箱式のやり方よりも成績がよかつた。眞之は人を使ふことも斯く巧みで、全く立派な副長振りであつた。

部下を勞はる

提督は部下の將校に對して言葉の綺麗な人であつた。軍隊生活をしてゐれば、部下に對して

「お前」「貴様」など呼ぶのが普通であるが、提督は決してそんな言葉は使はなかつた。必ず「あなた」と呼び、何を命ずるにも「下さい」をつける。そして仕事をやらした後では大抵「有難う」をいふ事を忘れない。斯ういふ事は艦上生活をやつてゐる人にはなか〳〵出來ない事だ。

また部下の者の建言を提督は非常に重んじてゐた。計畫をもつて來ると、餘程杜撰なものでない限りは大抵實行させた。若しそれが失敗すると「お前では駄目だ」と頭から斥けてしまふやうな事はなく、失敗の原因その他に就いて諄々として説明してやるといつた風だつた。

部下に對しては、此の樣に慈母のやうな將軍であつたが、同輩に對してはどうかすると怒ることがあつた。

それは晝の食事後か何かの時間の時だつた。眞之が他の士官等と一緒に艦内のソファーの上に寢ころんで雜談をしてゐると、航海長の某中佐が入つて來て、

「士官室でゴロ〳〵寢てゐるから、フ・ール（艦の前部で兵員の居住所）の兵隊が暇さへあれば寢てゐる」

と叱言がましく言つた。これは航海長としての越權の言葉である。眞之は赫となつて、いきなりパッと仁王立に立ち上つた。

「何だい、フ・ールの兵隊が寢ようと寢まいと、君の知つた事か、默れッ！」

その權幕に恐れて、某中佐は這々の體でその場を去つた。痛烈な怒聲であつたが、しかもこれが、同格の中佐が中佐を罵つた言葉だから面白い。——蓋しこれも眞之の性格の閃きであらう。

提督が乘組員の考課表を書くのに例の達筆が餘程役立つてゐる上に、出來るだけ部下の者を好意で見ようとする美しい態度が自然表の中に現はれてゐた。で、或る時、『三笠』艦上で艦隊の進級會議が開かれた時、某艦長が眞之に向つていつた。

「秋山君、どうも筆がいくら立つたつて、あゝ書かれては我々どうにもやりきれない。他艦の乘組よりも君の艦のをどうしても最上位に置かざるを得ないからね」

すると眞之は頭を掻き〳〵笑つた。

「いや、どうも、筆が廻りませんでねえ……」

艦内の諸改革

眞之は『三笠』副長から諸艦の艦長をしてゐた間に、艦の諸制度、諸慣例といふものに尠から

さる改革を加へた。

眞之が『三笠』の副長になるまでは、準士官以上の上陸は一々副長の所へ行つて許可を得なければならなかつた。此の上陸許可は士官、準士官にとつては常に惱みの種であつた。

上陸は當然許される事であつても、その許可を與へるといふ事が何となく恩惠を與へるやうな氣がするのか、副長によつては隨分意地の惡い厭がらせをする者もあつた。たとへば軍艦が碇泊して上陸時間近くになると、故意に姿を何處かへ隱してしまふので、上陸許可を願ふにも、副長が居なくて困らされるとか、許可を頼みに行つても知らん顏をして返事をしないとか、さま〳〵な不快な事をしたものである。

ところが眞之が『三笠』副長になると、一大英斷を以て此の上陸許可の方式を廢した。その代り副長室に名札架を作つて、準士官以上の者の名を表を黑、裏を朱に書いて置いた。外出する者は、一々副長の許可を得ないで、隨意に名札を引繰り返して上陸する事とした。しかも其の名札架を作つたのは、若し不在の者に用があつた時、呼びに行つた者が、無駄な時間と勞力を使つて探すのが氣の毒だから、といふ理由であつた。

此の上陸許可方式の廢止は、乘組員にとつてどんなに幸福だつたかわからない。尤も是れはほ

んの眞之が副長在任の時だけで、次の副長からは、やはりもとの方式に戻つてしまつたが、しかしこれは確かに進歩した情理に通じたやり方であつた。それから十年ばかり經る間に、許可方式はボツ〳〵各艦で廢止され、今ではすつかり昔の夢になつてしまつた。

軍艦内各部の呼稱が日本式に變つたのも、また眞之の遺した仕事の一つであつた。

從前は軍艦の各部は英語で呼んでゐたものであつたが、眞之は「日本の海軍は日本の海軍である。艦艇の呼稱を何も英國に學ぶ必要はない、宜しく日本語を以て呼ぶべきである」といつて、軍艦内の英語の呼稱を片つ端から日本語に改めた。そして艦上の要所々々にそれらの日本語の改稱を書いて貼りつけた。

たとへば「ブリッヂ」を「艦橋」、「ボート」を「端艇」といふが如くに。

修養の人

眞之は天才の人であると同時にまた修養の人であつた。

眞之が自分の性格のうちで最も缺點と見たのは短氣であつた。幼い時屢、近所の友達と喧嘩し

て相手をやつつけては尻ばかり貰つてゐたのは、つまりは幼少から短氣な性格であつたからだつた。

眞之は中年の後、特に此の短氣の性格を矯めるには餘程の苦心を拂つてゐた。軍艦『三笠』の副長時代、副長室の天井の本棚の下には「短氣は損氣、急がば廻れ」と紙片に書いたものが貼られてゐた。眞之は、それを座右の銘としてゐたのであつた。

斯うした日頃の修養は、殆んど理想に近い域まで眞之の缺點を匡正してゐたらしかつた。眞之が副長や、艦長や、水雷戰隊司令官として部下から推服尊敬されてゐたのは、さうした修養の結果に於ける寛大性（一つは人情深い天性にもよるが）の賜であつた。

明治二十七年十二月三十日のことであつた。むろん日清開戰中の話であるが、當時眞之は軍艦『筑紫』の航海士であつた。

その日の正午大連港の戎克灣で陸海軍合同の宴を神戸丸で開き、會する者四百名餘に及んだ。その席上で眞之は血氣にはやる青年時代の元氣で、仁禮大將の令息で、酒狂の評のあつた同輩の景一氏と言葉の爭ひが募つて大格鬪を演じた。その結果、眞之はその有名な亂暴者のために前齒を二三本折られた。眞之も相當に酒が廻つてゐたらしかつた。

が、眞之は後になつて醉餘ではあるが自分にも非があり大人氣ない事に心づいた。で、前齒を折られながら、翌日仁禮氏をたづねて進んで握手を求め、極めて虛心坦懷に仲直りをした。仁禮氏の方では思ひがけない眞之の寛容な態度にすつかり恐縮してしまつたといふ話がある。これは眞之が自分の短氣を顧みて、深く反省し矯正に努めた結果に外ならない。

青年指導

提督が意を用ゐてゐたものは、ひとり肉身の子女ばかりでなく、一般青年男女の教育指導に對しても平常少からぬ關心を持つてゐた。

就中提督の最も强調したものは、精神方面に於ける教育であつた。それは教育上知識偏重主義の排斥である。近頃の教育は兎角知識偏重に過ぎ、學生はたゞ學校の成績さへよければよいと思ひ、父兄もまたさう信じてゐるがあれは大きな誤謬である。昔は親孝行を以て道德の根髓としたが、今は孝道は全く廢れてしまつた。教育勅語にも父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭謙己を持しと、道德の守るべきを先づ擧げられ、然る後に學を修め業を習ひと仰せら

れてゐる、その間自ら本末が明示されてゐる。然るに現今の教育はいつしか本末を誤り學を主に德を從にするは錯誤も甚だしい……と、大體かういふ趣意から文教方面の缺陷に對して痛憤してゐた。

同時にまた日露戰後澎湃として起つた國民奢侈の風にも、提督は憂慮措く能はざるものがあつた。此の際一層自重して、國民剛健の風を養ひ、舉國一致皇國に盡さねばならぬと、これまた機會ある毎に說いてゐた。

これだけでも提督が青年指導に對する態度を親知するに充分であるが、曾て明治四十三年日本海々戰記念會に、當時『出雲』艦長で大佐だつた彼が試みた「日本海戰勝の人爲的原因」と題する左の講演は、精神教育上最も適切で且つ趣味深きものがある。

日本海の大海戰の結果は、考へれば考へる程、偉大なるものであります。大小四十隻に近き敵の波爾的艦隊は、或は擊沈又は捕獲或は擱座自滅等に因り、殆ど全滅しまして、僅に二三の小艦が馬尼剌と浦鹽に逃延びた計なるに反し、我軍に於ては唯だ水雷艇三隻を失うたのみで、人員の死傷も六百餘名に過ぎません。素より國家の安危に關係する大決戰でありますから、我々戰鬪に參加したるものも、初めより敵を擊滅する代りには、少くも我艦艇の三分の一を失ふの

心算でありましたが、此の如き意外の結果を呈し、實に古今東西の戰史に類例を見ざる大勝利となりまして、之を勝利と謂ふよりは寧ろ不可思議の奇蹟と稱するのが適當かと考へます。而して此の如き一大戰果を收め得たる戰勝の原因は申すまでも無く、皇威神德の然らしめたもので、東鄕大將の日本海々戰々報の終尾にも明白に其事が述べてあります。卽ち「聯合艦隊ガ此クノ如キ奇勝ヲ制シ得タルハ、一ツニ　大元帥陛下御稜威ノ致ス處ニシテ、素ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ、特ニ我軍死傷ノ寡少ナリシハ、歷代神靈ノ加護ニ依ルモノト信仰スルノ外無ク、撓キニ敵ニ向テ、勇進敢鬪シタル麾下將卒モ、皆此ノ成果ヲ見ルニ及ンデ、唯ダ感激ノ極、言フ處ヲ知ラザルモノヽ如シ」と。實に此の戰勝は神業で人間業とは思はれない。神國の神國たる所以を解せず、皇威皇德の如何なるものなるかを自覺せざるものは、或は此報告を讀んで一片の形式的文字と思ふかも知れんが、眞摯率直なる東鄕大將が苟くも大本營に報告せらるゝのに、誠心誠意より出でざる虛僞の文句のあらう筈はない。此大信念があればこそ、天佑神助をも蒙りて、到底人爲的には得られざる大奇勝が得られたのであります。さりながら又天は自ら助くるものを佑くる譯で、人爲を盡した上ならでは天命に應ずることは出來ぬかと信じます。其人爲的原因に就ては、人各〻見る處がありまして、或は敵の戰略戰術が拙劣であつたとか、